

長野県松本市

松本城下町跡

ROKKU

六九

第4次

—— 緊急発掘調査報告書 ——

2002.3

松本市教育委員会

長野県松本市

松本城下町跡

ROKKU

六九

第4次

——緊急発掘調査報告書——

2002.3

松本市教育委員会

序

六九町は現在の大手2丁目の南端に位置し、松本城下町跡の南西部にあたります。松本城下町跡の調査は数多く行われていますが、六九町については平成12年に初めての発掘調査が行われて以来、今回で4箇所目の調査となります。

このたび当地に松本六九リバーサイド地区市街地再開発事業が計画されたため、松本市が松本六九リバーサイド地区市街地再開発組合から委託を受け、埋蔵文化財を記録する目的で緊急発掘調査を実施することとなりました。

発掘調査は平成12年9月から平成13年4月にかけて行われました。長期間に渡る調査となりましたが、関係者の皆様の御尽力により無事終了することができました。発掘調査の結果、古墳時代および中世から近世にかけての、様々な時代の生活跡を発見することができました。これらは今後、地域の歴史を解明するうえで、大変役に立つ資料になることと思われまます。

しかしながら、開発事業に先立って行われる発掘調査は、記録保存という遺跡の破壊を前提とする側面があることも事実です。開発により私たちの生活が豊かになる一方、それにともない歴史遺産が失われてしまうのは残念なことです。発掘調査により当時の生活が明らかとなり、私たちの郷土松本が歩んできた歴史が一つずつでも解き明かされることは大変貴重なことだと考えます。

最後になりましたが、発掘調査に多大な御理解と御協力をいただいた松本六九リバーサイド地区市街地再開発組合の皆様、地元関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成14年3月

松本市教育委員会 教育長 竹 淵 公 章

例 言

- 1 本書は、長野県松本市大手2丁目231他において、平成12年9月18日から平成12年10月27日の間及び平成13年2月22日から平成13年4月16日の間行われた、松本城下町跡六九第4次調査の報告書である。
- 2 本調査は、市街地再開発事業に先立ち、松本六九リバーサイド地区市街地再開発組合と松本市が発掘調査委託契約を締結し、それに基づいて松本市教育委員会が行った緊急発掘調査である。
- 3 本書の執筆は、1章：事務局、2章1節：森義直、2章2節及び4章1節：竹内靖長、4章2節：廣田早和子、4章3節：赤羽裕幸、4章4節：中村慎吾、5章：井上直人、6章：パリノ・サーヴェイ株式会社、その他を赤羽裕幸と小山高志とが行った。
- 4 本書作製にあたっての作業分担は以下のとおりである。
遺物洗浄：河野清司、福島勝、百瀬二三子
遺物保存処理・復元：内澤紀代子、洞沢文江、廣田早和子
遺構図整理：赤羽裕幸、石合英子、小山高志
遺物実測：菊池直哉、中谷高志、竹内直美、竹平悦子、松尾明恵、望月映
トレース・版組：赤羽裕幸、窪田瑞恵、小山高志、林和子、
写真撮影：（遺構写真）赤羽裕幸、荒木龍、小山高志、櫻井了、中村慎吾 （遺物写真）宮嶋洋一
（航空写真）株式会社ジャステック
- 5 本書の中で略称を用いる場合は次のように省略した。
第Ⅰ検出面→Ⅰ検、建物址1→建1、土坑1→土1、溝状遺構1→溝1
- 6 本報告書の作成にあたっては次の方々より多大なる御教唆、御協力をいただいた。記して感謝申し上げる。
井上直人氏、瀬川長広氏、森義直氏、山本英二氏
- 7 本調査で得られた出土遺物及び調査の記録類は松本市教育委員会が保管し、松本市立考古博物館（長野県松本市大字中山3738-1 TEL 0263-86-4710）に収蔵されている。

目 次

序

例言・目次

1章 はじめに	1
2章 調査地の環境	
1節 地理的環境	4
2節 歴史的環境	6
3章 調査結果	
1節 調査概要	10
2節 出土遺構	14
4章 出土遺物	
1節 土器・陶磁器	35
2節 木器	54
3節 石器	62
4節 金属器	65
5章 付編1	69
6章 付編2	72
写真図版	

1章 はじめに

1節 調査に至る経緯

今回調査を行った六九は松本城下町跡の南西部分に該当し、平成11年度に第1次調査を始めとする3度の調査が行われており、今回が第4次の調査となる。

松本城下町跡は松本城を中心として現市街地部分に広がる近世町屋跡の遺跡であり、近年の市街地における区画整理や再開発などに伴って各所で発掘調査が行われ、多数の遺構、遺物が発見されてきた。

こうした中、六九商店街の一部、松本市大手2丁目231の10一帯に六九リバーサイド地区市街地再開発事業が計画された。六九は城下町や蔵・厩などが存在したと伝えられている場所であり、周知の遺跡である松本城下町跡の範囲内に位置している。また、平成11年度に行われた六九第2次・第3次調査においても今回の事業地に隣接した地点で遺構・遺物が確認されており、事業が実施された場合は埋蔵文化財が破壊されると予想されたため、松本市教育委員会は埋蔵文化財の保護について事業主である松本六九リバーサイド地区市街地再開発組合と協議を行った。その結果、事業地内における埋蔵文化財の破壊は避けられないとの結論に至り、保護措置として工事着手前に緊急発掘調査を実施して遺跡の記録保存を図ることとなった。

平成12年9月18日付で松本市と松本六九リバーサイド地区市街地再開発組合が委託契約を締結し、松本市教育委員会が発掘調査を行った。発掘調査はA地区とB地区の2地区に分けて行われ、同教育委員会では次節のような調査体制を組織して、同年9月18日から10月27日までA地区において、翌平成13年2月22日から4月16日までB地区において現地調査を実施し、調査終了後は室内における整理作業及び本報告書の作成を進めて、平成13年度本報告書を刊行するに至った。

2節 調査体制

調査団長 竹淵公章（松本市教育長）

調査副団長 大澤一男（松本市教育部長）

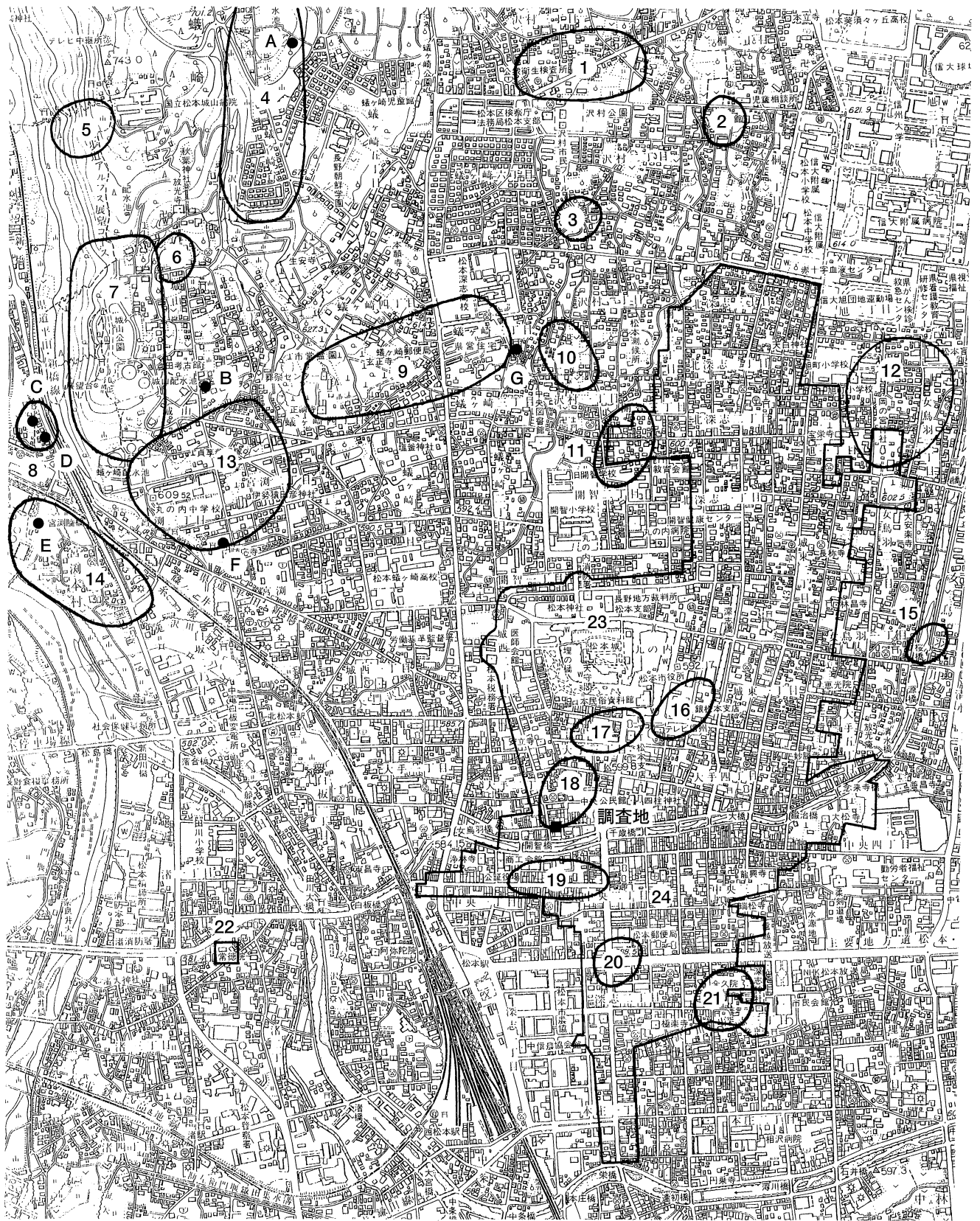
調査担当者 ≪A地区≫ 小山高志（文化課主事）、荒木龍（同嘱託）、櫻井了（同）、
≪B地区≫ 赤羽裕幸（文化課主事）、櫻井了（同嘱託）、中村慎吾（同）

調査員 今村克、松尾明恵、宮嶋洋一、望月映、森義直

協力者 浅井信興、荒井留美子、飯田三男、五十嵐周子、石合英子、入山正男、内澤紀代子、
岡村行夫、菊池直哉、窪田瑞恵、河野清司、輿喜義、小山貴広、芝田とり子、下条ちか子、
鷺見昇司、竹内直美、竹平悦子、田中一雄、中上昇一、中谷高志、中山自子、林和子、
廣田早和子、福島勝、二木一男、布野行雄、布野和嘉夫、布山洋、洞沢文江、待井敏夫、
道浦久美子、村山牧枝、百瀬二三子、山崎照友、横山清、米山禎興、渡辺順子

事務局 松本市教育委員会文化課

木下雅文（課長、～平成13年3月）、有賀一誠（課長、平成13年4月～）、
熊谷康治（課長補佐）、松井敬治（同）、直井雅尚（主査）、武井義正（主任）、
久保田剛（同）、渡邊陽子（嘱託）、塚原祐一（同）



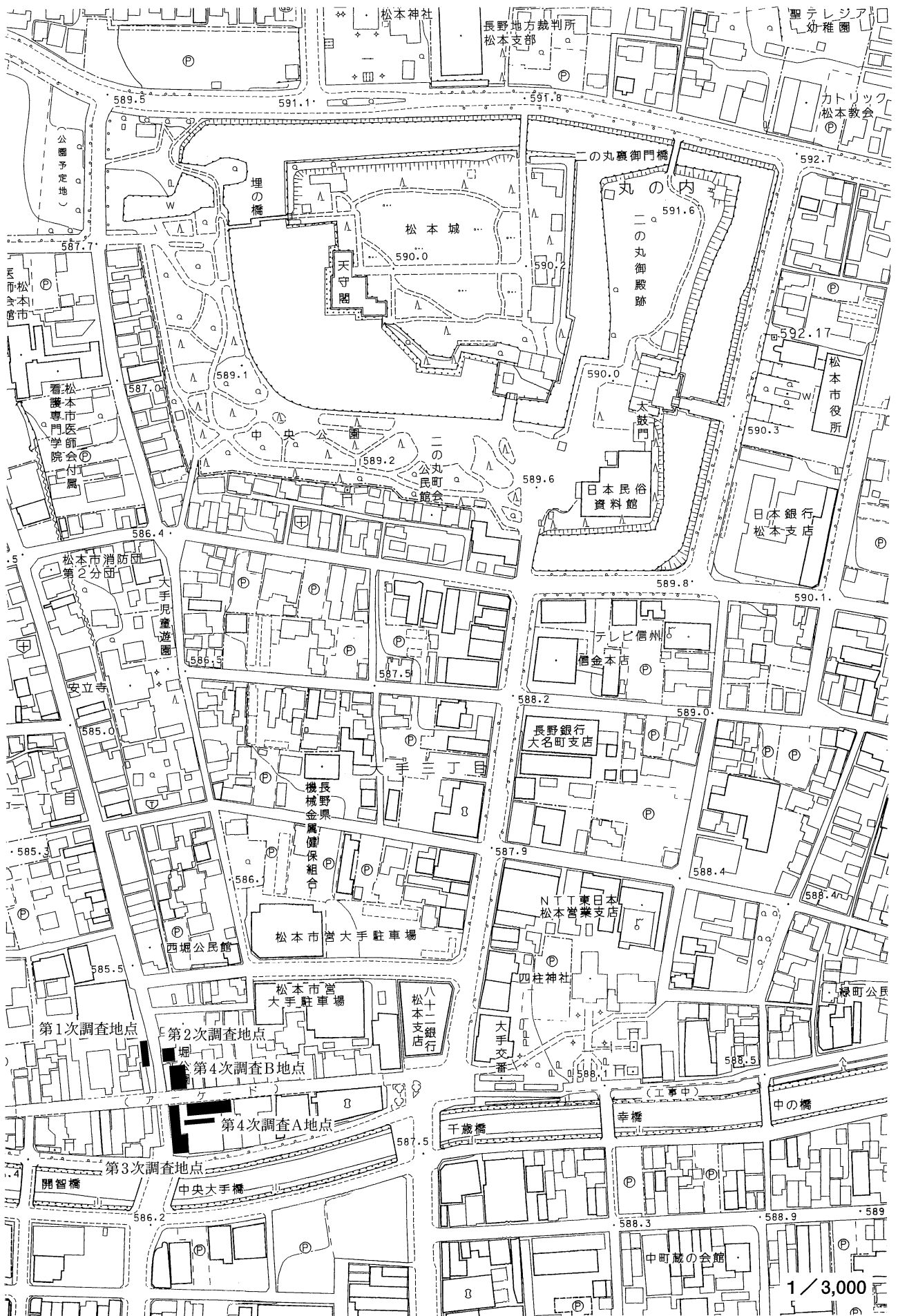
遺跡

- | | | |
|-----------|-----------|-----------|
| 1 旧射の場西遺跡 | 7 犬飼城址 | 13 城山腰遺跡 |
| 2 元原遺跡 | 8 宮瀨二つ塚遺跡 | 14 宮瀨遺跡 |
| 3 沢村北遺跡 | 9 蟻ヶ崎遺跡 | 15 女鳥羽川遺跡 |
| 4 峰ノ平遺跡 | 10 沢村遺跡 | 16 丸の内遺跡 |
| 5 鳥居山古墳 | 11 田町遺跡 | 17 大名町遺跡 |
| 6 放光寺遺跡 | 12 岡の宮遺跡 | 18 土居尻遺跡 |

古墳

- | |
|-------------|
| A 峰ノ平1号古墳 |
| B 開き松古墳 |
| C 宮瀨二つ塚1号古墳 |
| D 宮瀨二つ塚2号古墳 |
| E 宮瀨1号古墳 |
| F 勢多賀神社裏古墳 |
| G 饅頭塚古墳 |

第1図 周辺遺跡図



第2図 調査位置図

2章 調査地の環境

1節 地理的環境

本遺跡の位置と立地

本遺跡は松本旧市街地にある松本城の南約350m～450m付近で女鳥羽川の右岸沿いにあり、標高は約590mから584mへと南南西方向に緩く傾斜している。

旧市街地は広い松本盆地中央の東寄りにあり、一辺数km四方の不定形をした二次的小盆地を形成している。東部と北部は第三紀層の筑摩山地で、西部は市街地と接する第三紀層とそれに載る洪積層の低い山地により三方を囲まれ、南は開けている。この旧市街地に現在流入している主な河川は、東部山地から西流する薄川と、東北～北部山地から南流する女鳥羽川であり、この両河川により複合扇状地が形成されている。両河川共、河況係数が極めて大で、歴史的にはしばしば大洪水を引き起こし幾重にも、ふるい分けの悪い洪水性堆積物が載っている。旧市内付近はこのような扇状地堆積物の上でありながら、県内の他の扇状地とは少し異なり、地下水面が高く湧水にも富んでいる。これは単に扇状地の末端での集水の結果だけでは説明は困難で、地史的要因も考える必要がある。

本遺跡周辺の地形・地質

松本盆地は南北に長い構造性の大盆地であり、西部と南部は飛騨山地で中・古生層とそれを貫く花崗岩やその他の火成岩からなっている。これ等の岩石は主に梓川水系により浸食され、大量の土砂が盆地の南半分を埋めている。更に南から北流する奈良井川・鎖川その他の河川による堆積物が加わり広大な複合扇状地を形成している。この扇状地堆積物は旧市内の下層にも厚く堆積していることがボーリングの結果判明している。

一旦盆地が形成されてから後、洪積世後期後半頃から旧松本市周辺に局部的な構造性の盆地の誕生が始まり、その西側（城山）は逆に傾動しながら隆起を始め、それまで大口沢方面に流れていた古女鳥羽川は、次第に南西→東へ押しやられ洪積世の末頃第三紀層の上に古女鳥羽川の礫層を載せて山地化し、隆起の進行と共に右岸に三段の段丘面を形成しつつ市街地東部を流れるに至った。

女鳥羽川は筑摩山地の三才山峠（1500m）から流れ出す本沢を始め幾つもの沢と合して西に向って流れ、稲倉から120°向きをかえて市街地に向って南流し、流路の首振りを繰り返して貝殻を伏せたような地形、即ち扇状地を形成している。一方薄川は市街地の東部、三峰山や扉峠付近を源流とし、幾つかの沢を合流しつつ西流して入山辺地区の西端付近を扇頂とする扇状地を形成している。

以上2つの扇状地は湯川付近で接し、これより南西方向には流路の首振りと共に、両者がサンドイッチ状に、あるいは混成して堆積し複合扇状地を形成している。発掘地点を含む旧市街地の南西部は、この複合扇状地上にある。

発掘地点付近の地形と地質

上述したように旧市街地は、〔松本盆地の時代〕次に洪積世の後半から始まった〔局部的構造盆地の時代〕の二段階を経て現在に至っているため、地下40～50m以深には梓川水系を主とする中・古生層からの砂礫が堆積しており、上部の土層は局部的盆地の形成に伴う筑摩山系の女鳥羽川・薄川の土砂が堆積している。礫の岩質は女鳥羽川系は珩岩が多く砂岩、石英閃緑岩、第三紀層の礫岩から転出した粘板岩・チャートの小礫である。薄川系は緑色火山岩類、安山岩、石英閃緑岩、砂岩、珩岩、などであり、両河川共筑摩山系から供給されたものであるため混成された土層では見分けが困難である。

発掘地点での土層について

先年岡田地区から蟻ヶ崎にかけての発掘調査により、女鳥羽川が平安時代には岡田町の西を流れ、現在の

大口沢川とほぼ同じ流路をたどっていたことが判明した。繰り返し洪水による氾濫が起き、平安時代の末頃の大洪水のとき、洪水自身の押し出した大量の土砂による堆積で流路を東にとるに至った（各報告書を参照されたい）。

堆積特に河川に近く洪水の直撃を受けた所は、極めてふるい分けの悪い礫土層となり、直撃を受けない場所や安定期には、雨水や小流により洪水堆積物からシルト質が洗い出されて運ばれ厚く堆積している。

発掘地点を含む旧市内南西部は、土層上部には洪水による黄褐色砂礫層が三層程存在する。B地点では、-250cmまでの間に三層の洪水層があり、一番下の洪水層は-112cm~-100cmである。この洪水の後100cm堆積するに要する年数を推定するには、古墳時代の木製品が-240cmで出土しているの、年平均約1.6mm前後の速さで堆積（沈降）していることになる。したがって100cm堆積するに要する年数は約600年という値になり、これより上の2層の洪水層は江戸時代後半のものということになる。下部の約600年前の洪水層を境にして、それより下は洪水の直撃を受けておらず細砂やヨシの茎や根を含む泥炭質粘土層などの厚い腐植に富む土層となっている。即ち上部-110cm~0cmは女鳥羽川の洪水による黄褐色礫土層や、人為的に城山方面から運ばれたと推定される黄褐色礫土と湿地性の黒色土層より成り、下部の沼地性の非洪水性堆積物とは異なっている。

沼地化の原因について

以前考えられた説は扇状地の末端でみられる湧水が主な原因と考えられてきたが、今回の発掘で判明したことはB地点では上記の如く年平均約1.6mmの速さで沈降していることになり、これは、松本盆地中央部の新村~穂高町付近の平均1mmに比して大きな値である。このことは洪積世末に起きた局部的な造盆地変動が現在も進行中であるとみなしなければならない。そのようにとらえないと旧市内では大火の後必ず土盛りをしているのを説明するのが困難で、地盤沈下の結果、湿地化を逃れるため火災を期に土盛りをせざるを得なかったと解すべきであろう。

人為的女鳥羽川の変化について

上述したように住宅地としては適さない土地柄であるが、中世末頃微高地に築城し、その防衛上からは、地下水位が高く少し掘れば湧水が到る所にみられるので堀に水を溜易く、更に女鳥羽川の流路を城の東と南を囲むように90°曲げる改修を行なうなど人為的に流路を変えている。この川の改修により川中は中流域よりも下流域の方が狭くなり、その上流路が90°曲げられているため、近世、洪水時には改修域で氾濫が起き易くなったと推定される。

現在女鳥羽川は白板付近で田川に合流しているが、地形的には改修前の一時期、清水付近で曲がらずに直進し埋橋付近で薄川と合流していた可能性が高い。

2節 歴史的環境

1 六九周辺における原始・古代・中世の遺跡

本遺跡が位置する松本市中心部は、近年の市街地再開発事業などに伴い、継続して発掘調査が実施されてきた。これらの調査では、近世の松本城下とその下層から新たな遺跡が発見され、非常に大きな成果を得ている。以下、近年の発掘データから、松本市中心部周辺の遺跡分布や立地について時代を追って記述する。

旧石器時代：城山丘陵の蟻ヶ崎（放光寺）より、尖頭器が1点表面採集されているが、低湿地帯に立地する中心市街地からの出土はない。

縄紋時代：松本城二の丸からは中期の打製石斧が出土している。また、二の丸から北400m地点の旧田町小学校地点からは、中期の土器片が出土している。丸の内遺跡では、日本銀行松本支店の建設工事（S31～32年）の際に、後期後半の土器とともに、土偶片・被熱しているシカの大腿骨片・クルミ・トチの実が伴出している。三の丸跡土居尻第2次調査（H13年）では、下層より加曾利B式（後期）の土器が出土し、大名町遺跡が西側に広がっていることが確認された。この地点より700m東には、女鳥羽川遺跡がある。昭和45年に女鳥羽川河川改修工事で川底を掘削したところ、後期～晩期の遺物が出土した。晩期前半の土器が主体を占め、大形土偶、土製耳飾、土製円盤、石鏃などがみられた。その他、城山丘陵一帯には、山ノ神遺跡（前期末）、城山腰遺跡、峰ノ平遺跡（中期～後期初頭）などが分布している。

弥生時代：城山丘陵から宮渕一帯に遺跡がみられる。城山腰遺跡（中期～後期）、峰ノ平（中期）、沢村遺跡（後期）、宮渕遺跡（調査時：宮渕本村遺跡）などが分布している。城山腰遺跡は、昭和25年・38年、平成13年度に調査されている。昭和25・38年の調査では、底部に布目圧痕のある土器や大型蛤刃石斧、細型管玉、磨製石包丁など多量の出土遺物を得ている。平成13年度に行われた第2次調査では、竪穴住居址1軒と鉄製の鉈が出土した。宮渕遺跡は、昭和60～62年にかけて調査され、中期～後期の住居址84軒や土器棺墓などが発見された。この調査で発見された第5号住居址は、土器製作工房の性格を持つものとされており、全国的にみても貴重な例といえる。

古墳時代：今回報告する六九4次調査地点では、城下町下層から古墳時代前期の土器片とともに、竪穴住居の垂木とみられる木製品が出土している。また、近隣の三の丸跡土居尻第1次調査（H3年度）でも、古墳時代の高杯が出土している。今回の調査結果を踏まえ、城下町下層の別遺跡として、土居尻遺跡を新設した。平成11年度に実施した城下町跡宮村町1次調査では、城下町下層から古墳時代前期の住居址1軒と土坑1基が検出された。これまで、この周辺に古墳時代の遺跡は確認されておらず、新発見の天神西遺跡とした。岡の宮遺跡（H12年度調査）では、古墳時代前期の住居址4軒が調査されている。女鳥羽川遺跡では中期、宮渕遺跡では後期の住居址が調査されている。古墳は宮渕から城山丘陵に集中してみられる。城山腰では、5世紀代と推定される古墳が7基ある。開き松古墳は、明治初年の発掘で、眉庇付冑ほか多数の出土遺物が確認された。松本深志高校の南にある饅頭塚古墳は、明治6年の発掘で剣、直刀、勾玉ほか多数の遺物が出土した。遺物から5世紀後半の築造と考えられる。また、宮渕遺跡では、5世紀後半の古墳が2基調査されている。これらの結果から、城山丘陵周辺の古墳築造年代は、5世紀代に限られていることがわかる。

奈良～平安時代：奈良時代の集落は、蟻ヶ崎遺跡（H9年度調査・住居址4軒）、旧射的場西遺跡、岡の宮遺跡（H12年度調査・住居址3軒）が調査されている。平安時代では、旧射的場西遺跡、蟻ヶ崎遺跡で住居址が発見されている。

中世：城下町跡伊勢町第23次調査では、城下町下層より12～13世紀代の遺構・遺物が発見された。これまで、このあたりには下層に遺跡は存在しないと考えられていたが、中世に集落が存在することが新たに判明した。この調査結果から、下層の中世集落は伊勢町遺跡として遺跡登録した。この中世集落は、伊勢町東半部から本町にかけて広がる安定した砂質層上にあり、低湿地帯のなかに縞状に残った微高地上に形成され

たと考えられる。これらのことから、本町から伊勢町東半部にかけての箇所は、中世の段階から微高地状地形を呈しており、そこに鎌倉期の集落が形成され、やがて城下町時代に野麦街道を通し、伊勢町・本町が形成されたと推定できる。

2 近世松本城の略史

松本城は、その前身である深志城を基盤として築城されたといわれている。深志城は、永正元年（1504）に島立氏により築城されたとも、室町時代より深志介を名のっていた坂西氏の居館を基盤にしていた、とも言われているが、実際のところ詳細は全くわかっていない。平成13年に実施された三の丸跡土居尻第2次調査では、16世紀前半（一部15世紀前半）までさかのぼる堀と土塁が発見され、深志城時代の解明に大きな資料を得た。深志城は、もともと小笠原氏の本城である林城の支城の一つにすぎなかったが、天文20年（1550）に武田晴信が松本平に侵攻して以後、30年間にわたり武田氏の信濃侵攻の拠点となった。

天正10年（1582）、小笠原長時の三男貞慶が武田氏滅亡を機に、深志城を回復し、安曇・筑摩両郡の支配権を獲得した。貞慶は入城して以後、深志城を松本城と改め、城郭の町割を行なった。『信府統記』によれば、城郭部分の道筋を整え、町割をして、市辻、泥町あたり（地藏清水から大柳町にかけての場所と推定される）にあった町屋を、女鳥羽川より南に移し、侍屋敷と町屋を区別して居住させた。そして、三の丸には堀を掘り、土塁を築いて、四方に5箇所の大城戸を構え、南門を大手と定め、小路を割り、侍屋敷を建てたのである。こうして、武家地としての三の丸と町人地である本町、中町、東町とそれに伴う枝町の道筋と町割りができ、城下町の基本が造られたのである。

小笠原氏が豊臣秀吉により古河へ転封となり、変わって石川数正・康長父子が入封すると、石川氏は小笠原貞慶の築いた城郭に、天守閣を築いて城下町の拡充を行なった。

その後、石川氏が改易されると、慶長18年（1613）に小笠原秀政が飯田から再び入封した。秀政が入封した頃は、城下町の町割が出来ていてもまだ空き地や空き家が多かったが、飯田から従った人々や、城下町の再整備により集住が進んだようである（『松本記』）。

続いて元和3年（1617）戸田康長が入封する。戸田氏の時代には、安原町西に足軽屋敷の建設があった。

戸田氏のあと、寛永10年（1633）に徳川家康の孫にあたる松平直政が入封すると、天守閣修復工事が行なわれた。この修復により辰巳附櫓と月見櫓が新たに付設された。さらに二の丸には、幕府の非常用米穀を保管するために八千俵蔵を建て、六九には厩を設置した。

松平直政が松江に転封した後、堀田正盛が入封する。しかし、在封期間が短かったため、上土に蔵を建て、城北側の土堀・石垣破損の修復程度で、本格的な城下・城郭の修築はなかった。

堀田正盛の佐倉転封のあとをうけて、寛永19年（1642）に水野忠清が入封する。

水野氏改易の後、戸田氏が入封する。享保12年（1727）正月元旦、本丸御殿が焼失した。御殿の賄所合部屋と台所の間より出火して、昼七ツ時過ぎまでに全焼した。総坪数905坪、総畳数1560畳余の広大な殿舎を焼き尽くした。当時の松本藩戸田家は、財政が窮乏していたため、本丸御殿の復興はならず、政庁は二の丸御殿に移された。しかし、二の丸御殿は狭かったため、二の丸御殿内にあった郡所や町所は六九へ移された。また、大名主・大庄屋の役人会所も上土へ移された。この後、城郭と城下町には基本的な変化がないまま、明治維新を迎えることとなる。

3 六九の沿革

六九は三の丸に隣接しており、江戸後期には松本藩の地方行政機関が集中していた町であった。『嘉永七年家中名前付図』（1854年・写真次頁）を見ると、幕末段階では六九の北半部に、東から郡所（町所を併合）・表勘定所・預所の順で軒が並び、南側には蔵と射場・蔵役所・木場役所・炭所が設置されていた。

今回調査を実施したA区は、幕末時に蔵があった場所と推定される。ここには、安永5年（1776）の火災で焼失する直前には、東西157間余（約283m）の規模をもつ54疋立ての外厩（六九厩）があった。この厩

は、藩主・松平直政の時代（1633～38年）に設置されたもので、安永5年の火災後一旦は再建されたものの、その後道路に沿って、御蔵と呼ばれる細長い蔵が建てられた。この蔵は、二の丸内の八千俵蔵に対し、万俵蔵とも言われ、嘉永七年の図から土蔵であったことがわかる。また、この蔵の西には、蔵役所・燃料用の木炭を収納する炭所（炭蔵）と材木を扱う木場役所が設置されていた。

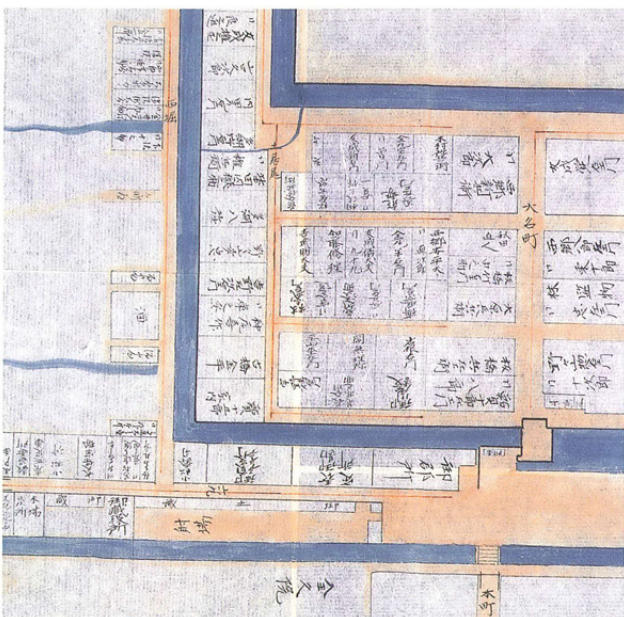
調査B区は、A区の道路を挟んで北側に位置しており、預所からその西側にある武家屋敷地にかけての場所と想定される。預所とは、寛保3年（1743）に松本藩が、幕府より委任された信濃国内の5万3千石余の天領である預領の管理を行なう役所である。領地の内訳は、佐久郡内に1万5千石、筑摩郡内に3万2千石、小県郡内に4千石、伊那郡内に2千石ほどであった。藩は、遠隔地の佐久・小県の諸村支配にあたっては、佐久郡平賀に陣屋（平賀陣屋）を置いて藩士を派遣したが、それ以外の預領は、この六九の預所に伊那部屋（塩尻組と伊那郡）・川手部屋（出川組・和田組）・会田部屋（麻績組・坂北組等）の三分署を設けて管轄した。

預所の東隣には、表勘定所があった。表勘定所は、天保9年（1838）に城内から勘定所の機能の一部を六九に移し、表勘定所として設置したものである。勘定所は、領内から年貢などの諸税を徴収し、藩財政を運営する機関である。天保9年の施策により、藩主の出納を扱う勝手方勘定は、二の丸御殿内に残し、それ以外が表勘定所として城外に独立することとなった。この結果、それまで郡所が管轄していた商業施策部門の一部を担当することとなった。この年、領内の商工業者に布達が出され、紺屋願い、綿打願い、商札願いなどの鑑札に関する諸願いの届出と、それに伴う運上・冥加の上納は、表勘定所に出されることとなった。安政3年（1856）表勘定所は藩主の勝手方賄所と事務を合併し、勘定所と改称、表勘定奉行も勘定奉行に改まった。その後、慶応3年（1868）に勘定所は再び分離し、山方勘定を扱う表勘定所と勝手方勘定を担当する御勘定所となった。

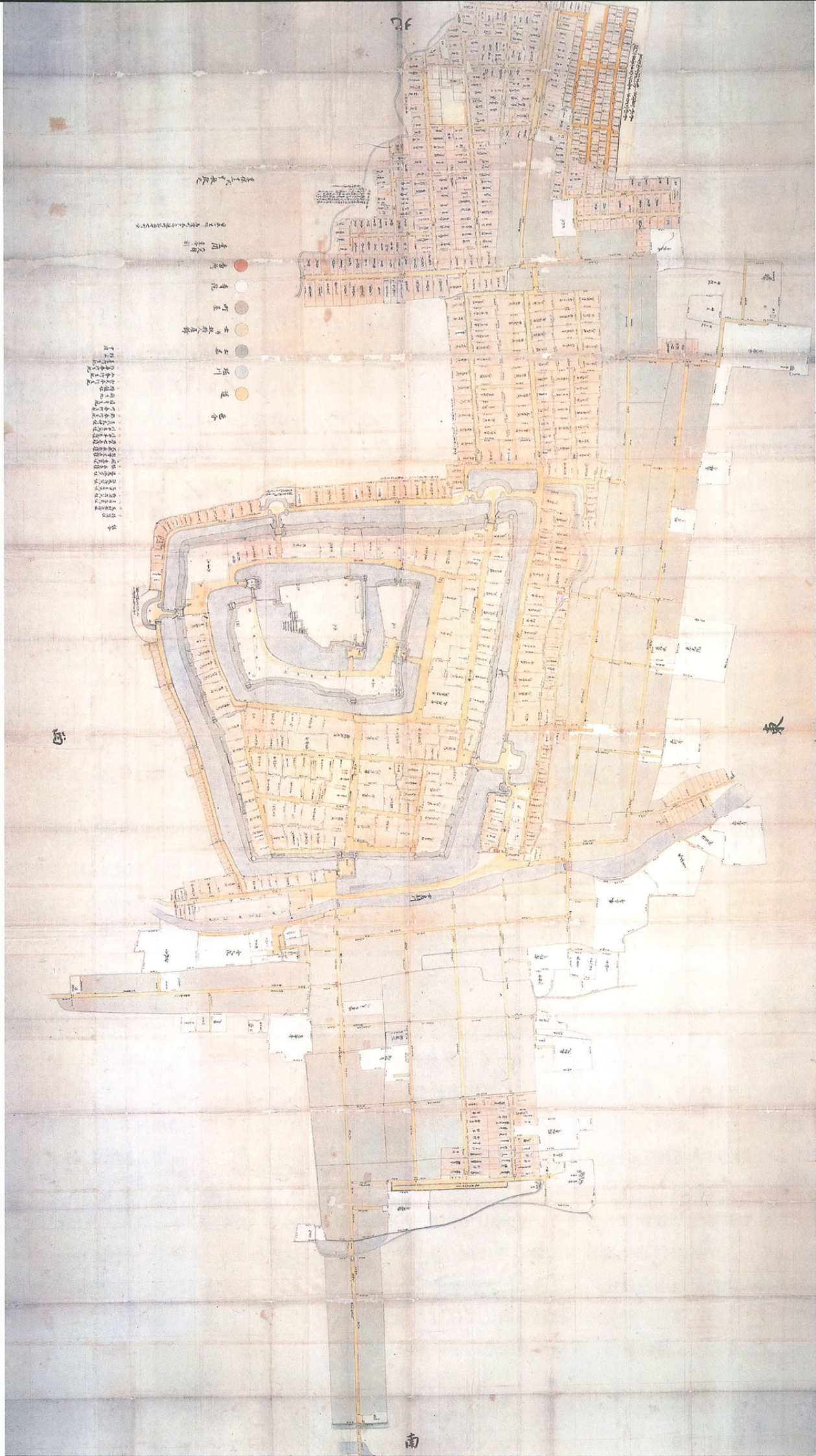
勘定所の隣には、郡所があった。松本藩領の総人口の約85%を占める村方（在方）支配を担当した。この役所が対象とした農民は、約9～10万人に及んでいる。ちなみに7万石の水野氏時代の村方人口は、享保7年（1722）で98336人（『信州松本領町在々宗門改人高宗旨分ヶ目録』）であった。

安永5年の火災で町所が焼失して以降は、町方行政を担当する町所も郡所に吸収合併された。また、天保9年（1838）以降は、天保の藩財政改革により、郡奉行のほか表勘定奉行までも兼任する。

各役所の敷地面積は、残された絵図等からほぼ近似した規模であったが、郡所は間口24間×奥行11間半の276坪、預所は256坪であった。預所には建坪170坪の建物があった。



『嘉永七年三月改 家中名前附図』（部分）
瀬川長広氏 所蔵



「享保十三年 秋改 松本城下図」

3章 調査結果

1節 調査概要

1 A地区

今回の調査はA地区とB地区とに分けて行った。A地区は大手2丁目2番地に該当し、北側は六九通り（旧糸魚川街道）、南側は女鳥羽川沿いの道路に挟まれた部分に位置する。

A地区の発掘調査は平成12年9月18日から同年10月27日にかけて行った。六九商店街のアーケード解体や、旧建物の廃材運び出し等の作業と並行しての日程となったため、調査範囲も事業地全体ではなく、大きな建物があった部分を避け、比較的遺構の残存が良好であると予想される事業地の西側部分を選択し調査区を設定した。解体作業や排土置場の都合上、先に調査区の北側部分を調査し、北側部分の埋め戻し後南側部分を調査した。

発掘調査の手順は、まず重機を使用して深掘りを行い、第Ⅰ検出面の深さを確認した後重機によって第Ⅰ検出面までの上土を除去し、その後人力による遺構検出を行った。検出の終了した遺構から遺構番号を命名し、人力による掘り下げを開始した。なお、遺構番号は各面ごとに1番から順に命名した。掘り下げの終了した遺構は写真と測量図とで記録を行った。遺構の測量は任意の定点から磁北方向を基準とし、3mの方眼を設定した。全ての遺構の掘り下げと記録が終了した後、重機を使用して第Ⅱ検出面までの掘り下げを行った。その後第Ⅵ検出面まで同様の手順を繰り返し、北側部分を埋め戻した後南側部分も同様に調査を行い、最後に重機で南側部分の埋め戻しを行い、発掘調査の現場における行程を終了した。

遺構の掘り下げと並行して人力で小トレンチを掘って次の層理面を探りながら調査を行い、これを手掛かりとして次の検出面までの掘り下げを行ったが、平面観察したところ遺構の認められない面はそのまま掘り下げ、遺構の確認できる面のみを検出面として調査を行った。加えて、東西に長い調査区であったため、同一の検出面においても土層の異なる可能性があり、検出面の設定に疑問が残る。

北側部分については第Ⅰ～第Ⅵまでの検出面を設定して調査を行い、第Ⅵ検出面の下層に植物遺存体を多量に含む腐植泥質土層が認められたため調査終了とした。南側部分については、第Ⅱ検出面と第Ⅲ検出面のみの調査となった。出土遺物から判断して、16世紀後半から19世紀初頭までの調査であったと考えられるが、第Ⅱ検出面及び第Ⅲ検出面の大規模な溝状遺構や建物址は、六九の歴史を考えるうえで貴重な資料と思われる。

2 B地区

B地区は六九通り（旧糸魚川街道）を挟みA地区北側向かいに位置し、江戸時代は南大手門を西へ総堀沿いに数軒連なった上級武士の屋敷跡にあたると思われる。調査範囲は最大145.9m²で、各検出面の調査面積の合計は下記の通り。中央部にゴミ穴として使われたと思われる攪乱が広がる。

調査にあたり、重機で遺構検出面までの表土除去を行った後、人力により検出・遺構掘り下げを行い、調査終了後重機による埋め戻しを行った。調査地西南隅に深掘りトレンチを設定し、土層を観察した上で層ごとに掘り下げた。第Ⅰ～Ⅳ検出面まで掘り進めたところ、北部で遺構・遺物が集中して出土したため、北側を拡張して第Ⅲ～Ⅵ検出面を調査し、並行して南部も第Ⅷ～Ⅺ検出面まで調査した。第Ⅱ、Ⅶ検出面は遺構が見られなかったため平面観察の後直ちに掘り下げた（総面積には含めず）。よって、調査のある期間においては、調査範囲内の場所により検出面が異なる状況があった。また、検出面は厳密に層理面に合わせて掘り下げたというより、便宜的に標高を揃えて広げた場合が多いため、同じ検出面でも場所ごとに土層が異なる可能性がある。特に第Ⅲ、Ⅳ検出面にその疑いが濃い。

当初は近世の遺跡として、調査は腐植泥質土層（第16層）の上部までにとどめる予定であったが、第16層にあたる第Ⅹ検出面で古墳時代の土器を伴う溝状遺構を検出し、下部の第Ⅺ検出面では建築材と思われる木器数点と土器2点を出土した。

近世期の遺跡としては上級武士の住居、特に茶室をうかがわせる遺物がいくつか出土した第Ⅳ検出面建物址、近世初頭の工法を示す第Ⅷ検出面建物址などが注目される。また、第Ⅹ・Ⅺ検出面ではこの地域としては初めての古墳期遺構と遺物が発見された。従来城下町跡の下層部は低湿地で遺跡はないと見られていただけに貴重な発見と言えよう。検出面の決定に疑義があり、遺物の回収基準・回収方式にも若干の問題がある点が惜しまれる。

遺構等の測量は、A地区のグリッドと同じ方向、規格で行った。調査の実施期間、面積、遺構遺物の詳細については以下に列記する。

調査期間 A地区：平成12年9月18日～平成12年10月27日

B地区：平成13年2月22日～平成13年4月16日

調査面積 A地区：1243.8m²（全面合計）

B地区：671.4m²（全面合計）

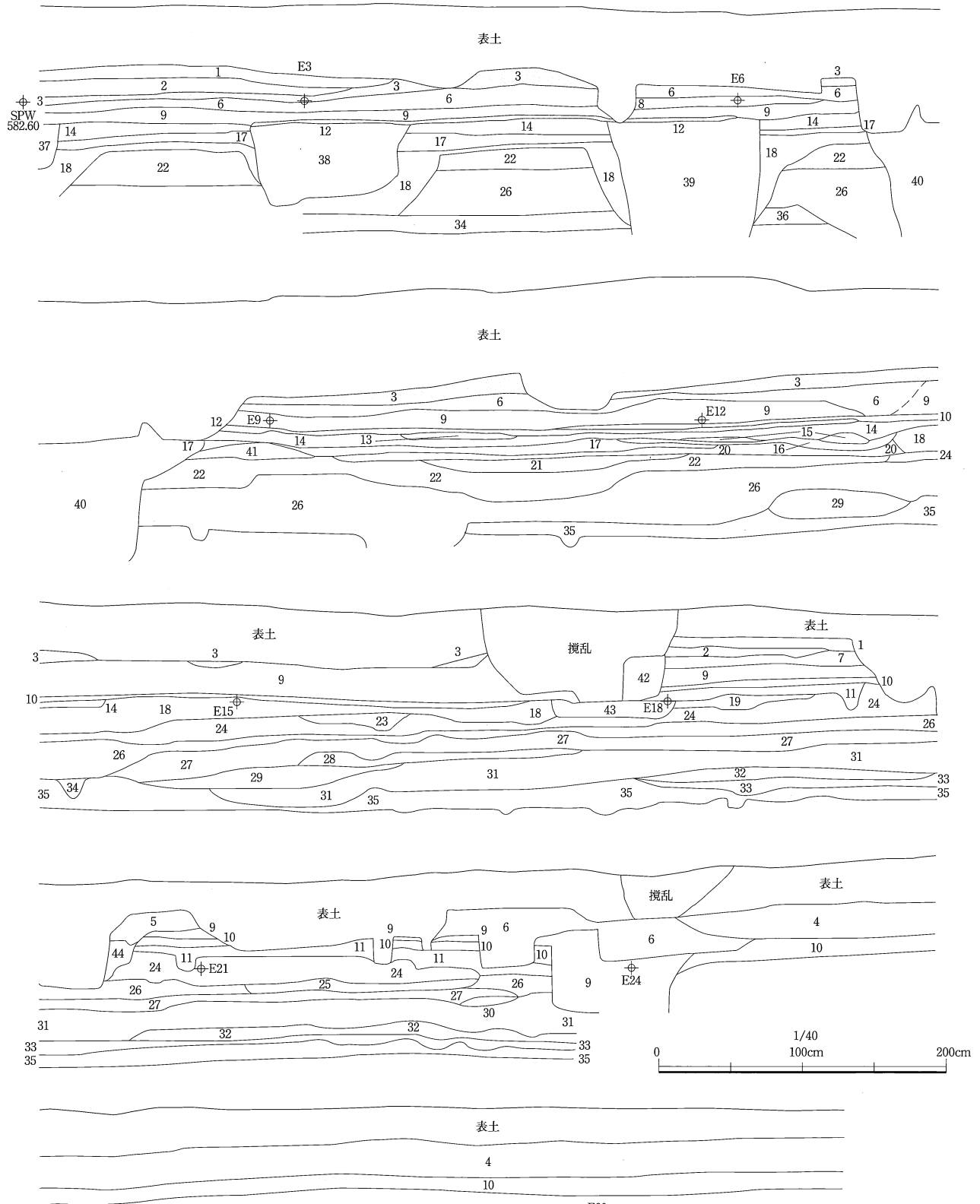
検出遺構	A地区：建物址	4棟	B地区：建物址	6棟
	木樋	1条	集石遺構	1基
	溝状遺構	11条	溝状遺構	2条
	土坑	250基	土坑	108基
			焼土範囲	4箇所

出土遺物 A地区：近世

陶磁器
鉄製品（刃物、煙管他）
銅製品（銭貨）
木製品（木札、下駄他）
石器（不明品）
獣骨

B地区：古墳時代前期

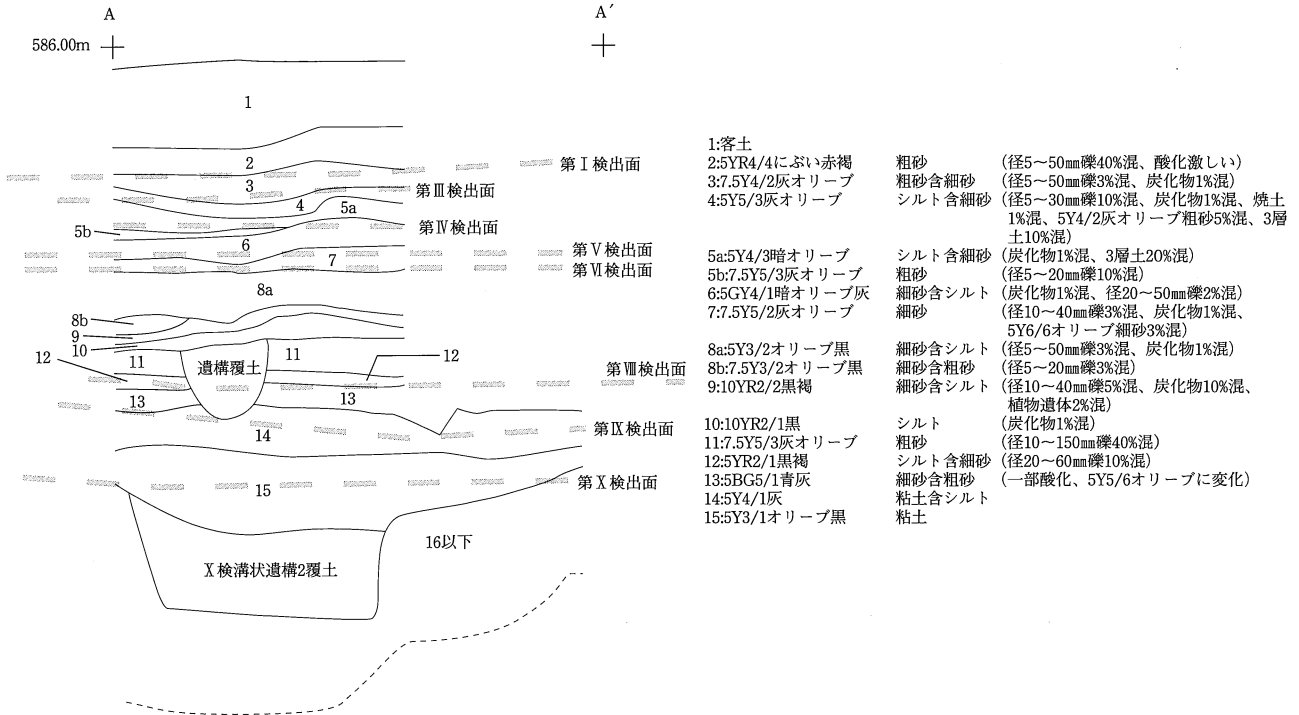
土器（土師器）
木器（建築材）
石器（礫石器）
近世
陶磁器
鉄製品（釘、煙管他）
銅製品（銭貨）
木製品（建築材、下駄他）
石器（印鑑、砥石他）



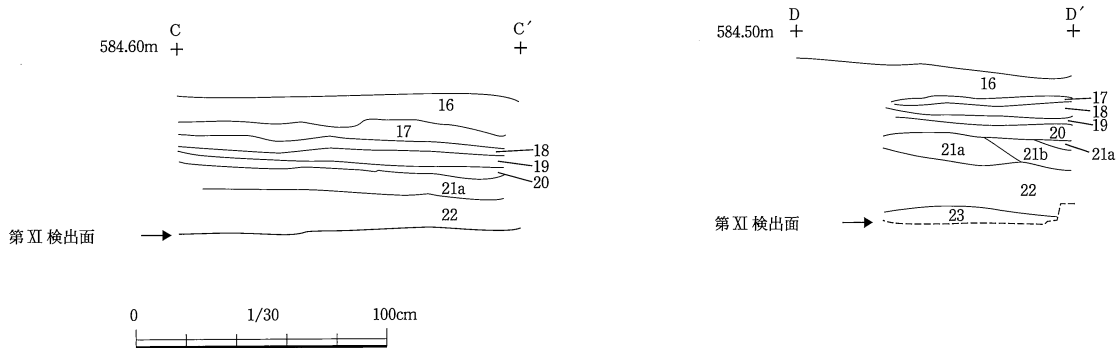
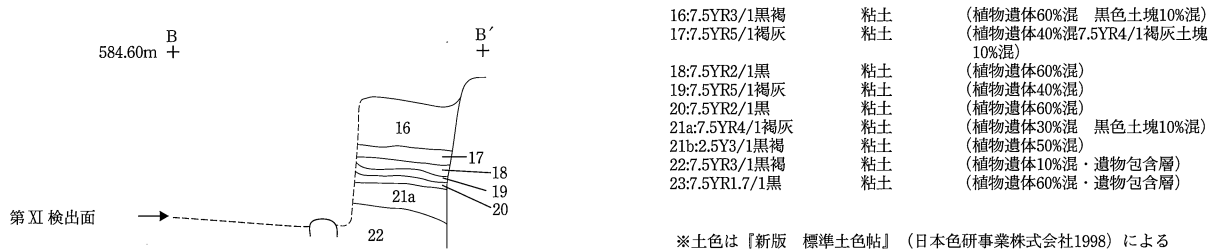
- | | | | |
|-------------|-------------|-------------|--------------------|
| 1: 青灰色粘質土 | 16: 砂礫層 | 31: 暗灰褐色粘質土 | 礫を含む。 |
| 2: 青灰色砂質土 | 17: 暗灰色粘質土 | 32: 砂礫層 | |
| 3: 焼土層 | 18: 暗灰色粘質土 | 33: 青灰色砂質土 | |
| 4: 黄褐色砂質土 | 19: 砂礫層 | 34: 不明 | |
| 5: 砂礫層 | 20: 青灰色粘質土 | 35: 暗灰色砂質土 | |
| 6: 青灰色粘質土 | 21: 緑灰色砂質土 | 36: 不明 | |
| 7: 暗褐色粘質土 | 22: 青灰色粘質土 | 37: 不明 | |
| 8: 不明 | 23: 砂礫層 | 38: 青灰色粘質土 | 不明遺構覆土。 |
| 9: 青灰色粘質土 | 24: 暗緑灰色粘質土 | 39: 青灰色粘質土 | IV 検土15覆土。 |
| 10: 青緑灰色粘質土 | 25: 青灰色粘質土 | 40: 青灰色粘質土 | IV 検土6覆土。礫を多量に含む。 |
| 11: 暗褐色粘質土 | 26: 暗灰色粘質土 | 41: 青灰色粘質土 | III 検建1覆土。礫を多量に含む。 |
| 12: 焼土層 | 27: 砂礫層 | 42: 暗褐色粘質土 | |
| 13: 砂礫層 | 28: 青灰色粘質土 | 43: 暗灰色粘質土 | III 検建2覆土。礫を多量に含む。 |
| 14: 青灰色粘質土 | 29: 暗灰色粘質土 | 44: 緑灰色砂質土 | |
| 15: 炭化物層 | 30: 黄土色砂質土 | | |

第3図 A地区 北壁 土層断面図

調査区西壁断面図



第X-XI 検出面断面図



第4図 B地区 土層断面図

2節 出土遺構

今回の調査では両地区を通じて数多くの遺構の命名を行った。しかし中には遺構として認定することに疑問の残るものもある。また、遺構の名称が適切かどうか、あるいは検出面の設定の問題、遺構の帰属検出面の問題もあるが、本書では現場段階で欠番とした遺構以外はすべて遺構図に記載した。その中の主なものについて、地区ごと検出面ごとに以下に述べる。

1 A地区

第Ⅰ検出面 (99.6m²)

攪乱によって破壊され、調査区の東西両端に一部のみ残存していた。遺物から19世紀初頭の面と考える。なお検出面各所に杭が認められたが、遺構として命名はしなかった。

建物址1

調査区の東端。東側と北側は調査区外にかかるため2辺のみの確認であり、全体の様子は不明だが遺構の主軸は東西南北に合致すると思われる。形状から相当重量のある建築物を支えるための基礎であると考えられ、過去の調査事例から土蔵の間知石と推定される。面取した石が二段もしくは三段に積まれており、石の正面形は長方形、断面形は台形のものが多い。人力でトレンチを掘削して断面観察を行ったところ、間知石の外側34cmほどの地点から深さ31～34cm程度の掘り込みが認められた。間知石は検出面の10～20cm下から第一段目が積まれており、間知石の直下及び周囲には5～10cm大の礫を多く含む砂礫層が堆積していた。これは間知石を安定させるための裏込めと考えられる。また、第Ⅰ検出面を調査している時点では判明しなかったが、後に同地点から杭列が確認された。調査区北壁面の土層観察の結果やⅡ検の溝1の工法から考えるとこの杭列はⅠ検建1の下部構造である可能性が高い。

土坑7

建物址1の西辺に近接する。遺構内北部から桶が出土したが断面観察を行った結果、桶出土部分と他の部分は別の遺構である可能性が高い。桶出土部分と建物址1との関係は不明。

第Ⅱ検出面 (322.1m²)

北側部分と南側部分を調査。出土遺物から18世紀末～19世紀初頭の面と推定される。しかし南側部分については検出面の設定が難しく、本来第Ⅰ検出面に帰属する遺構を含む可能性が高い。

溝状遺構1

調査区北壁のE 17付近から発して南に直行し、S 4 E 17付近で直角に曲がり西壁に達する。北側と西側は調査区外にかかる。当初は溝状遺構として命名し調査を行ったが、調査を進めるに従って大規模な建物址である可能性が高いことが判明した。検出時の状態は、北壁からS 4 E 17付近にかけては遺構覆土に焼土及び3～10cm大の礫が多く認められ、その他の部分の遺構覆土は小礫を含む青灰色粘質土であった。その後第Ⅲ検出面に到って遺構の下部の構造が明らかになり、遺構内には30cmほどの幅で2列に杭が打たれその周囲は3～10cm大の礫で固められていることが判明した。また、北壁からS 4 E 17付近にかけての部分には杭の上に横木が渡されていた。なお、第Ⅰ検出面においては、このⅡ検溝1に該当する部分はほとんどが攪乱によって破壊されており、また当遺構の工法がⅠ検建1と酷似しているため比較的新しいものであると考えられることから、当遺構の帰属面が真に第Ⅱ検出面であるかどうかは疑いが残る。

木樋

調査区西壁のS 6付近から発しS 3 E 4付近に達する。Ⅱ検の検出面では既に木樋部分が露呈している状態であったため上面から埋設されたものである可能性が高い。

土坑11

遺物及び調査区北壁面の土層観察の結果から考えると上面からの掘り込みであると考えられる。

第Ⅲ検出面 (272.8m²)

北側部分と南側部分を調査。出土遺物から判断すると17世紀初頭～17世紀前半の面と思われる。第Ⅱ検出面との時代的間隔が大きい。

建物址1

北側部分と西側部分が調査区外にかかるため全体の様子は不明。調査区に表れた部分は、1辺7～8mほどのT字形に深さ10cm程度の溝状の掘り込みがあり、その中に40～70cm大の礎石が各所に据えられている。遺構覆土は3cm～20cmほどの礫を多く含む。

土坑25、土坑31、土坑38

遺構内より柱と思われる木材が出土。十文字に木組みが施してあった。3基とも同様の工法であり、ほぼ直線上に位置するため同一の構造物の一部である可能性が高い。

建物址2

Ⅱ検溝1の下部と推定される。杭の間に礫が詰められ、杭の上には横木が渡されていた。

第Ⅳ検出面 (197.9m²)

北側部分のみの調査。出土遺物から考えると16世紀末～17世紀初頭の面と思われる。なお、Ⅰ検～Ⅲ検まででは検出面の各所に見えていた杭が当検出面においては極めて少なくなっている。

建物址1

調査区東側において確認された。40～60cm大の平らな石が長方形に配列されている。それぞれの礎石は半分～3分の2程度が地中に埋まった状態で検出されたが、トレンチを掘削して断面観察を行ったところ礎石を据えるための掘り込みは特に確認されず、この面が整地された際に埋められた可能性がある。なお当遺構のさらに東側に30cm程度の石が確認されたが当遺構には含めなかった。

第Ⅴ検出面 (190.8m²)

出土遺物から考えると16世後半～16世紀末の面と思われる。なお、溝状遺構2は平面形も不定形であり、断面観察においても明確な立ち上がりが認められないため遺構ではない可能性が高い。

土坑9、土坑19、土坑21、土坑52

土坑9、土坑21、土坑52の各遺構内の底部に上部が平らな石が確認された。3基の土坑がほぼ直線上に位置するためこれらの土坑が建物址の一部であることを疑い、土9から西へ190cmほどの地点にトレンチを設定したところ同様の石が確認された。しかし、土19では同様の石は確認されたものの遺構覆土等が他の3遺構とは異なる様子であった。また、トレンチ周辺でも平面的に遺構は確認されなかったため、これら4基の土坑を建物址とは命名せずその可能性を検討するに留まった。

第Ⅵ検出面 (160.6m²)

出土遺物は極めて少ないが16世紀末と考えられる遺物が出土しているため、当検出面も同様の時期に帰属するものと思われる。なお、土坑25、土坑34などからは杭あるいは柱材と思われる木材が出土しているが、これらの遺構をもって建物址と想定できる平面形を形成するには至らなかった。

2 B地区

第Ⅱ、第Ⅶ検出面は平面の観察、遺物回収にとどまるため遺構についての記述は割愛した。

第Ⅰ検出面 (104.9m²)

遺物から見て19世紀中頃～後半の面と思われる。南部に径約30cmの礫を並べた、建物址と見られる掘り込みがあったが、出土品等から新しい時代の攪乱と判断し、遺構とは認定しなかった。

建物址1

調査地北東でN-89°-W方向に位置する。北側及び東側は調査区外にかかり全体の規模は不明であ

る。布掘工法をとっていると思われる、深さ約20～30cm、幅約35～50cmで溝状の掘り込みの中に径約4～10cmの礫が混入する。

土坑6

調査区北部に位置する。規模は長軸60cm×短軸50cm×深さ27cmで、陶製の甕が潰れた状況で出土した。周囲には粘土が詰められ、遺物ではなく埋設した遺構と判断した。

第Ⅲ検出面 (132.1m²)

N 27以北は拡張部分。遺物から見て17世紀後半～18世紀前半の面と思われるが、拡張部分の土坑23（木桶）からは近代の遺物が出土しており、拡張部分の検出面は新しい時代の面である可能性がある。南西隅にトレンチを囲むように杭列があるが、詳細は不明である。

建物址1

調査地東側中央でN-0°の方向に、鍵形の溝状遺構として位置する。布掘工法をとっていると思われる、幅約30～50cm、掘り込みの深さは約15cm、直径約10～20cmの礫が多数混入する。第Ⅰ検出面の建物址1に類似し、場所も近接することから、第Ⅰ検出面の掘り残しの可能性もある。

建物址2

調査地北部に南北へ伸びる形で位置する。形は不整形である。約20cmの深さの掘り込みに径約1～20cmの礫が混入する。調査地北西部分、土坑23付近で建物址が不整形になるのは、土坑23（木桶）につながる木管を埋設した際の掘り込みを混同している恐れがある。

建物址3

調査地北部に建物址2を挟むようにして位置する3基の土坑（それぞれ基礎1、2、3と称する）によって形成される。3基とも深さ約10cmの掘り込みに径約10cm～20cmの礫が混入する。

土坑23（木桶）

直径約55cm、深さ約90cmの木桶が周辺に粘土を詰めて埋設されている。桶底部から大日本ビール（1906～1949）製の瓶が出土しており、新しい時代まで利用されていたと思われる。上部の遺構を見逃していた可能性がある。側面に水を導くための直径約15～20cmの木管が接続され、北西方面へ伸びる。木管内側には直径約5cmの穴が穿たれる。この木管を設置した際の掘り込みは確認できなかった。桶底面に穴はない。他方から水を引く集水枘的な機能を果たしていたかと思われる。

土坑25

土坑中央部に柱が残存。この柱に細木が貫通し、さらにその上に細木が井桁状に組まれ、約3～20cmの礫が混入する。柱が沈まないための構造と思われる。A地区第Ⅲ検出面で検出された土坑25、31、38の構造と類似する。

第Ⅳ検出面 (145.9m²)

N 27以北は拡張部である。遺物から見て17世紀前半までに相当する面と思われる。

集石遺構

調査区南部に東西方向と平行に位置する。径約15～40cmの礫に囲まれるような形で、深さ10cmの掘り込みの中に径約3～10cmの小礫が多量に混入する。周辺の石列とも主軸が同一であり、詳細は不明だが建物址の一部かと思われる。

建物址1

調査地北部に位置する礎石・杭の集合で構成される。礎石建物の工法をとり、本来の構造は複数の杭の上に礎石を載せ、その上に柱を立てたものと推測される。杭の集合は3～5本ほどの杭により形成される。第Ⅴ検出面で検出された杭の集合も、この面で掘り逃したものとして建物址に含める。プラン内から水滴、

中国漳州窯産染付皿、志野織部皿など茶器関係の陶磁器がいくつか出土した。

第Ⅴ検出面 (32.9m²)

当初の発掘範囲からの拡張部にあたる。特筆すべき遺構なし。遺物から見て16世紀末から17世紀初頭の面と思われる。

第Ⅵ検出面 (50.3m²)

遺物から見て16世紀末から17世紀初頭の面と思われる。東部で瀬戸・美濃産の茶入が出土するが、位置から見てⅣ検建物址で掘り逃した遺物である可能性がある。

土坑9

中央部に65×60×15cmの盥状の木桶が埋設される。炭化物を多く含む。

土坑10

中央部に70×60×13cmの盥状の木桶が埋設される。

第Ⅷ検出面 (74.6m²)

中央部で南北と平行にオリーブ黒の砂質土地域が溝状に細長く分布しているが、トレンチを入れたところ、むしろオリーブ黒砂質土を掘り込んで両側に青灰色砂質土が分布するため、遺構とは認定しなかった。遺物は少量だが、建物址1の工法から見て、16世紀後半以後の面と思われる。

建物址1

掘立柱建物の構造をとり、土坑4、7、15、22などには角材の柱が残る。下部に栗石、礎石を置いたものもあり、本来は柱材の下に礎石を置き、周りを栗石で固めるという16世紀後半の工法を使用していると思われる。土坑1、4、6、7、9、15、16、17、20、22、23、25、28、29、さらにこの面で掘り逃したと思われる第Ⅸ検出面の土坑3、4、5で一つの建物址を形成すると推定される。プラン内に土坑3、5、10、18、19、21を持つ。プラン内南東隅には径約5～20cmの礫範囲が存在する。建物址との関係は不明。

土坑21

調査地の北部に位置する。この土坑21と西にある土坑22を繋ぐように径約2～10cmの礫範囲が分布する。内部に約70cmの棒状木片が井桁状に差し渡され、内側に暗褐色粘質土と黄灰色灰が堆積する。上記建物址に付随する火関連の施設であろうか。

第Ⅸ検出面 (54.2m²)

特筆すべき遺構なし。土坑3、4、5は第Ⅷ検出面の建物址の掘り残しと思われる。

第Ⅹ検出面 (62.3m²)

腐植泥質土層の上面を検出面とする。溝状遺構底部から古墳時代前期の土器が出土しており、その時代の面かと思われる。

溝状遺構1

調査地南部に位置し、調査区外の東へ伸びる。西半分は幅約40～50cmで深さ約5～10cmの浅い掘り込みだが、東部では幅約70～80cm、深さ40～45cmの、垂直な長方形に掘り込まれた溝になる。

溝状遺構2

調査地南西部に位置し、調査区外の西へ伸びる。幅約90cmで東端部は直径約110cmの円形にふくらみ、深さは約45cmである。底部で土器が1点、木器が2点出土する。

第Ⅺ検出面 (14.2m²)

特筆すべき遺構なし。古墳時代前期の土器が2点、建築材と思われる木器、他から持ち込まれた石器などが散発的に出土する。第Ⅹ検出面から第Ⅺ検出面にかけて採取した土壌サンプルから、イネ科植物細胞のケイ酸体が多数確認され、この地区で稲作が行われた可能性を示唆している(第5章参照)。

第1表 建物址一覧表 <> : 推定 () : 残存

地区・検出面	No.	平面形 柱配り	主軸方位 面積 (m ²)	規模 (cm)	柱間寸法 (cm)	柱穴(礎石)			備考
						平面形	規模 (cm)	柱痕 (cm)	
A I	1	不明 不明	N-89°-W (65.5)	841×(790)					径約20～70cm礫の縦列で構成。
A III	1	不明 不明	N-0° (52.5)	(783)×(735)	(礎石間) 76～228		(礎石) 径35～50		幅約46～86cm、深さ約8～25cmの溝状遺構内に礎石が等列配置。
A III	2	不明 不明	N-0°	(596)					幅約60～94cm、深さ約7～13cmの溝状遺構内に杭が配置。その上に板状木材が置かれる。
A IV	1	長方形 不明	N-89°-W (7.0)	(549)×228	(礎石間) 104～185		(礎石) 径34～59		礫が等列配置。
B I	1	不明 不明	N-0° (3.1)	(431)×(111)					幅約35～50cm、深さ約20～30cmの溝状遺構内に径約4～10cmの礫が詰まる。
B III	1	不明 不明	N-90°-E (4.3)	252×(189)					幅約35～50cm、深さ約10cmの溝状遺構内に径約10～20cmの礫が詰まる。
B III	2	不整形 不明	N-2°-E (39.4)	(736)×438					深さ約20cmの掘り込みに径約2～10cmの礫が詰まる。
B III	3	不明 不明	N-84°-E	(576)	259～275	3基 楕円形	径42～74 深9～12		径約10～20cmの礫が詰まる。
B IV	1	長方形 側柱形	N-88°-W (27.5)	(864)×408	103～194				杭が数本集中した部分を柱痕に見たてて建物址のプランを策定。プラン内に土坑12・15、灰・炭化物範囲を持つ。茶器関係の遺物複数出土。
B VIII	1	不明 側柱形	N-88°-W (43.8)	(826)×(771)	177～431	17基 円形	径37～84 深15～65	8基 径11～17	土坑の一部に柱材が残存。それを囲むように径約33～40cmの礫が配置される。最低面に礎石。

第2表 溝状遺構一覧表 <> : 推定 () : 残存

地区・検出面	No.	起点	終点	断面形	規模 (cm)			時期	備考
					長さ	幅	深さ		
A I	1	S15・E20 (南端)	S1・E20 (北端)	皿形	(1287)	44～59	28～50	不明	南端は調査区外。
A II	1	S4・E2 (西端)	N3・E18 (北端)	皿形・長方形	(2255)	58～114	17～23	18C末～19C初頭	溝3を切る。土1・2、木樋に切られる。両端は調査区外。
A II	2	S1・E31 (東端)	S1・E29 (西端)	皿形	(224)	52～64	8～14	18C末～19C初頭	東端は調査区外。
A II	3	S3・E21 (東端)	S3・E18 (西端)	皿形	(254)	80～88	6～18	不明	土12に切られる。両端は溝1・4に切られる。
A II	4	N2・E21 (北端)	S5・E21 (南端)	皿形	(746)	114～176	10～26	不明	溝3を切る。北端は調査区外。南端は攪乱に切られる。
A III	1	NS0・E20 (西端)	NS0・E21 (東端)	皿形	143	49～60	7～9	不明	
A III	2	NS0・E21 (西端)	NS0・E23 (東端)	皿形	167	34～54	5～8	不明	
A IV	1	N2・E4 (西端)	N1・E7 (東端)	皿形	317	19～25	2～7	不明	
A V	1	N2・E3 (北端)	S3・E2 (南端)	逆台形・長方形	(562)	22～59	18～21	不明	北端は調査区外。南端はⅡ検溝1に切られる。
A V	2			皿形			5～19	不明	不整形。内部に土26をもつ。Ⅱ検溝1に切られる。西部は調査区外。
A V	3	NS0・E15 (南端)	N2・E15 (北端)	皿形	(268)	44～60	6～8	不明	土7・38・39に切られる。北端は調査区外。
B X	1	N16・W4 (西端)	N16・W8 (東端)	皿形・長方形	(569)	37～75	6～46	不明	Ⅷ検土29に切られる。東端は調査区外。
B X	2	N17・W5 (南東端)	N18・W7 (北西端)	長方形	(280)	93～111	44～46	古墳?	トレンチに切られる。北西端は調査区外。

第3表 土坑一覧表

<> : 推定 () : 残存

地区・検出面	No.	平面形	規模 (cm) 長軸×短軸×深さ	時期	備考
A I	1	不明	156×(96)×24	不明	トレンチに切られる。
A I	2	円形	36×34×14	不明	
A I	3	不整形	80×68×9	不明	
A I	4	楕円形	28×22×6	不明	
A I	5	楕円形	68×46×9	不明	
A I	6	不明	134×66×15	不明	南側は調査区外。
A I	7	不明	(88)×84×16	不明	建物址1に切られる。
A II	1	楕円形	214×162×28	不明	溝1を切る。
A II	2	不明	(228)×239×24	不明	溝1を切る。南側は調査区外。
A II	3	不整形	172×56×12	不明	
A II	5	不明	(60)×(66)×15	不明	土52に切られる。北側は調査区外。
A II	6	円形	48×44×16	不明	土9を切る。
A II	7	不整形	124×72×30	不明	
A II	8	円形	36×34×7	不明	
A II	9	不明	(210)×(52)×14	不明	土6に切られる。北側は調査区外。
A II	10	円形	34×30×11	不明	
A II	11	不明	(240)×178×16	19C後半	北側は調査区外。
A II	12	隅丸長方形	58×44×18	不明	
A II	13	円形	32×30×2	不明	
A II	14	長円形	80×22×22	不明	
A II	15	不明	260×14×7	不明	南側・西側は調査区外。
A II	16	楕円形	172×90×13	不明	
A II	17	不明	70×62×10	不明	土18に切られる。
A II	18	不整形	104×86×6	不明	土17を切る。
A II	19	楕円形	26×22×10	不明	
A II	20	不整形	52×42×9	不明	
A II	21	楕円形	42×32×6	不明	
A II	22	不明	(170)×156×18	不明	北側は調査区外。
A II	23	円形	98×82×23	不明	土26を切る。
A II	24	不整形隅丸方形	96×72×21	不明	
A II	25	円形	28×26×3	不明	
A II	26	不整形	274×64×9	不明	土23に切られる。
A II	27	不明	48×(28)×17	不明	南側は調査区外。
A II	28	楕円形	44×36×11	不明	土29を切る。
A II	29	不明	76×(24)×7	不明	土28に切られる。
A II	30	隅丸長方形	68×52×9	不明	
A II	31	不明	136×(54)×26	不明	南側は調査区外。
A II	32	楕円形	48×28×16	不明	
A II	33	円形	76×68×5	不明	
A II	34	円形	54×50×13	不明	
A II	35	長円形	82×34×9	不明	
A II	36	楕円形	38×30×8	不明	
A II	37	楕円形	56×44×6	不明	
A II	38	円形	30×28×10	不明	
A II	39	楕円形	58×46×9	不明	
A II	40	楕円形	22×12×?	不明	
A II	41	不明	44×(18)×8	不明	北側は調査区外。
A II	42	不整形	386×106×26	不明	北側は調査区外。
A II	43	円形	72×64×17	不明	
A II	44	不明	43×(22)×8	不明	南側は調査区外。
A II	45	不整形	(122)×54×9	不明	南側は調査区外。
A II	46	不明	89×(64)×24	不明	南側は調査区外。
A II	47	楕円形	36×27×6	不明	
A II	48	不明	98×(78)×19	不明	北側は調査区外。
A II	49	円形	36×34×21	不明	
A II	50	楕円形	46×32×23	不明	
A II	51	不整形	(270)×(86)×16	不明	南側・東側は調査区外。
A II	52	不明	(236)×176×3	不明	トレンチに切られる。土5を切る。
A III	1	不明	(372)×192×26	不明	南側は調査区外。

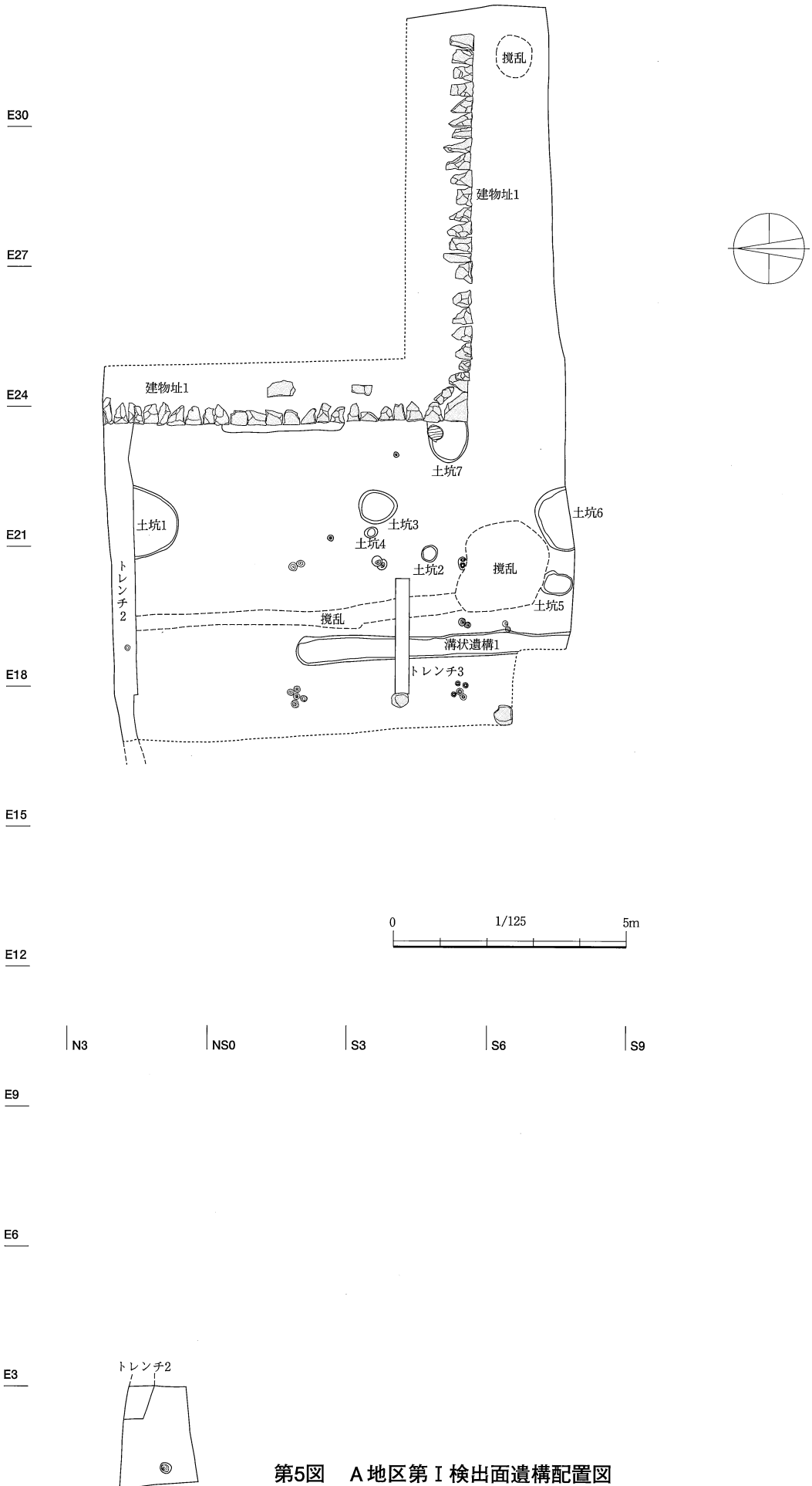
地区・検出面	No.	平面形	規模 (cm) 長軸×短軸×深さ	時期	備考
A III	2	不明	(164)×116×3	不明	攪乱に切られる。
A III	3	隅丸長方形	58×50×9	不明	
A III	4	不明	(108)×36×7	不明	攪乱に切られる。
A III	5	不整形	204×176×5	不明	
A III	6	不整形	56×50×9	不明	
A III	7	不整形	114×36×9	不明	
A III	8	不明	122×(84)×22	不明	北側は調査区外。
A III	9	楕円形	62×46×12	17C初頭?	土15との関係は不明。
A III	10	楕円形	44×32×13	不明	
A III	11	円形	46×40×15	不明	
A III	12	楕円形	44×38×9	不明	
A III	13	不明	116×(70)×26	不明	南側は調査区外。
A III	14	円形	42×40×4	不明	
A III	15	不明	(426)×302×23	17C初頭?	建2に切られる。北側は調査区外。
A III	16	楕円形	46×37×7	不明	
A III	17	円形	10×9×6	不明	
A III	18	楕円形	27×19×14	不明	
A III	19	円形	10×9×10	不明	
A III	20	円形	44×42×19	不明	
A III	21	楕円形	29×24×12	不明	
A III	22	楕円形	42×34×4	不明	
A III	23	楕円形	68×48×16	不明	
A III	24	不明	(106)×78×13	不明	北側は調査区外。
A III	25	円形	82×72×31	17C中頃～後半	柱材あり。
A III	26	楕円形	170×150×13	不明	
A III	27	不整形	168×138×19	17C初頭?	
A III	28	不整形	100×78×21	不明	
A III	29	円形	28×26×23	不明	
A III	30	楕円形	34×28×15	不明	
A III	31	不整形	132×80×45	不明	柱材あり。
A III	32	楕円形	58×34×33	不明	
A III	33	隅丸長方形	82×62×6	不明	
A III	34	不明	(46)×36×14	不明	北側は調査区外。
A III	35	円形	42×41×15	不明	
A III	36	円形	98×86×16	不明	
A III	37	円形	42×38×31	不明	
A III	38	不整形	154×88×23	不明	柱材あり。
A III	39	楕円形	74×54×19	不明	
A III	40	不整形	70×52×25	不明	
A III	41	不整形	114×63×18	不明	
A III	42	楕円形	38×24×16	不明	
A III	43	不明	320×(130)×20	不明	南側は調査区外。
A III	44	楕円形	36×24×16	不明	土49を切る。
A III	45	不明	40×30×17	不明	北側は調査区外。
A III	47	楕円形	84×56×10	不明	
A III	48	隅丸長方形	82×48×19	不明	
A III	49	不明	36×(20)×9	不明	土44に切られる。
A IV	1	不整形	262×91×12	不明	
A IV	2	円形	44×43×6	不明	
A IV	3	円形	33×32×2	不明	
A IV	4	楕円形	52×44×8	不明	
A IV	5	円形	42×40×12	不明	
A IV	6	不明	102×(76)×42	不明	北側は調査区外。
A IV	7	不整形隅丸方形	118×96×9	不明	
A IV	8	不整形	218×118×5	不明	
A IV	9	楕円形	36×27×12	不明	
A IV	10	長円形	162×72×23	不明	
A IV	11	不整形	46×38×24	不明	
A IV	12	不整形	68×46×16	不明	

地区・検出面	No.	平面形	規模 (cm) 長軸×短軸×深さ	時期	備考
A IV	13	楕円形	92×74×16	不明	
A IV	14	楕円形	90×72×24	不明	
A IV	15	不明	84×(32)×57	不明	北側は調査区外。
A IV	16	不整形	58×52×32	不明	
A IV	17	円形	50×44×23	不明	
A IV	18	楕円形	34×28×11	不明	
A IV	19	不整形	84×58×12	不明	
A IV	20	不明	(194)×116×13	不明	東側は調査区外。
A IV	21	長円形	64×33×9	不明	
A V	1	不明	138×(50)×25	不明	北側は調査区外。
A V	2	円形	45×43×23	不明	
A V	3	円形	49×43×19	不明	
A V	4	楕円形	162×124×4	不明	土24に切られる。
A V	5	不整形	142×92×7	不明	
A V	6	円形	42×38×34	不明	
A V	7	楕円形	82×50×12	不明	溝3を切る。
A V	8	不明	64×(50)×8	不明	II 検溝1に切られる。
A V	9	楕円形	54×47×36	不明	
A V	10	円形	39×36×27	不明	
A V	11	円形	38×34×10	不明	
A V	12	楕円形	37×30×11	不明	
A V	13	不明	76×(30)×9	不明	南側は調査区外。
A V	14	円形	40×38×31	不明	
A V	15	隅丸長方形	52×45×24	不明	
A V	16	楕円形	44×36×18	不明	杭あり。
A V	17	楕円形	55×33×21	不明	
A V	18	楕円形	47×38×20	不明	
A V	19	楕円形	59×51×20	不明	
A V	20	不明	(58)×52×28	不明	東側は調査区外。
A V	21	不整形	51×(44)×28	不明	東側は調査区外。
A V	22	円形	54×50×7	不明	
A V	23	不整形	56×50×10	不明	
A V	24	不整形	49×39×44	不明	土4を切る。杭あり。
A V	25	円形	41×36×15	不明	
A V	26	楕円形	56×28×43	不明	杭あり。
A V	27	不整形	382×(236)×16	不明	南側は調査区外。
A V	28	円形	54×50×13	不明	杭あり。
A V	29	不明	60×(24)×51	不明	土43に切られる。
A V	30	楕円形	30×19×10	不明	
A V	31	円形	28×26×16	不明	
A V	32	楕円形	26×23×17	不明	
A V	33	隅丸三角形	45×24×19	不明	
A V	34	円形	32×29×39	不明	杭あり。
A V	35	楕円形	22×20×27	不明	
A V	36	円形	36×32×31	不明	
A V	37	円形	36×34×34	不明	
A V	38	楕円形	44×34×12	不明	溝3を切る。
A V	39	楕円形	38×30×15	不明	溝3を切る。
A V	40	円形	36×34×13	不明	杭あり。
A V	41	円形	30×26×14	不明	杭あり。
A V	42	円形	42×40×39	不明	杭あり。
A V	43	円形	33×32×24	不明	土29を切る。
A V	44	円形	32×29×17	不明	
A V	45	楕円形	24×20×17	不明	
A V	46	楕円形	30×24×23	不明	杭あり。
A V	47	楕円形	40×33×6	不明	
A V	48	楕円形	20×18×12	不明	
A V	49	円形	21×20×2	不明	
A V	50	楕円形	36×32×18	不明	

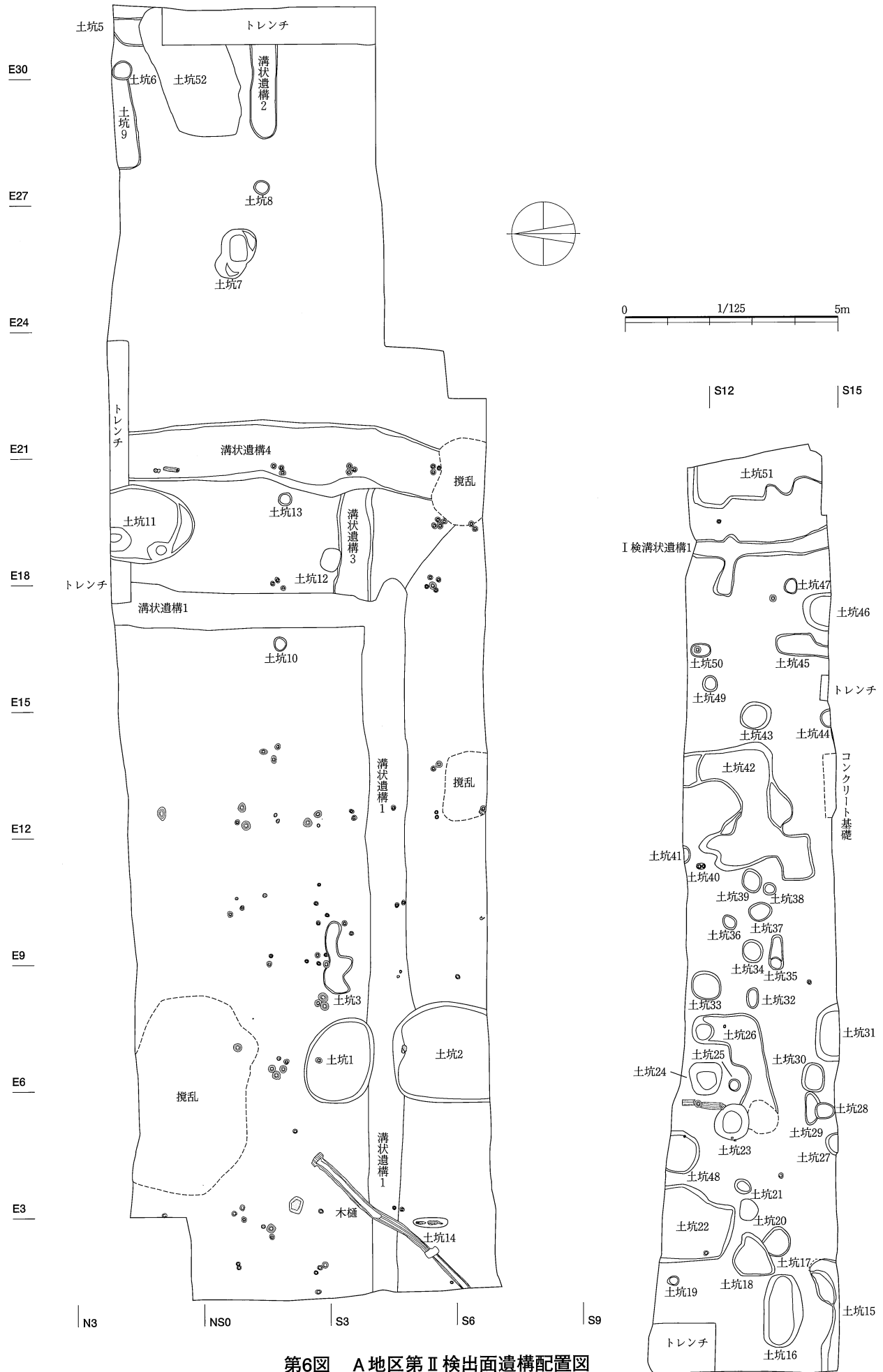
地区・検出面	No.	平面形	規模 (cm) 長軸×短軸×深さ	時期	備考
A V	51	円形	30×28×11	不明	
A V	52	楕円形	43×37×39	不明	
A VI	1	円形	32×28×35	不明	
A VI	2	楕円形	24×17×23	不明	
A VI	3	不整形	44×34×18	不明	
A VI	4	不整形	38×12×23	不明	
A VI	5	楕円形	25×22×16	不明	
A VI	6	円形	24×22×11	不明	
A VI	7	円形	32×29×30	不明	
A VI	8	円形	29×24×22	不明	
A VI	9	不整形	44×34×20	不明	
A VI	10	楕円形	30×24×16	不明	
A VI	11	不明	24×(19)×20	不明	西側は調査区外。
A VI	12	円形	32×27×39	不明	
A VI	13	楕円形	36×19×14	不明	
A VI	14	不明	26×(18)×12	不明	南側は調査区外。
A VI	15	円形	23×20×10	不明	
A VI	16	円形	36×28×14	不明	
A VI	17	円形	64×56×13	不明	
A VI	18	円形	30×26×7	不明	
A VI	20	不整形	276×146×15	不明	土21を切る。土23・27に切られる。
A VI	21	不明	18×(16)×27	不明	土20に切られる。
A VI	22	円形	29×26×21	不明	
A VI	23	円形	46×40×21	不明	土20を切る。
A VI	24	不整形	19×16×5	不明	
A VI	25	円形	28×27×13	不明	柱材あり。
A VI	26	楕円形	59×45×3	不明	
A VI	27	円形	62×52×20	不明	土20を切る。
A VI	28	楕円形	28×22×27	不明	
A VI	29	不整形	40×26×18	不明	
A VI	30	長方形	41×14×15	不明	
A VI	31	楕円形	52×40×20	不明	
A VI	32	円形	19×19×15	不明	
A VI	33	楕円形	60×54×19	不明	
A VI	34	楕円形	31×27×23	不明	柱材あり。
A VI	35	円形	56×54×17	不明	
A VI	36	楕円形	37×32×11	不明	
A VI	37	不明	38×(12)×8	不明	南側は調査区外。
A VI	38	円形	26×25×18	不明	
A VI	39	円形	21×20×12	不明	
A VI	40	不整形	56×49×9	不明	
A VI	41	楕円形	19×16×6	不明	杭あり。
A VI	42	楕円形	12×8×3	不明	
A VI	43	楕円形	45×38×?	不明	
A VI	44	楕円形	20×14×3	不明	
A VI	45	不整形	32×22×11	不明	
A VI	46	楕円形	23×22×8	不明	
A VI	47	不整形	28×24×10	不明	
A VI	48	楕円形	30×16×10	不明	
A VI	49	楕円形	41×29×4	不明	
A VI	50	楕円形	24×19×34	不明	
A VI	51	円形	63×54×32	不明	土57を切る。杭あり。
A VI	52	不整形	440×216×16	不明	
A VI	53	楕円形	15×12×9	不明	
A VI	54	円形	14×13×10	不明	
A VI	55	楕円形	46×26×14	不明	
A VI	56	不整形	208×156×12	不明	土57に切られる。
A VI	57	不明	95×(31)×20	不明	土56を切る。土51に切られる。杭あり。
A VI	58	楕円形	16×13×10	不明	

地区・検出面	No.	平面形	規模 (cm) 長軸×短軸×深さ	時期	備考
A VI	59	楕円形	18×12×6	不明	
A VI	60	長円形	75×16×15	不明	
A VI	61	楕円形	12×11×44	不明	
A VI	62	不明	36×(19)×11	不明	南側は調査区外。
A VI	63	不明	111×40×7	不明	
A VI	64	楕円形	20×11×9	不明	
A VI	65	楕円形	23×18×8	不明	
A VI	66	楕円形	45×31×40	不明	
A VI	67	円形	45×39×23	不明	
A VI	68	楕円形	12×10×10	不明	
A VI	69	楕円形	13×11×15	不明	
A VI	71	楕円形	11×8×9	不明	
A VI	72	楕円形	10×10×9	不明	
A VI	73	楕円形	10×9×5	不明	
B I	1	不明	(106)×(98)×13	不明	トレンチに切られる。南側は調査区外。
B I	2	楕円形	60×52×14	不明	杭あり。
B I	3	不整形	116×54×18	不明	
B I	4	楕円形	86×62×13	19C	杭あり。
B I	5	不明	40×(24)×8	不明	攪乱に切られる。
B I	6	不明	60×50×27	不明	礎が埋設。
B I	7	不整隅丸方形	74×62×16	19C後半	杭あり。
B III	1	不整形	122×60×20	17C	
B III	2	不整形	136×68×12	不明	
B III	3	円形	54×52×24	不明	
B III	4	円形	45×36×7	不明	
B III	5	不整形	92×62×11	不明	杭あり。
B III	6	楕円形	32×20×12	不明	
B III	7	不整形	206×68×8	不明	
B III	8	楕円形	49×31×14	17C後～18C前	
B III	9	円形	57×45×11	不明	
B III	10	不整形	106×84×14	不明	
B III	11	円形	70×60×18	不明	
B III	12	不整隅丸方形	46×39×?	不明	
B III	13	円形	32×30×12	不明	
B III	14	楕円形	38×24×13	不明	
B III	15	円形	36×34×10	不明	
B III	16	楕円形	56×24×11	不明	
B III	17	楕円形	45×35×7	不明	杭あり。
B III	18	楕円形	86×40×?	不明	
B III	19	楕円形	56×44×17	不明	
B III	20	不整形	(142)×100×4	18C	東側は調査区外。
B III	21	楕円形	32×20×5	不明	
B III	22	円形	33×31×8	不明	
B III	23	円形	68×61×85	不明	木桶が埋設。
B III	24	不明	66×(32)×14	18C後半	建2に切られる。
B III	25	不明	68×(50)×38	不明	柱材あり。
B IV	1	楕円形	40×29×14	不明	
B IV	2	楕円形	36×29×15	不明	杭あり。
B IV	3	不明	38×(33)×11	不明	土4に切られる。
B IV	4	楕円形	78×57×8	不明	土3・5を切る。杭あり。
B IV	5	楕円形	(50)×38×6	不明	土4に切られる。
B IV	6	不明	(78)×36×20	不明	南側は調査区外。
B IV	7	不明	24×(16)×7	不明	南側は調査区外。
B IV	8	円形	22×20×6	不明	
B IV	9	円形	42×36×9	不明	
B IV	10	不整円形	75×59×6	不明	
B IV	11	楕円形	38×29×5	不明	
B IV	12	楕円形	54×44×5	不明	
B IV	13	不明	56×(39)×10	不明	攪乱に切られる。
B IV	14	不明	132×64×38	19C後半	攪乱に切られる。
B IV	15	不整形	37×28×3	不明	
B V	1	不整形	102×51×9	不明	

地区・検出面	No.	平面形	規模 (cm) 長軸×短軸×深さ	時期	備考
B VI	1	隅丸長方形	158×116×7	不明	攪乱に切られる。
B VI	2	円形	58×56×3	不明	
B VI	3	不明	(38)×36×4	不明	攪乱に切られる。
B VI	4	隅丸方形	50×38×10	不明	
B VI	5	不整形	104×70×7	不明	杭あり。
B VI	6	楕円形	40×30×9	不明	
B VI	7	不整形	(236)×51×45	16C後半	土8を切る。
B VI	8	不明	(51)×(39)×7	不明	土7に切られる。北側は調査区外。
B VI	9	円形	104×96×9	16C末	壘状の木桶が埋設。
B VI	10	円形	90×76×31	16C後半	壘状の木桶が埋設。
B VI	11	不整形	119×86×8	19C後半	
B VII	1	不整形	58×36×28	不明	建1を構成。杭あり。
B VII	3	楕円形	42×30×25	不明	柱材あり。
B VII	4	楕円形	50×36×40	不明	建1を構成。柱材あり。
B VII	5	楕円形	37×20×25	不明	建1内部にあり。杭あり。
B VII	6	円形	47×44×15	不明	建1を構成。
B VII	7	円形	57×52×65	不明	建1を構成。柱材あり。
B VII	8	円形	31×28×?	不明	柱材あり。
B VII	9	不整形	82×45×62	不明	建1を構成。杭あり。柱材あり。
B VII	10	不整形	52×36×6	不明	建1内部にあり。
B VII	12	不明	56×(14)×8	不明	北側は調査区外。杭あり。
B VII	13	楕円形	44×37×29	不明	
B VII	14	円形	32×27×7	不明	
B VII	15	不整円形	50×44×27	不明	建1を構成。柱材あり。
B VII	16	円形	38×38×24	不明	建1を構成。
B VII	17	円形	(18)×46×(8)	不明	建1を構成。柱材あり。
B VII	18	円形	37×33×11	不明	建1内部にあり。
B VII	19	楕円形	28×15×?	不明	建1内部にあり。
B VII	20	不整形	72×44×58	不明	建1を構成。
B VII	21	楕円形	94×76×15	不明	建1内部にあり。
B VII	22	不整形	82×54×58	不明	建1を構成。柱材あり。
B VII	23	不整形	(22)×40×(30)	不明	建1を構成。柱材あり。
B VII	24	不明	32×(28)×?	不明	北側は調査区外。
B VII	25	不整円形	58×46×(12)	不明	建1を構成。柱材あり。
B VII	26	不明	32×(14)×?	不明	東側は調査区外。柱材あり
B VII	27	不整形	138×114×(88)	不明	
B VII	28	円形	26×26×?	不明	建1を構成。杭あり。
B VII	29	不整円形	86×66×54	不明	建1を構成。
B IX	1	楕円形	56×40×29	不明	
B IX	2	楕円形	50×26×16	不明	柱材あり。
B IX	3	不整円形	50×39×12	不明	Ⅲ検建1を構成。
B IX	4	円形	44×43×12	不明	Ⅲ検建1を構成。
B IX	5	楕円形	42×34×13	不明	Ⅲ検建1を構成。
B IX	6	円形	21×20×10	不明	
B IX	7	楕円形	18×14×3	不明	
B IX	8	円形	24×23×6	不明	
B IX	10	不明	403×(62)×50	16C末～	東側は調査区外。
B IX	11	楕円形	16×14×9	不明	
B X	1	隅丸三角形	42×39×17	不明	
B X	2	隅丸長方形	14×12×6	不明	
B X	3	楕円形	13×12×3	不明	
B X	4	円形	8×7×4	不明	
B X	5	楕円形	14×12×10	不明	
B X	6	隅丸長方形	15×10×7	不明	
B X	7	不整円形	15×14×5	不明	
B X	8	楕円形	26×16×13	不明	
B X	9	楕円形	18×11×6	不明	
B X	10	楕円形	18×13×10	不明	
B X	11	楕円形	11×9×6	不明	
B X	12	円形	10×8×8	不明	
B X	13	円形	10×9×8	不明	



第5図 A地区第I検出面遺構配置図



第6図 A地区第Ⅱ検出面遺構配置図

E24

E21

E18

E15

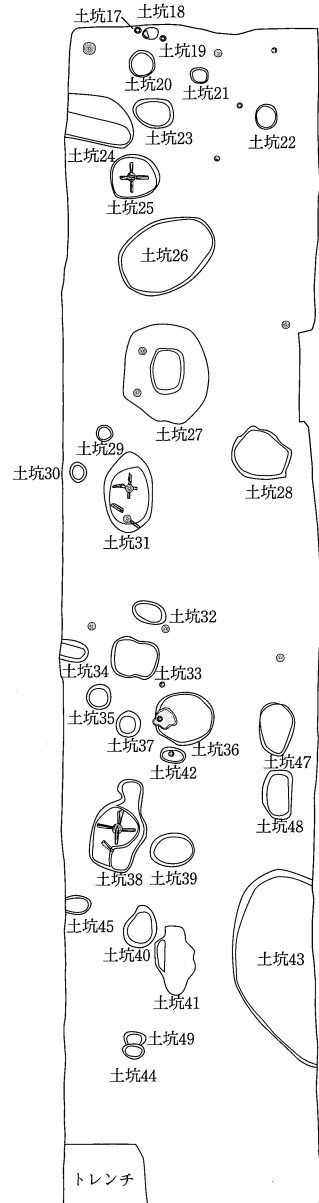
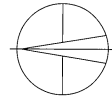
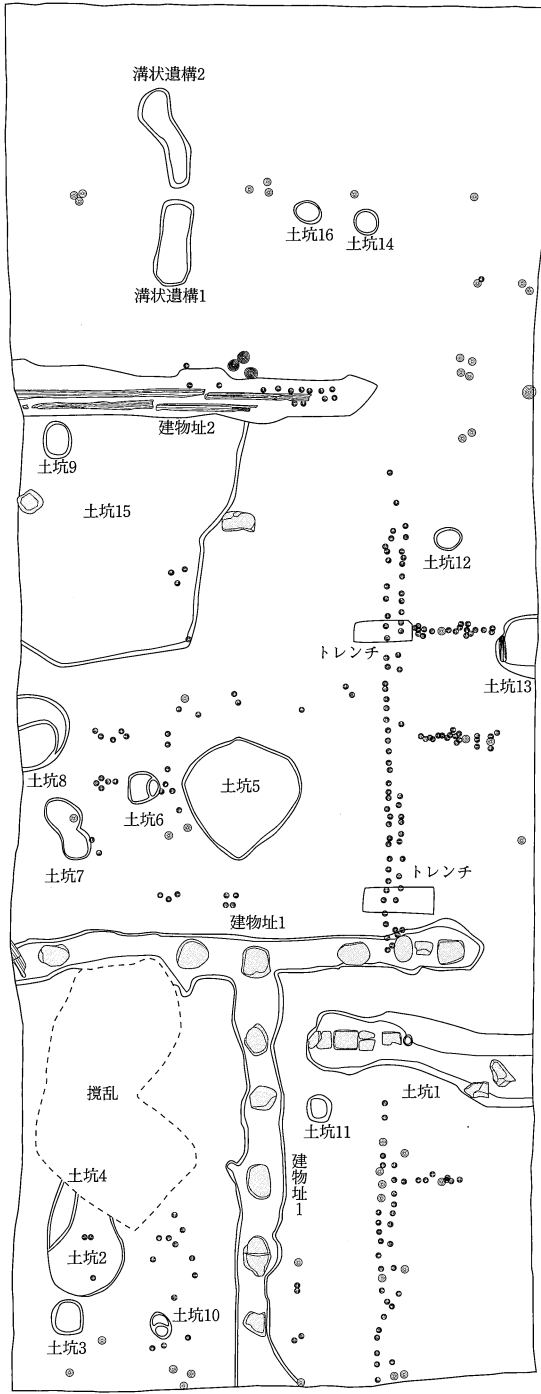
E12

E9

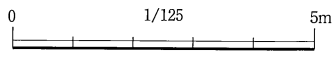
E6

E3

EW0



N3 NS0 S3 S6 S9 S12 S15



第7図 A地区第Ⅲ検出面遺構配置図

E24

E21

E18

E15

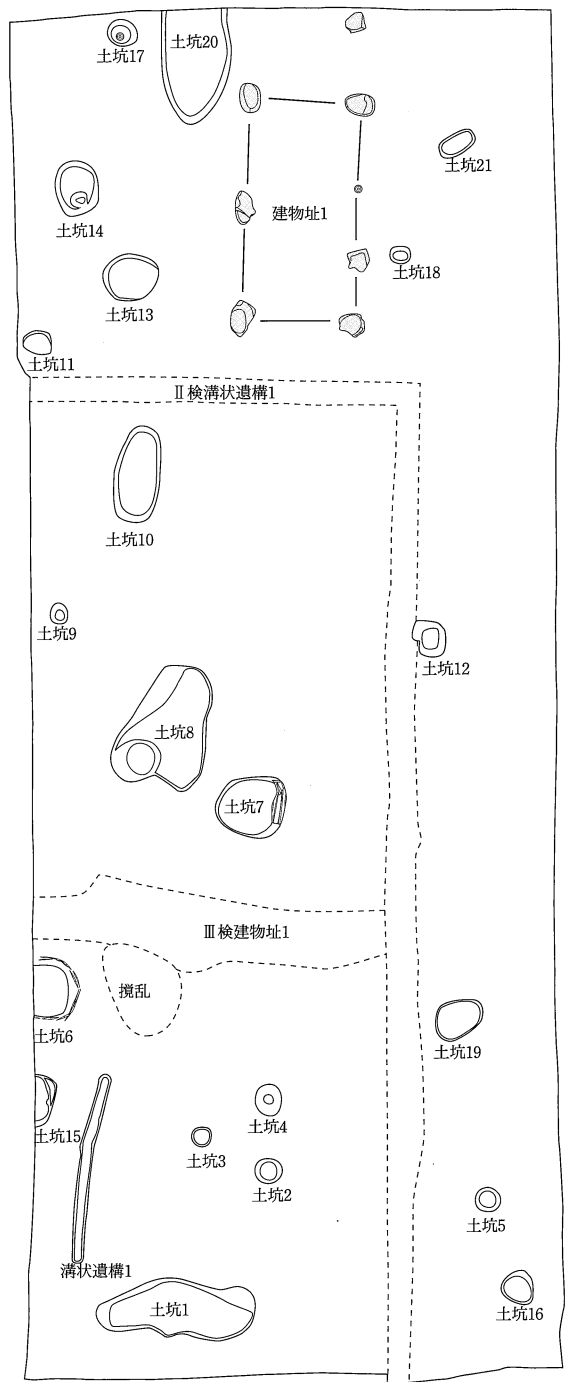
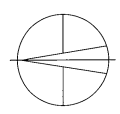
E12

E9

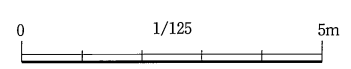
E6

E3

EW0

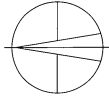


N3 NS0 S3 S6 S9



第8図 A地区第IV検出面遺構配置図

E24



E21

E18

E15

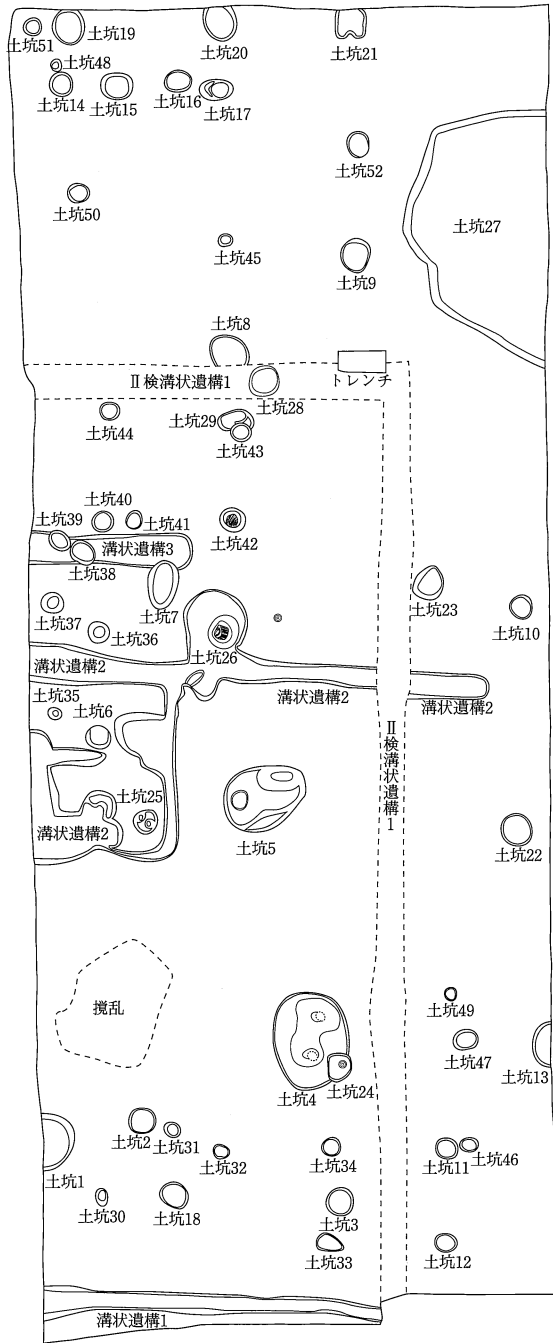
E12

E9

E6

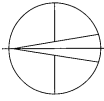
E3

EW0



第9図 A地区第V検出面遺構配置図

E24



E21

E18

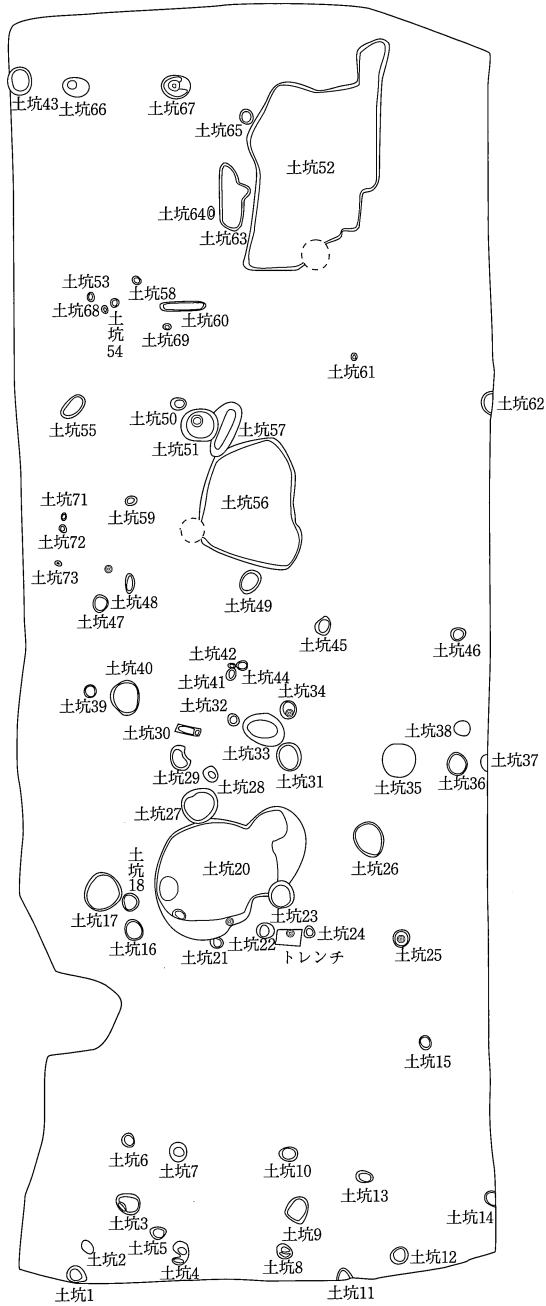
E15

E12

E9

E6

E3



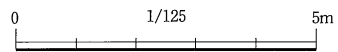
N3

NS0

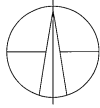
S3

S6

S9



第10図 A地区第VI検出面遺構配置図



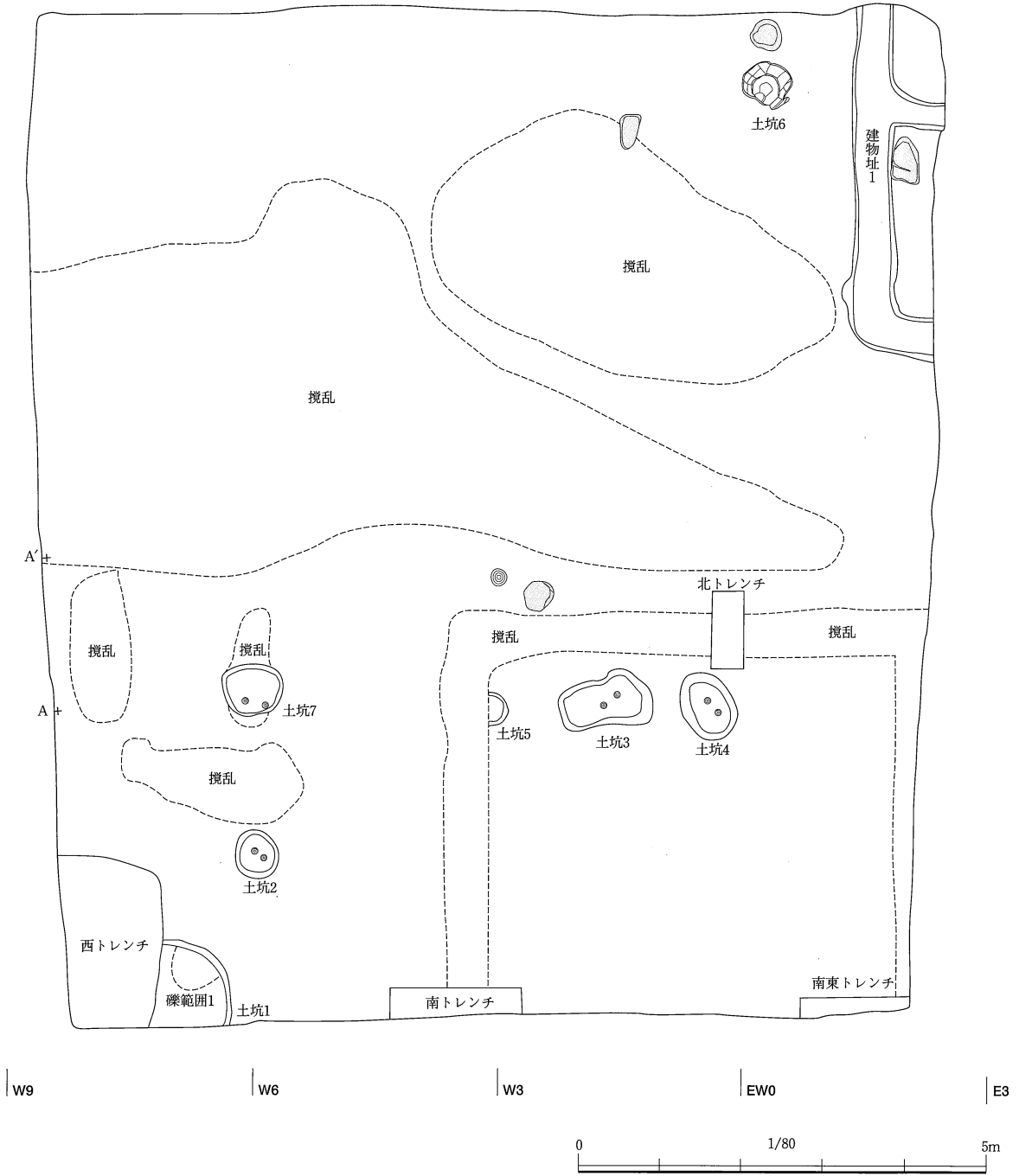
N27

N24

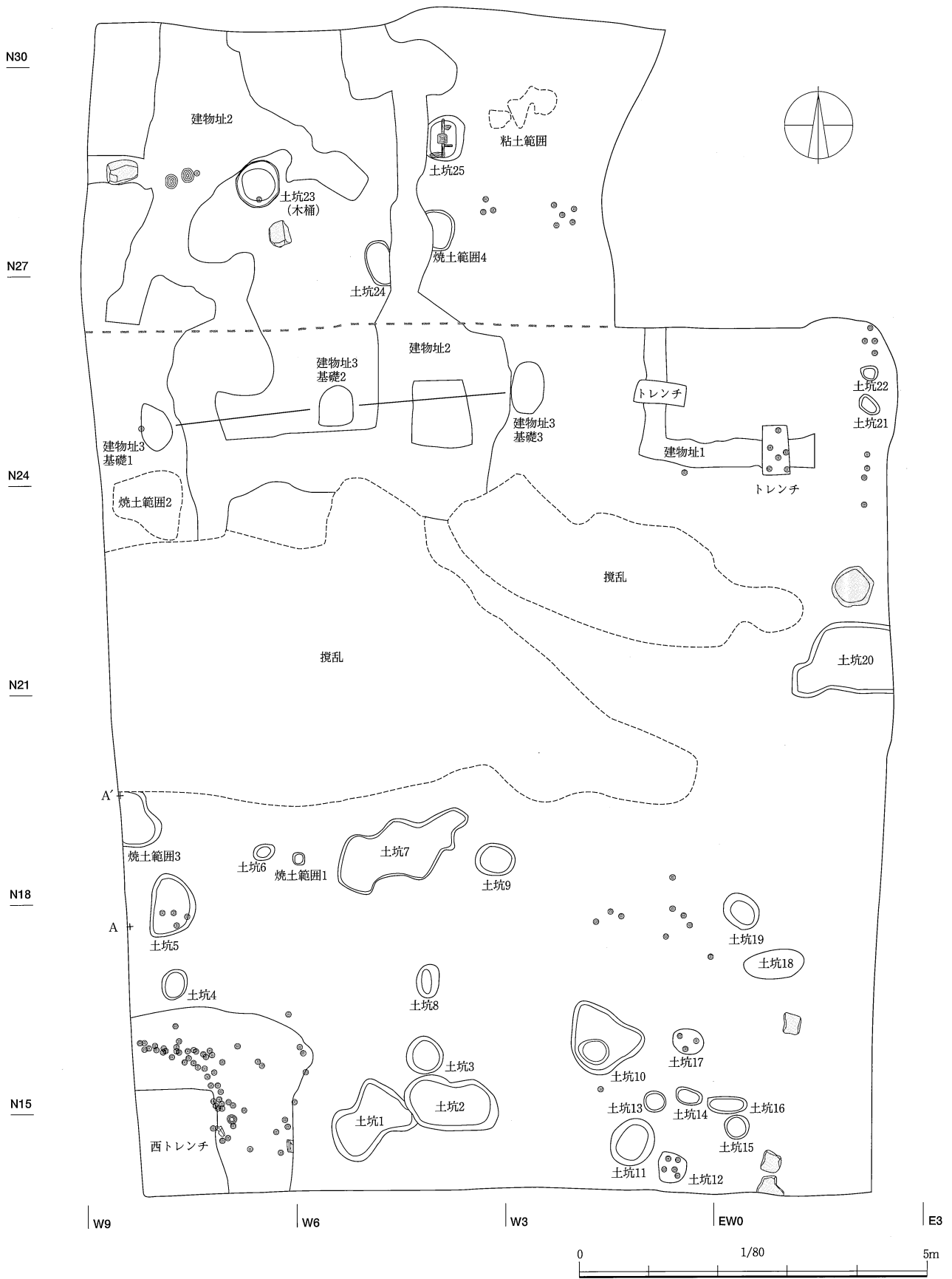
N21

N18

N15

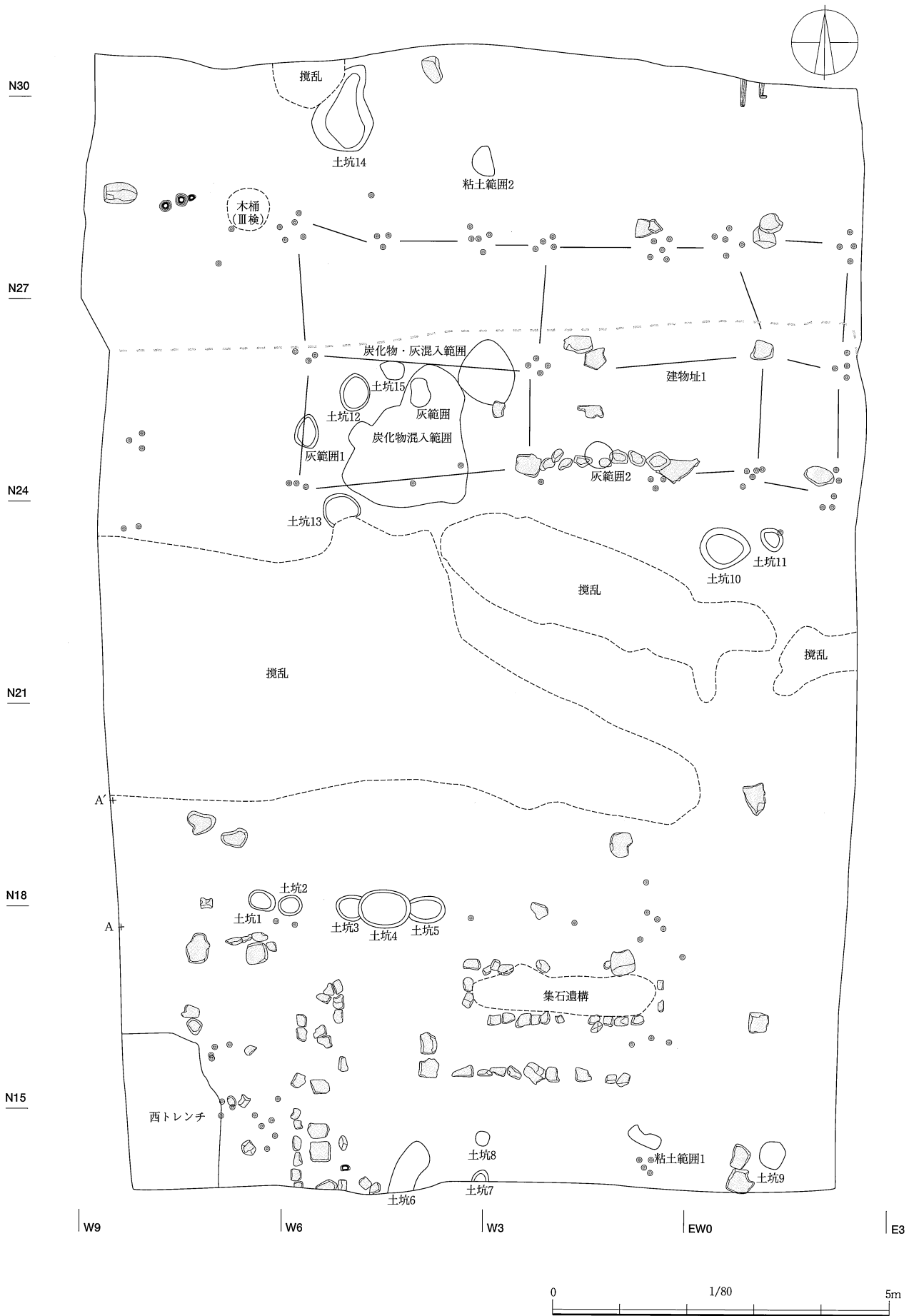


第11図 B地区第I検出面遺構配置図



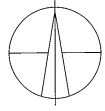
第12図 B地区第Ⅲ検出面遺構配置図

※灰色破線以北は拡張部

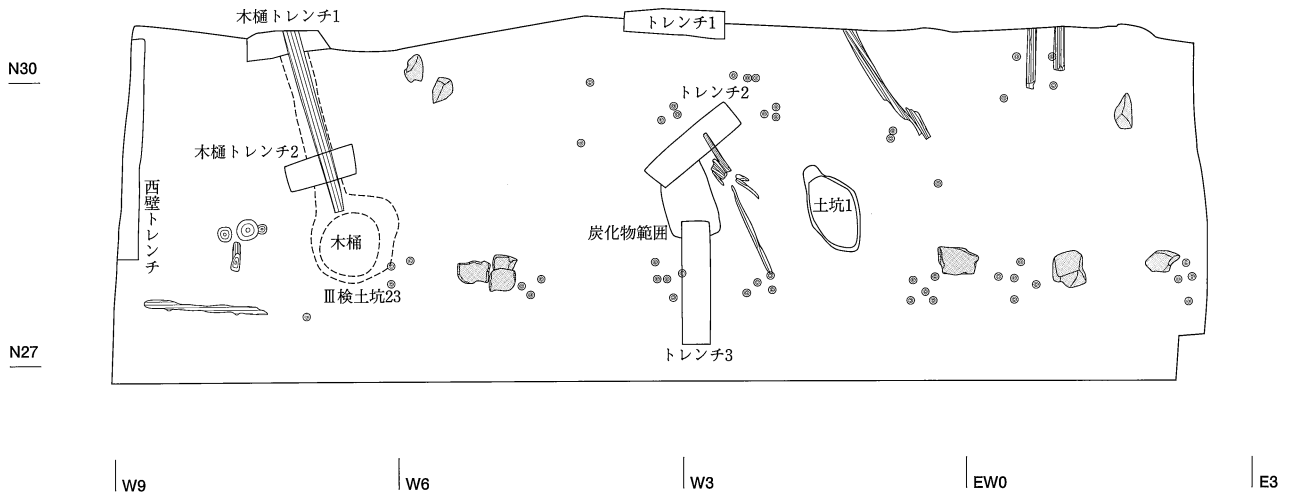


第13図 B地区第IV検出面遺構配置図

※灰色破線以北は拡張部

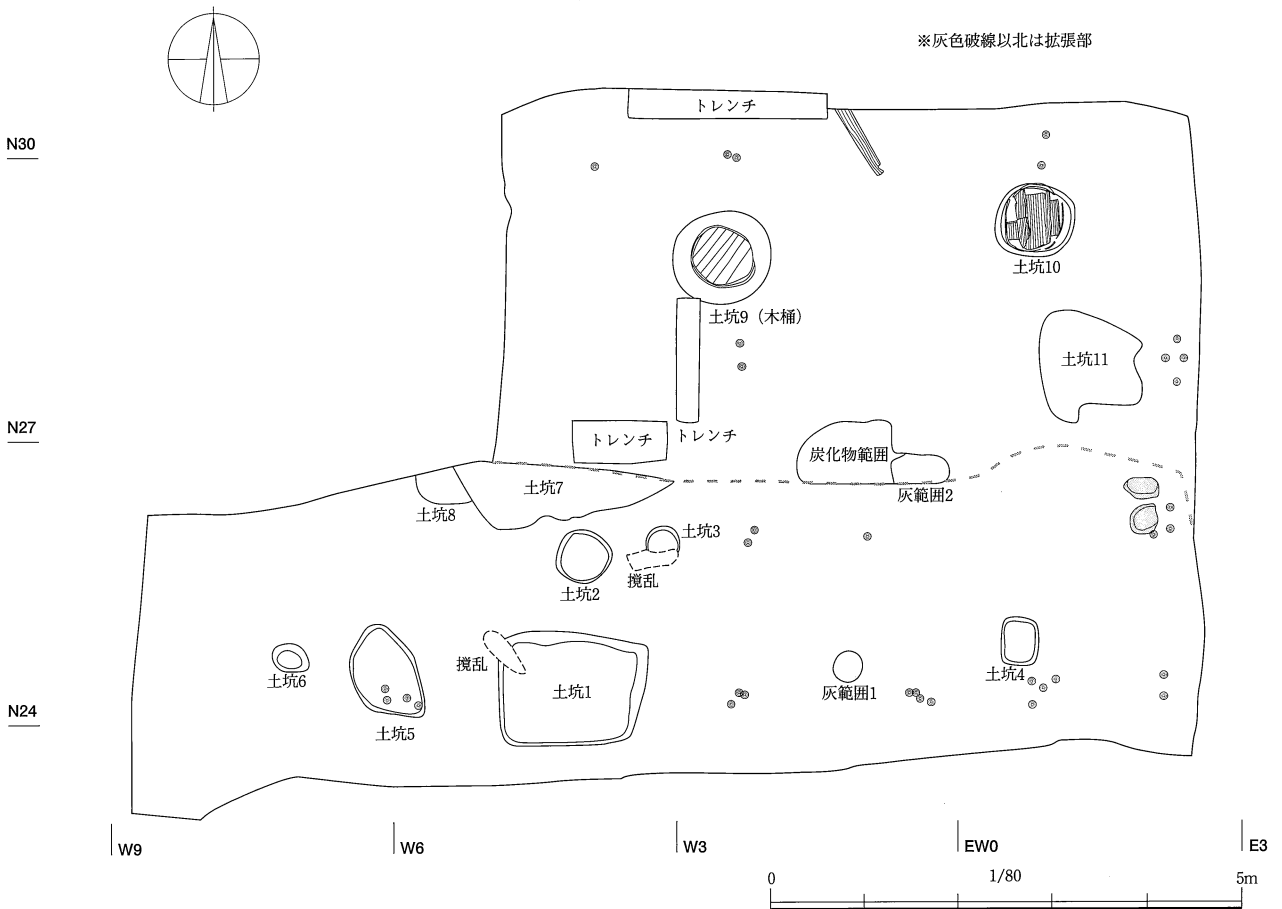


第V検出面



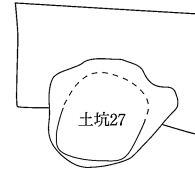
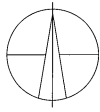
第VI検出面

※灰色破線以北は拡張部



第14図 B地区第V・VI検出面遺構配置図

N30



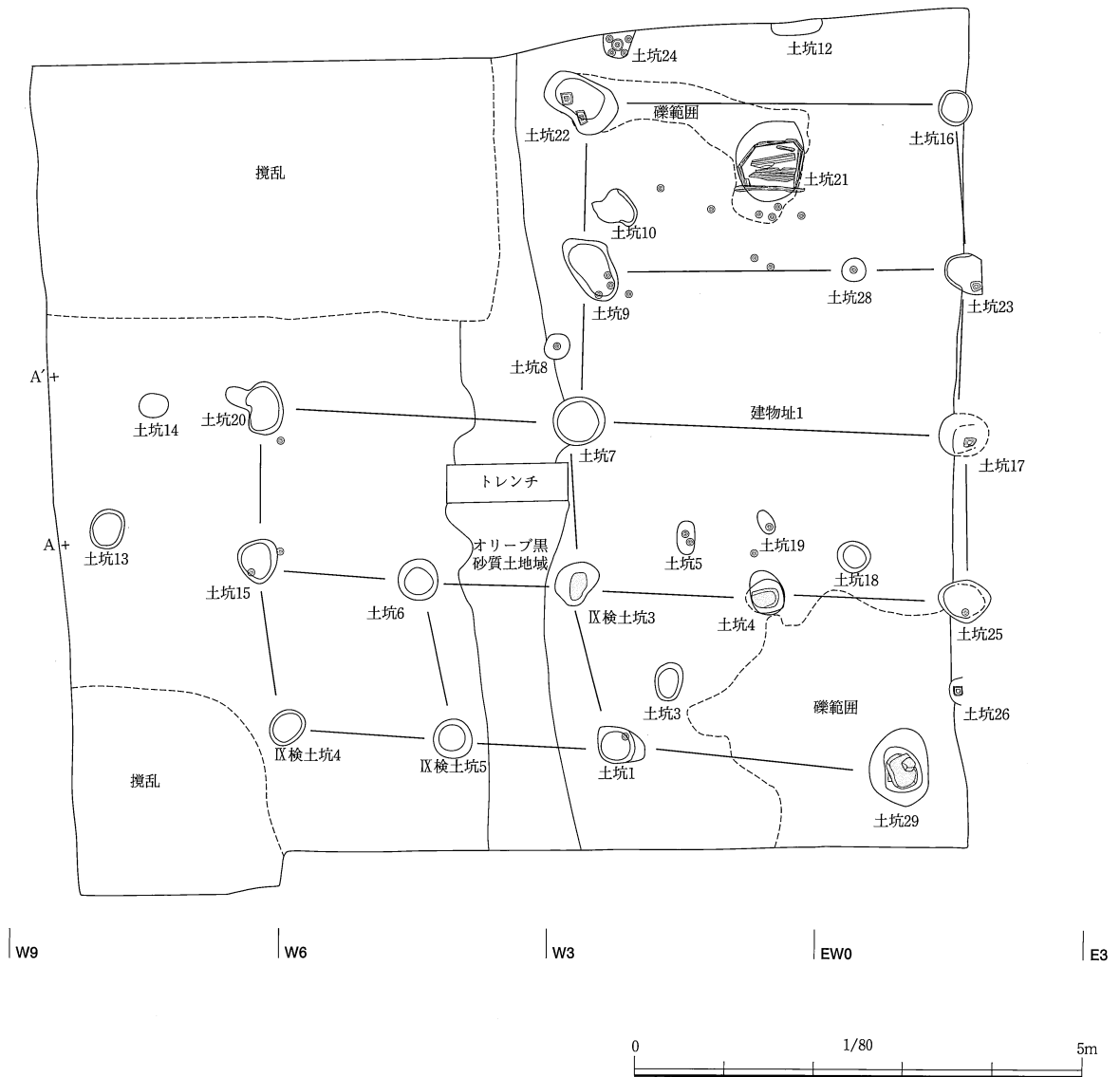
N27

N24

N21

N18

N15



第15図 B地区第Ⅷ検出面遺構配置図

N30

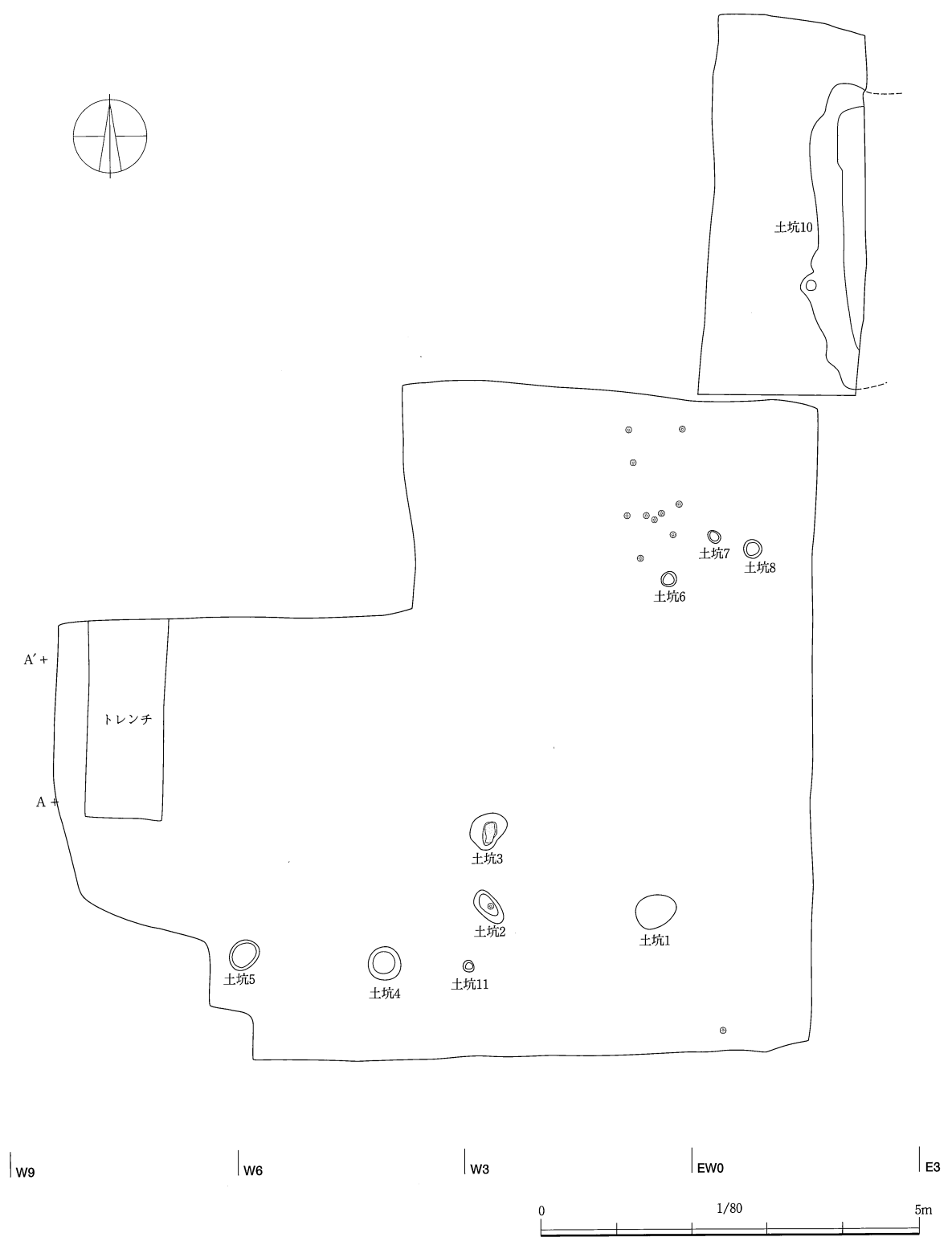
N27

N24

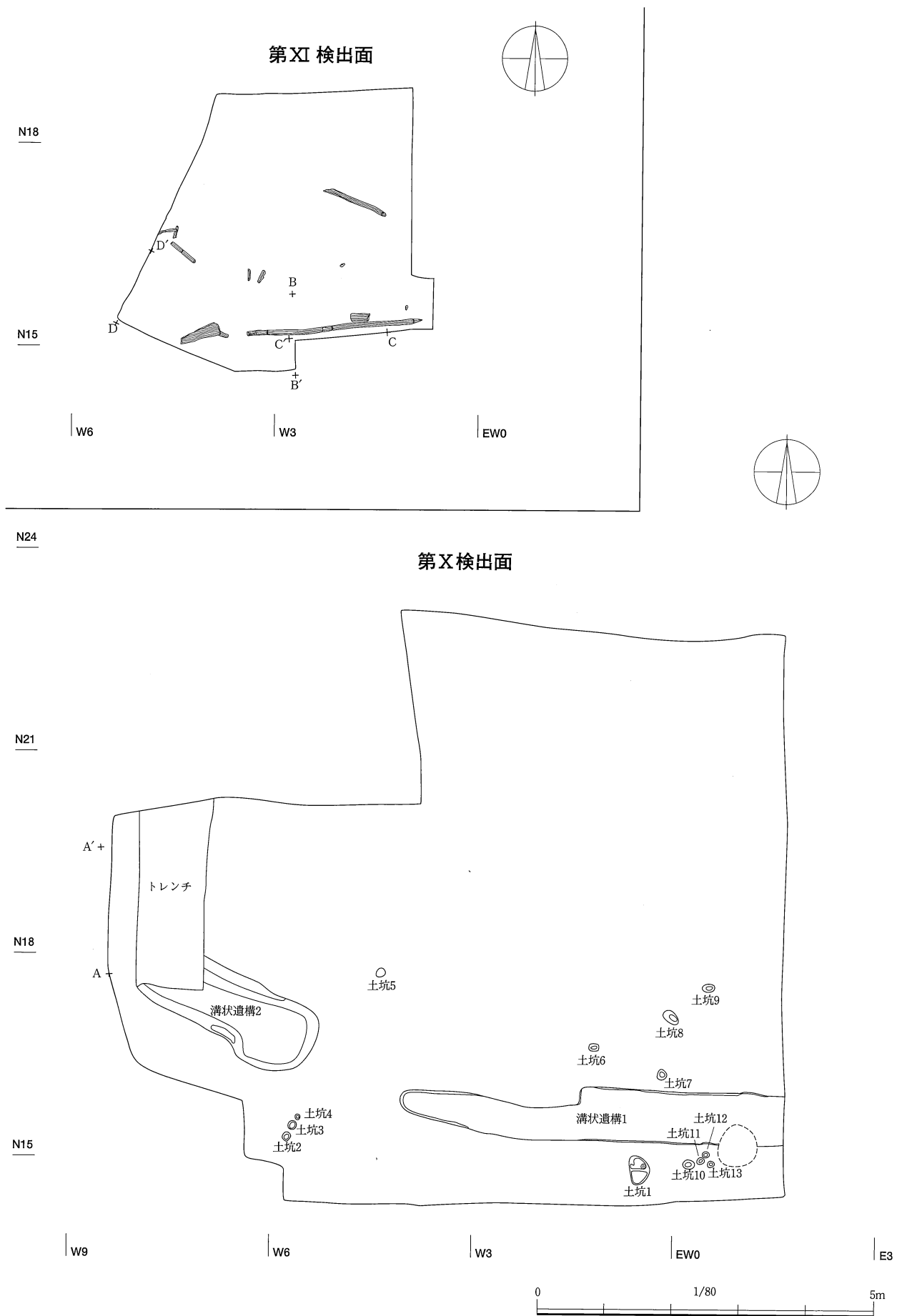
N21

N18

N15



第16図 B地区第区検出面遺構配置図



第17図 B地区第X・XI 検出面遺構配置図

4章 出土遺物

1節 土器・陶磁器

1 出土土器・陶磁器の概要

今回の調査では、調査面積に比して多量の土器・陶磁器が出土した。出土総量は、A区23,200g、B区19,280gで合計42,480gにおよぶ。このうち、可能な限り図化し、A区97点、B区152点の合計249点を掲載した。種別では、磁器・陶器・土器がみられ、器種・器形は多岐にわたる。出土遺物の時期は、A区から弥生土器1点、B区のⅪ検より古墳時代前期の遺物2点を得ているが、その他はすべて戦国時代末～近代（明治）のものである。以下、各地区の検出面ごとに、器種・器形およびその器種構成について記述する。

2 戦国末～明治時代の出土土器・陶磁器

(1) 器種分類

ア 磁器

磁器は、73点図化している。産地別にみると、肥前産が最も多く39点(53.4%)で、以下瀬戸美濃産33点(45.2%)、漳州窯産1点(1.4%)がみられる。器種は多様な形態・用途がみられ、本遺跡出土品を、形状から碗類・皿類・鉢類・壺類・瓶類・蓋物類・蓋類・その他に分類した。次に、この器種を、用途に応じて以下のような器形に分類した。碗類は、碗・猪口・蕎麦猪口。蓋物類は、蓋物・段重・合子。壺類は、壺、油壺。瓶類は、瓶・花瓶・仏花瓶・油徳利・御神酒徳利・爛徳利。その他は、仏飯具・散蓮華・紅猪口である。また、碗・皿・鉢については、器形により、さらに細分化を行なった。碗は、丸碗・平碗・筒碗・広東碗・端反碗・湯呑碗とした。皿類は、丸形・楕円形・輪花形・長方形・菊花形・変形として形を提示した。

これら磁器製品の用途は、ほとんどが日常雑器に使用されるもので、特に食器である碗41点(56.1%)・皿13点(17.8%)で7割以上を占められる。調理具・暖房具・灯明具・喫煙具は認められなかった。

イ 陶器

122点図化した。これらを産地別にみると、最も多いのは瀬戸美濃産で91点(74.6%)、以下、京・信楽系が11点(9.1%)、肥前産が7点(5.7%)、備前1点(0.8%)がみられる。器種は、碗類・皿類・向付・鉢類・片口類・植木鉢類・蓋類・火入類・瓶類・徳利類・土瓶類・壺類・甕類に分類される。器種の特徴では、磁器になかった煮炊具（鍋類）や貯蔵具（甕・鉢類）、調理具（搗鉢）がみられる。出土陶器の年代幅は、16世紀後半～19世紀後半（明治期）にわたる。

ウ 土器

本遺跡では、土師質土器と瓦質土器を一括して土器とした。これらは、基本的には無釉土製のものである。器種は、灯明皿・鉢（植木鉢）・鍋（内耳鍋・焙烙鍋）・火鉢がみられる。ほとんどが灯火具で、調理具や貯蔵具類は少ない。

(2) A区出土土器・陶磁器

A区では、検出面6面を確認しており、各検出面から出土遺物を得ている。これらの産地は、瀬戸美濃・常滑・信楽・京都・備前・肥前・在地産土器と多岐にわたるが、出土量を比較すると、陶器では瀬戸・美濃産、磁器では肥前産がその中心をなしている。以下、各検出面の様相を述べる。

第Ⅰ検出面出土土器・陶磁器（第19図1～20）

16点を図化提示した。建1からは、肥前産染付碗（1）、瀬戸美濃産搗鉢（2・3）の3点を図化している。4は、瀬戸美濃産の陶胎染付碗である。内面見込み部に、六曜文と二重の圏線が巡る。19世紀初頭のものか。検出面からは、6点（5～10）出土。5～7は肥前産磁器である。5は、肥前産端反碗、7は小瓶（御神酒徳

利)である。9は産地不明の壺か徳利である。胎土は灰色で緻密、釉薬は灰釉に鉄釉を流し掛けしている。10は、土師質の火鉢である。11～20は、トレンチからの出土である。瀬戸美濃産小瓶(11)、瀬戸美濃産灯明受皿(16・17・18)がある。20は、瀬戸美濃産織部向付である。14は、肥前産磁器の広東碗で、19世紀初頭のものともみられる。第Ⅰ検出面出土遺物群は、19世紀初頭～中頃の時期に比定される。

第Ⅱ検出面出土土器・陶磁器(第19図21～37)

17点を図化提示した。土2からは、瀬戸美濃産爛徳利(27)が出土、土坑11からは、21～26の6点が出土した。21は、肥前産色絵磁器碗で、外面に赤絵の圏線が巡っている。22は、瀬戸美濃産磁器で、コバルト呉須により文様が描かれている。19世紀後半のものである。26は瀬戸美濃産灯明受皿、24・25は瀬戸美濃産灯明皿である。内面から口縁外面に錆釉が掛けられている。23は、瀬戸美濃産志野皿である。内面に鉄絵がみられ、17世紀初頭のものか。土坑11は、23を除き19世紀後半に位置付けられ、上層の遺構の可能性が高い。溝1からは、瀬戸美濃産陶胎染付皿(28)、溝2からは京・信楽系碗(29)が出土。18世紀末から19世紀初頭のものともみられる。検出面からは、瀬戸美濃産の鉄釉螺旋文碗(30)、灰釉丸碗(31)、灯明受皿(32)、産地不明の壺か甕(34・35)、在地産土師器播鉢(36)が出土した。いずれも18世紀末～19世紀初頭のものである。

第Ⅲ検出面出土土器・陶磁器(第20図38～65)

28点図化した。器種は、碗・皿・向付・仏飯具・蓋・壺・小瓶・内耳鍋がみられる。陶器では、瀬戸美濃産が多い。土9からは、志野向付(42)、土27からは志野端反丸皿(41)、土15からは、志野丸碗(40)が出土している。いずれも17世紀初頭のものともみられる。土43からは、内面見込みに呉須絵がある灰釉丸碗(38)、土25からは鉄釉螺旋文碗(39)がある。17世紀中頃から後半ともみられる。検出面出土遺物の中でも、51・52・53の志野、59の志野織部向付、49の丸碗(銅緑釉)などが、いずれも瀬戸美濃産登窯Ⅰ期(17世紀初)に該当すると考えられる。48は、肥前産京焼風肥前陶器である。底裏に刻印が残る。17世紀中頃か。43・54は、土師器皿である。いずれもロクロにより成形されている。磁器は、検出面から4点(45・46・56・60)出土しているが、いずれも19世紀代のもので、上層から混入した可能性が高い。

第Ⅳ検出面出土土器・陶磁器(第20図66～89)

24点図化提示した。磁器の出土はなく、陶器と土器に限られる。67・71は瀬戸美濃産灰釉折縁深皿である。67の見込み部には、印花刻印がみられる。69は瀬戸美濃産志野丸皿、70・72は、瀬戸美濃産灰釉端反皿である。70は、見込み中心部に刻印があり、その周囲を輪禿ぎして釉を掻き取っている。74～88は土師器皿である。ロクロ成形で、底裏に回転糸切痕が残る。器形は、腰部でやや屈曲して、八の字上に口縁に向けて開く。66・77・79・85・88の口縁端部には、煤の付着が観察できることから、灯明具として使用された可能性が高い。78・80～84・86・87は被熱し、銅または銅滓が付着していることから、坩堝として使用された可能性が高い。89は灰釉皿である。緻密な淡黄白色の胎土を呈している。器面の調整は、高台脇から口縁部に向けて横方向の回転ヘラ削りが施されている。高台は削り出し高台で、底裏も丁寧に削ってあり、兜巾がみられない。施釉は、畳付と口縁端部内面を除き全面に施釉される。肥前産の可能性が高い。Ⅳ検は、瀬戸美濃大窯Ⅴ期(16世紀末～17世紀初頭)に比定できる。

第Ⅴ検出面出土土器・陶磁器(第21図90～96)

7点図化した。土4からは土師器皿(90)と内耳鍋(91)が出土している。91は、耳部は欠損し、口縁部はハの字状に開き、内面に幅の広い調整痕が1周する。93・94は、瀬戸美濃産灰釉丸皿である。93には、底面に円錐ピンの痕跡が3箇所残存している。96は瀬戸美濃産志野徳利である。外面はヘラケズリ調整され、底部には低い削り出し高台がある。92は、錆釉が施された播鉢である。瀬戸美濃産か。95は、土師器皿である。Ⅴ検の年代観は、瀬戸美濃大窯Ⅳ～Ⅴ期(16世紀後半)に比定される。

第Ⅵ検出面出土土器・陶磁器（第21図97）

土坑31から瀬戸美濃産灰釉丸皿（97）が出土している。底部に輪トチンの痕跡が確認できる。他に、小片で図化できないが、内耳鍋小片が数点出土している。出土遺物が少ないが、瀬戸美濃大窯Ⅳ～Ⅴ期（16世紀後半）に比定できる。

（3）B区出土土器・陶磁器

B区の調査では、戦国期から近世の検出面Ⅰ～Ⅸ検が調査され、このうち最下層のⅨ検からは出土遺物がなかったものの、Ⅰ～Ⅷ検からは土器・陶磁器が出土した。以下、出土土器の様相について、検出面ごとに記述する。

第Ⅰ検出面出土土器・陶磁器（第21図98～109）

Ⅰ検は、12点を図化している。建1からは98～100の3点出土。いずれも磁器であるが、99・100が肥前産、98は瀬戸美濃産である。98は、端反碗の底部とみられる。19世紀後半代のものか。99は、内面見込み部に松竹梅の文様があり、底裏は蛇ノ目凹形高台で中心部に渦福文がある。18世紀中頃～後半のものともみられる。100は碗蓋で、外面に捻花文が描かれている。19世紀初めか。土7から、瀬戸美濃産磁器碗（101）、土4からは土師器皿（102）が出土している。検出面からは、103の瀬戸産磁器の端反碗、104の陶器鉢が出土している。104は、外面は錆釉が下塗りされ、その上に灰釉がかけられ、高台は削り出しである。産地は不明。106は、産地不明の陶器鉢である。107～109は土師器皿である。Ⅰ検の年代は、19世紀中頃～後半と推定される。

第Ⅱ検出面出土土器・陶磁器（第21図110～112）

3点図化提示している。110は肥前産青磁碗である。111は肥前産染付碗である。内外に1条の圏線が巡る。また、破断面には漆継ぎの痕跡が観察できる。112は瀬戸美濃産鉄釉碗である。出土遺物が少なく時期決定が難しいが、18世紀後半代に比定できよう。

第Ⅲ検出面出土土器・陶磁器（第21図113～127）

計15点を図化している。建1からは、土師器皿（113）が出土。外面に墨書が僅かに残る。土1からは焙烙鍋（116）が出土。外面底部は、手持ちヘラ削りされる。土8からは、瀬戸美濃産壺の底部（115）、土20からは瀬戸美濃産灰釉皿（114）が出土。検出面からは、瀬戸美濃産陶器（119・121・126・127）、肥前産磁器（118・122・123）が出土している。122は底裏にハリ支えの痕跡がみられる。123は、見込み蛇ノ目釉剥ぎされ、高台端部に砂目がつく。17世紀末～18世紀前半の波佐見産とみられる。127は灰釉火入で、口縁部が敲打され、釉が剥離している。126は蓋であるが、外面に刷絵がみられる。117は、コバルト呉須染付の19世紀後半代とみられる瀬戸美濃産磁器である。混入品の可能性もある。第Ⅲ検出面の時期は、17世紀後半～18世紀前半に比定される。

第Ⅳ検出面出土土器・陶磁器（第21・22図128～147）

礎石から肥前産染付皿（128）が出土。高台端部畳付部分のみ釉剥ぎされ、砂目が付く。1620～30年代のものか。検出面からは磁器4点（130・135・136・142）、瀬戸美濃産陶器（136～141）が出土している。134は、漳州窯産染付皿である。底部高台内は露胎し、ヘラ削りが施されていない。135は肥前産磁器の染付皿である。136は、瀬戸美濃産志野織部皿である。137・138は志野菊皿である。139・140は志野皿、141は、瀬戸美濃産鉄釉水滴である。139の見込み中央部には、印花文がみられる。143～147は土師器皿である。17世紀初頭（1630年代まで）に相当するとみられる。

第Ⅴ検出面出土土器・陶磁器（第22図148～150）

磁器はなく、陶器のみが出土している。すべて瀬戸美濃産である。148は、志野向付、149は志野端反皿、150は志野向付である。いずれも、瀬戸美濃大窯Ⅴ期（16世紀末～17世紀初頭）に比定される。

第Ⅵ検出面出土土器・陶磁器（第22図151～161）

陶器と土師器のみで、磁器の出土は認められない。陶器は、瀬戸美濃産のみ。土7からは151の瀬戸美濃産灰釉丸皿が出土。土10からは灰釉丸皿が出土しているが、登窯期の遺物のため、他の出土遺物群とは年代差がある。153は土師器火鉢である。検出面からは、志野鉄絵皿（155・157）、印花文のある皿（156）がみられる。154は、鉄釉茶入である。形態は芋子形で、被熱しており、外面には釉垂れがみられる。158～161は、土師器皿である。第Ⅵ検は美濃大窯Ⅴ期（16世紀末～17世紀初頭）に比定される。

第Ⅶ検出面出土土器・陶磁器（第22図162～166）

162・165は瀬戸美濃産志野の碗と皿である。162は被熱しており、外面の鉄絵が不鮮明になっている。瀬戸美濃大窯Ⅴ期に相当する。

第Ⅷ検出面出土土器・陶磁器（第22図167）

図化できたのは、167の碗のみ。胎土は鉄分の多い暗灰色をしており、灰釉が掛けられ、淡青緑色に発色している。16世紀末の肥前産陶器碗か。

第Ⅸ検出面出土土器・陶磁器（第22図168～169）

土坑10より2点出土している。168は、瀬戸美濃産碗の底部である。被熱しているためか、もともと掛けられていた灰釉が変質している。169は、内耳鍋の底部である。出土点数が少なく時期が判然としないが、内耳鍋の器高が深いものであることから16世紀末頃と考えられる。

(4) B区北側拡張部

B区では、調査途中で調査区を北側に拡張した。本調査区の検出面とは、必ずしも一致しない箇所があるので、ここでは拡張部出土土器・陶磁器について、別項を設けて記述していく。


第Ⅲ検出面北側拡張部出土土器・陶磁器（第23図179～192）

土24からは、瀬戸美濃産拳骨茶碗が出土。183～186・188・190・191・192は磁器である。186・188・191は瀬戸美濃産磁器で、コバルト呉須により染付されている。他はすべて肥前産である。191は散蓮華、192は戸車である。

第Ⅳ検出面北側拡張部出土土器・陶磁器（第23・24図193～225）

土14から出土した193は、瀬戸美濃産染付碗である。検出面から出土した196・198・201は瀬戸美濃産染付、204は瀬戸美濃産型打ち角皿である。いずれも、19世紀後半のものである。214・215は肥前産磁器である。陶器は、瀬戸美濃産・信楽産・京都産・肥前産・在地産土師器がみられる。瀬戸美濃産では、播鉢（216・217・218）、植木鉢（219）、灯明受皿（208・209）がある。在地産土師器は、皿（210～213）と、焙烙鍋（224）がある。203は、京焼の碗とみられる。206は備前産陶器皿である。187は、信楽系の壺である。

第Ⅴ検出面北側拡張部出土土器・陶磁器（第24図226～238）

226～231は磁器である。226は瀬戸美濃産磁器、227～231は肥前産染付碗である。235～238は、瀬戸美濃産の播鉢である。12の口縁内面には、の刻印がある。愛知県の大高焼か。

第Ⅵ検出面北側拡張部出土土器・陶磁器（第25図239～249）

239～241・244・245は磁器である。土11からは、瀬戸産染付碗（241）・肥前産碗（240）・蓋（244）が出土している。19世紀後半に比定される。247は、瀬戸美濃産志野向付である。

(5) 戦国時代末から近世の土師器皿

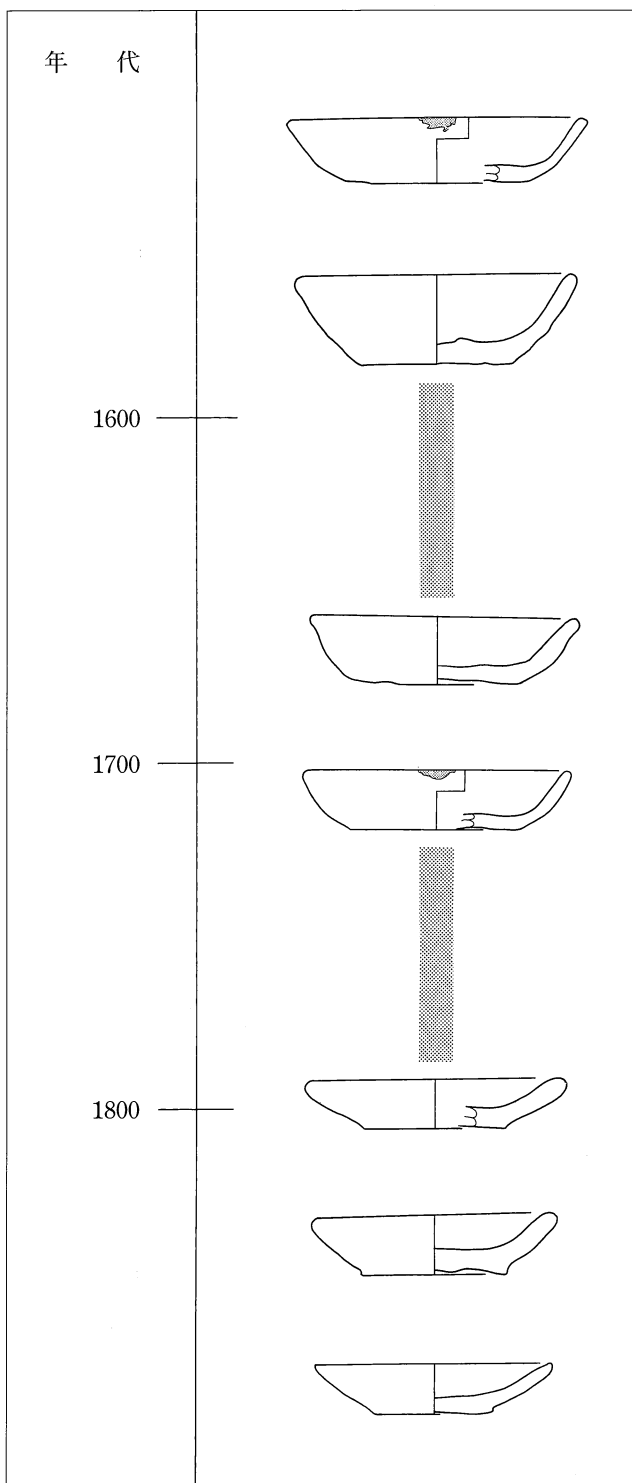
六九第4次調査では、16世紀末～19世紀後半にいたる陶磁器群と共伴して、土師器も多数出土している。土師器で特に出土量が多いのは皿で、そのほとんどの口縁部に煤が付着していることから、主として灯明皿として使用されていたものと考えられる。これらの成形技法は、すべてロクロ成形され、底面には回転糸切

り痕が観察できる。また、その器形と法量は、時期変遷の中で変化が認められるため、以下大略的な変遷を見てみたい。

土師器皿は、松本城下が形成される大窯Ⅳ～Ⅴ段階にはすでに存在しており、その後、近世を通じて普遍的に出土するものである。法量分化は特に認められないが、時期が新しくなると、口径が小さく器高が低くなる傾向にある。法量は、16世紀末段階で口径10.5cm前後、器高2.9cm前後、外傾指数72.4前後のものが、17世紀後半では、口径9.6cm前後、器高2.0cm前後、外傾指数81.2となる。19世紀中～後になると、この傾向はさらに強まり、口径9.6cm前後、器高2.0cm前後、体部の傾きはさらに強くなり、外傾指数は100となる。器厚も厚くなり、口唇部が厚く膨れる形状となる。土師器皿の16世紀末から19世紀にかけての器形の変化は、口径・器高・底径が小型化し、体部の開きが強くなる傾向にある。

3 弥生～古墳時代の土器（第25図250～251）

A区Ⅵ検より弥生時代の高杯（250）の脚部が出土。杯部内面および外面に朱彩が施されている。B区Ⅺ検より古墳時代前期と推定される甕の頸部と胴部の2点が出土した。図化できたのは、251の1点のみ。器面には細かい刷毛目調整がなされている。胎土は、内外面ともに灰褐色を呈しており、在地産でない可能性が大きい。



第18図 土師器皿変遷図

第4表 土師器皿法量の変化

時期	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	外傾指数
16 c 末	10.0～11.4 (平均10.5)	5.4～7.0 (平均6.3)	2.3～3.4 (平均2.9)	72.4
17 c 前	9.3～10.6 (平均9.8)	5.2～6.9 (平均6.0)	2.1～3.2 (平均2.6)	73.0
17 c 後～18 c 前	8.6～10.0 (平均9.6)	5.2～6.4 (平均5.7)	2.0～2.8 (平均2.4)	81.2
19 c 中～後	8.4～10.0 (平均9.6)	5.0～6.0 (平均5.4)	1.9～2.2 (平均2.0)	100.0

註) 外傾指数は、 $\frac{(\text{口径}-\text{底径})}{2} \div \text{器高} \times 100$ で求めた。数値が高いほど、傾きが強くなることを示している。

第5表 土器・陶磁器観察表

図No.	実測番号	出土地点	注記	種別	器形	口径	量(cm)		胎土	技法・文様・形態の特徴	釉調	推定年代	推定産地
							口径	高さ					
1	タテ-3	A I 検 建1	I 検-008	磁器	碗	(39.0)	(3.8)	白	外面2箇所文様 口縁ヨコナデ・胴部ロクロナデ・内面櫛目 口縁ヨコナデ・底減・胴部・内面ロクロナデ	染付	19c	肥前	
2	タテ-2	A I 検 建1	I 検-008	陶器	搦鉢	(25.0)		乳白	口1/12	錆釉	19c	瀬戸美濃	
3	タテ-1	A I 検 土4	I 検-002	陶器	搦鉢	(10.7)	(3.6)	灰	陶胎染付、見込具須線六曜文・三重圏線	灰釉	19c前	瀬戸美濃	
4	土-1	A I 検 土4	I 検-002	陶器	碗	(10.7)	(4.3)	白	内面見込・二重圏線、見込み草花文、ケズリダシ高台、底部回転ヘラケナズリ	染付	19c前	肥前	
5	土-2	A I 検 土4	I 検-011	磁器	碗	(10.7)	(5.7)	白			18c後～		
6	検-4	A I 検 検出	I 検-012	磁器	筒碗	(10.7)	(4.0)	白	底裏一重圏線、高台端部露胎	染付	19c前	肥前	
7	検-2	A I 検 検出	I 検-012	磁器	小瓶	(10.7)	(2.6)	白	高台端部露胎	染付	19c	肥前	
8	土-1	A I 検 検出	I 検-011	磁器	碗	(10.7)	(8.1)	白	コハルト具須、ケズリダシ高台、底部蛇の目高台	染付	19c後	瀬戸美濃	
9	検-3	A I 検 検出	I 検-011	陶器	壺	(10.7)	(7.0)	白	鉄釉流し掛け、底部置付露胎	長石・鉄釉	19c	産地不明	
10	検-1	A I 検 検出	I 検-012	土器	火鉢	(10.7)	(25.2)	暗褐	口縁ヨコナデ・胴部・内面ロクロナデ			産地不明	
11	トレンチ-6	A I 検 T2	I 検-005	磁器	小瓶	(10.7)	(2.0)	白	胴部ロクロナデのち丸ミケズリ・下部回転ヘラケナズリ・内面ロクロナデ、底部回転ヘラケナズリ	白磁	19c	瀬戸美濃	
12	土-1	A I 検 T2	I 検-003	磁器	小碗	(10.7)	(3.1)	白	コハルト具須、外面に漢詩文、下部回転ヘラケナズリ、ケズリダシ高台	染付	19c後	瀬戸美濃	
13	土-2	A I 検 T2	I 検-005	磁器	端反碗	(10.6)		白～灰	口縁ヨコナデ、内外面ロクロナデ、外面草花文、口縁内面輪繫ぎ文	染付	19c中	瀬戸美濃	
14	トレンチ-7	A I 検 T3	I 検-006	磁器	広東碗	(10.6)		白	見込み部一重圏線	染付	19c前	肥前	
15	トレンチ-1	A I 検 T2	I 検-003	陶器	碗	(12.8)		灰	口縁ヨコナデ・胴部・内面ロクロナデ	鉄釉	18c後～	瀬戸美濃	
16	トレンチ-2	A I 検 T2	I 検-004	陶器	灯明受	(9.2)	4.2	灰	口縁ヨコナデ・胴上部ロクロナデ・下部回転ヘラケナズリ(重碗底)、内面ヨコナデ・ロクロナデ、底部回転ヘラケナズリ、切込部指ナデ	灰釉	19c	瀬戸美濃	
17	トレンチ-3	A I 検 T3	I 検-006	陶器	皿	(9.0)		灰	口縁ヨコナデ・胴部回転ヘラケナズリ、内面ヨコナデ・ロクロナデ	灰釉	19c	瀬戸美濃	
18	トレンチ-4	A I 検 T2	I 検-003	陶器	皿	(11.0)		灰	口縁ヨコナデ・胴部回転ヘラケナズリ、内面ヨコナデ・ロクロナデ	錆釉	19c	瀬戸美濃	
19	トレンチ-5	A I 検 T3	I 検-006	陶器	搦鉢	(29.2)		褐	口縁ヨコナデ・胴部ロクロナデ、内面ロクロナデ・櫛目	鉄釉	19c	肥前	
20	トレンチ-8	A I 検 T南	I 検-007	陶器	向付	(9.8)	(9.8)	乳白	復興織部、口縁ヨコナデ、胴下部回転ヘラケナズリ、ケズリダシ高台、内面ロクロナデ、底部回転ヘラケナズリ露胎	長石・銅緑・鉄釉	18c後～	瀬戸美濃	
21	土-6	A II 検 土11	II 検-021	磁器	碗	(4.0)	(4.0)	乳白	腰帯二重圏線、見込み鳥文か	赤絵	19c前	肥前	
22	土-7	A II 検 土11	II 検-021	磁器	皿	(9.6)	(5.2)	白	コハルト架付、見込み草花文	染付	19c後	瀬戸美濃	
23	土-4	A II 検 土11	II 検-020	陶器	皿	(10.8)		乳白	志野、胴部回転ヘラケナズリ、内面ロクロナデ、削り出し高台、底部回転ヘラケナズリ、見込部鉄絵	長石釉	17c前	瀬戸美濃	
24	土-2	A II 検 土11	II 検-022	陶器	灯明皿	(10.0)		黒～黒褐	口縁ヨコナデ、外面下半回転ヘラケナズリ、内面ロクロナデ	錆釉	18c後～	瀬戸美濃	
25	土-3	A II 検 土11	II 検-022	陶器	灯明皿	(10.0)		黒～黒褐	口縁ヨコナデ、外面下半回転ヘラケナズリ、内面ロクロナデ	錆釉	18c後～	瀬戸美濃	
26	土-5	A II 検 土11	II 検-021	陶器	皿	(11.2)	3.6	茶～黒褐	口縁ヨコナデ・胴部回転ヘラケナズリ、内面ヨコナデ・ロクロナデ、底部回転ヘラケナズリ	錆釉	18c後～	瀬戸美濃	
27	土-1	A II 検 土2	II 検-017	磁器	燗徳利	(5.8)	(5.8)	白	底裏・内面露胎	染付	19c前	瀬戸美濃	
28	溝-2	A II 検 溝1	II 検-028	陶器	皿	(13.2)		淡黄白	陶胎染付、見込み部菊花文	染付	19c前	瀬戸美濃	
29	溝-1	A II 検 溝2	II 検-030	陶器	碗	(12.2)		暗灰	外面鉄絵、体部下半ヘラケナズリ	灰釉	18c後～	京・信楽	
30	検-4	A II 検 検出	II 検-037	陶器	丸碗	(11.6)		乳白	胴部・内面ロクロナデ、外面上半部横位平行洗線	鉄釉	18c後～	瀬戸美濃	
31	検-5	A II 検 検出	II 検-039	陶器	丸碗	(9.8)	3.8	乳白	胴部ロクロナデ・下部回転ヘラケナズリ、ケズリダシ高台、内面ロクロナデ、底部回転ヘラケナズリ	灰釉	18c後～	瀬戸美濃	
32	検-6	A II 検 検出	II 検-039	陶器	灯明受	(9.8)		乳白	油穴穿孔、胴部回転ヘラケナズリ、内面ヨコナデ	錆釉	18c後～	瀬戸美濃	
33	検-3	A II 検 検出	II 検-040	陶器	植木鉢	(6.0)	(6.0)	茶褐	底部中央部に水抜き穿孔、ケズリダシ高台露胎、底部回転ヘラケナズリ露胎	鉄釉	18c後～	信楽	
34	検-1	A II 検 検出	II 検-038	陶器	壺類	(8.0)	(8.0)	灰褐	胴部回転ヘラケナズリ	鉄釉	18c後～	産地不明	
35	検-2	A II 検 検出	II 検-039	陶器	壺	(13.6)	(13.6)	灰褐	胴部ロクロナデ・下部回転ヘラケナズリ、ケズリダシ高台に3単位の透かし	鉄釉	18c後～	産地不明	
36	検-7	A II 検 検出	II 検-037	土器	搦鉢	(8.4)	(8.4)	褐～暗褐	胴部ロクロナデ、内面櫛目、底部回転糸切	鉄釉	19c前	産地不明	
37	ソノタ-1	A II 検 排土	II 検-041	陶器	天目茶碗	(8.0)		灰	口縁ヨコナデ・胴上部ロクロナデ・下部回転ヘラケナズリ露胎、内面ロクロナデ	鉄釉	16c末～	瀬戸美濃	
38	土-4	A III 検 土43	III 検-067	陶器	碗	(5.2)		淡緑～淡灰緑	見込具須線、高台露胎	灰釉	17c中	瀬戸美濃	

図No.	実測番号	出土地点	注記	種別	器形	口径	高さ	残存度	胎土	技法・文様・形態の特徴	釉調	推定年代	推定産地
39	土-3	AⅢ検 土25	Ⅲ検-060	陶器	丸碗	口径(11.0)	器高(11.0)	口1/8	乳白	外面上半部平行洗線2本	鉄釉	17c中	瀬戸美濃
40	土-5	AⅢ検 土15	Ⅲ検-058	陶器	碗	口径(11.2)	器高(11.2)	口1/16	乳白	志野・外面鉄絵	長石釉	17c前	瀬戸美濃
41	土-2	AⅢ検 土27	Ⅲ検-062	陶器	端反皿	口径(11.2)	器高(6.4)	口1/8底1/8	乳白	志野・底部ピントチン痕・高台内露胎	長石釉	16c末～17c初	瀬戸美濃
42	土-6	AⅢ検 土9	Ⅲ検-056	陶器	向付			底1/4	乳白	志野・底部ピントチン痕	長石釉	17c初	瀬戸美濃
43	土-1	AⅢ検 土44	Ⅲ検-068	土器	皿				灰～褐	胴部・内面ロクロナデ・底部回転糸切		16c末～17c初	在地産
44	土-7	AⅢ検 土9	Ⅲ検-054	土器	内耳鍋	口径(34.2)	器高(11.3)	口1/4底1/4	暗灰褐	口縁内面に深いヨココナデ1周・指頭圧痕・耳部欠損		16c末～17c初	在地産
45	125	AⅢ検 検出面	Ⅲ検-082	磁器	碗	口径(6.3)	器高(3.8)	口1/2高台3/4底	白	ケズリダシ高台・底部回転ヘラケズリ・口縁内面雷文	染付	19c後	瀬戸美濃
46	123	AⅢ検 検出面	Ⅲ検-080	磁器	碗	口径(7.0)	器高(3.8)	底1/2高台1/3	淡灰白	ケズリダシ高台・底部回転ヘラケズリ・高台外面二重圏線・口縁内面二重圏線	染付	19c	瀬戸美濃
47	検-5	AⅢ検 検出面	Ⅲ検-079	陶器	碗	口径(10.5)	器高(10.5)	口1/6	黒～黒褐	口縁コナデ・胴部・内面ロクロナデ	鉄釉		瀬戸美濃
48	検-2	AⅢ検 検出面	Ⅲ検-080	陶器	丸碗	口径(11.2)	器高(11.2)	口1/10底1/2	淡黄灰	京焼風肥前陶器 底裏刻印	灰釉	17c中	肥前
49	検-9	AⅢ検 検出面	Ⅲ検-079	陶器	丸碗	口径(11.0)	器高(11.0)	口1/10	乳白	口縁コナデ・胴部回転ヘラケズリ・内面ロクロナデ	銅緑釉	17c前	瀬戸美濃
50	検-6	AⅢ検 検出面	Ⅲ検-080	陶器	碗	口径(4.9)	器高(4.9)	底完	乳白	ケズリダシ高台	鉄釉	16c末～17c初	瀬戸美濃
51	検-17	AⅢ検 検出面	Ⅲ検-080	陶器	皿	口径(7.6)	器高(7.6)	底1/4	乳白	志野・体部下半回転ヘラケズリ・ケズリダシ高台	長石釉	17c初	瀬戸美濃
52	検-10	AⅢ検 検出面	Ⅲ検-075	陶器	皿	口径(10.6)	器高(2.2)	口9/10底完	乳白	志野・口縁コナデ・胴部・内面ロクロナデ・底部回転ヘラケズリ	長石釉	16c末～17c初	瀬戸美濃
53	検-11	AⅢ検 検出面	Ⅲ検-079	陶器	向付	口径(13.8)	器高(13.8)	口1/32	灰白	志野・口縁コナデ・胴部回転ヘラケズリ	長石釉	16c末～17c初	瀬戸美濃
54	検-4	AⅢ検 検出面	Ⅲ検-076	土器	皿	口径(8.1)	器高(2.6)	ほぼ完	灰褐	口縁コナデ・胴部・内面ロクロナデ・底部回転糸切			在地産
55	検-3	AⅢ検 検出面	Ⅲ検-079	土器	皿	口径(8.6)	器高(3.2)	底5/6	淡灰褐	口縁コナデ・胴部・内面ロクロナデ			在地産
56	検-8	AⅢ検 検出面	Ⅲ検-082	磁器	小瓶	口径(6.1)	器高(6.1)	底7/16	灰白	胴部回転ヘラケズリ・内面ロクロナデ・底部回転ヘラケズリ露胎	透明釉	19c	肥前
57	検-7	AⅢ検 検出面	Ⅲ検-082	磁器	徳利	口径(5.6)	器高(5.6)	底3/8	灰	胴上部ロクロナデ・下部回転ヘラケズリ・内面ロクロナデ・ケズリダシ高台のうちナデ	透明釉	19c後	瀬戸美濃
58	検-1	AⅢ検 検出面	Ⅲ検-080	陶器	双耳壺	口径(9.8)	器高(9.8)	口1/4	乳白	志野・口縁コナデ・胴部・内面ロクロナデのち整形	鉄釉	17c	信楽か
59	検-18	AⅢ検 検出面	Ⅲ検-075	陶器	向付	口径(6.9)	器高(6.9)	口1/4	淡緑黄	口縁内外如意頭文口縁コナデ・体部ロクロナデ	長石・鉄釉	16c末～17c初	瀬戸美濃
60	124	AⅢ検 検出面	Ⅲ検-082	磁器	蓋	口径(5.5)	器高(5.5)	底3/8	淡緑灰	外面回転ヘラケズリ・ロクロナデ・端部コナデ・内面ロクロナデ	鉄釉	19c	肥前
61	検-14	AⅢ検 検出面	Ⅲ検-080	陶器	蓋	口径(5.1)	器高(5.1)	口1/4	淡緑黄	外面回転ヘラケズリ・端部コナデ・内面ロクロナデ	灰釉	18c後～19c前	信楽か
62	検-13	AⅢ検 検出面	Ⅲ検-080	陶器	蓋	口径(5.5)	器高(5.5)	口1/4	灰	外面回転ヘラケズリ・ロクロナデ・端部コナデ・内面ロクロナデ	長石・鉄釉	19c	不明
63	検-12	AⅢ検 検出面	Ⅲ検-080	陶器	仏經具	口径(5.1)	器高(5.1)	底3/8	淡緑灰	内面ロクロナデ・胴部ロクロナデ・回転ヘラケズリ・端部コナデ・底部回転ヘラケズリ	灰釉		
64	トレ-1	AⅢ検 T南	Ⅲ検-071	陶器	向付				乳白	外面・内面・底面製打成形・布目圧痕	長石・鉄釉	17c初	瀬戸美濃
65	ソノタ-1	AⅢ検 排土	Ⅲ検-085	陶器	皿	口径(7.0)	器高(7.0)	底3/8	乳白	ケズリダシ高台・トチン痕	鉄釉	17c	瀬戸美濃
66	土17-1	AⅣ検 土17	Ⅳ検-089	土器	皿	口径(9.6)	器高(9.6)	口1/4	暗褐	口縁コナデ・胴部・内面ロクロナデ・黒菱	鉄釉		在地産
67	土1-1	AⅣ検 土1	Ⅳ検-086	陶器	鉢	口径(15.4)	器高(15.4)	底1/4	乳白	見込部田花文・トチン痕あり・ケズリダシ高台露胎	灰釉	17c前	瀬戸美濃
68	検-17	AⅣ検 検出面	Ⅳ検-094	陶器	天目茶碗	口径(11.4)	器高(11.4)	口1/12	乳白	口縁コナデ・胴部・内面ロクロナデ	鉄釉	16c末～17c初	瀬戸美濃
69	検-16	AⅣ検 検出面	Ⅳ検-094	陶器	皿	口径(10.0)	器高(10.0)	口1/8底1/4	乳白	志野・口縁コナデ・胴上部ロクロナデ・下部回転ヘラケズリ・内面ロクロナデ・ケズリダシ高台露胎・底部回転ヘラケズリ	長石釉	16c末～17c初	瀬戸美濃
70	検-20	AⅣ検 検出面	Ⅳ検-092	陶器	皿	口径(14.0)	器高(14.0)	口1/3底1/2	乳白	見込み輪軸輪轆ぎ・体部回転ヘラケズリ・ケズリダシ高台	灰釉	16c末～17c初	瀬戸美濃
71	検-19	AⅣ検 検出面	Ⅳ検-094	陶器	鉢	口径(13.2)	器高(13.2)	底1/6	乳白	胴上部ロクロナデ・下部回転ヘラケズリ・内面ロクロナデ	灰釉	16c末～17c初	瀬戸美濃
72	検-21	AⅣ検 検出面	Ⅳ検-093	陶器	皿	口径(13.0)	器高(13.0)	口1/10	乳白	口縁コナデ・胴部回転ヘラケズリ・内面ロクロナデ	灰釉	16c末～17c初	瀬戸美濃
73	検-18	AⅣ検 検出面	Ⅳ検-094	陶器	皿	口径(13.8)	器高(13.8)	口1/12	乳白	口縁コナデ・胴部・内面ロクロナデ・貫入	長石釉	16c末～17c初	瀬戸美濃
74	検-14	AⅣ検 検出面	Ⅳ検-094	土器	皿	口径(6.0)	器高(6.0)	底1/2	暗褐	胴部ロクロナデ・内面ナデ・底部回転糸切			在地産
75	検-15	AⅣ検 検出面	Ⅳ検-095	土器	皿	口径(7.0)	器高(7.0)	底1/3	暗褐	胴部ロクロナデ・内面ナデ・付着物・底部回転糸切			在地産
76	検-5	AⅣ検 検出面	Ⅳ検-095	土器	皿	口径(9.2)	器高(9.2)	口1/2底1/3	黒褐	口縁コナデ・胴部・内面ロクロナデ・底部回転糸切・銅付着			在地産
77	検-2	AⅣ検 検出面	Ⅳ検-093	土器	皿	口径(8.8)	器高(8.8)	口1/6底1/4	暗褐	口縁コナデ・胴部・内面ロクロナデ・底部回転糸切・銅付着			在地産
78	検-11	AⅣ検 検出面	Ⅳ検-094	土器	皿	口径(8.8)	器高(8.8)	口1/4	暗灰	口縁コナデ・胴部・内面ロクロナデ・銅付着			在地産
79	検-8	AⅣ検 検出面	Ⅳ検-094	土器	皿	口径(10.0)	器高(10.0)	口1/8	暗灰	口縁コナデ・胴部ロクロナデ・内面ロクロナデ・斜ハケ状ナデ痕			在地産

No.	実測番号	出土地点	注記	種別	器形	法	量 (cm)		残存度	胎土	技法・文様・形態の特徴	釉調	推定年代	推定産地
							口径	底径						
80	検-7	AⅤ検 検出面	Ⅳ検-094	土器	皿	(10.2)		□1/10	黒褐	口縁ヨコナデ、胴部・内面クロコナデ、銅澤付着			在地産	
81	検-6	AⅤ検 検出面	Ⅳ検-094	土器	皿	(8.8)	3.6	□1/8底一部	黒褐	口縁ヨコナデ、胴部・内面クロコナデ、底部回転糸切、銅澤付着			在地産	
82	検-13	AⅤ検 検出面	Ⅳ検-094	土器	皿	(11.2)	2.4	□1/8	黒灰褐	口縁ヨコナデ、胴部・内面クロコナデ、底部回転糸切			在地産	
83	検-10	AⅤ検 検出面	Ⅳ検-095	土器	皿	(10.6)		□1/4	黒灰褐	口縁ヨコナデ、胴部・内面クロコナデ			在地産	
84	検-12	AⅤ検 検出面	Ⅳ検-094	土器	皿	(9.8)		口縁一部	黒灰	口縁ヨコナデ、ターナル付着、胴部・内面クロコナデ			在地産	
85	検-1	AⅤ検 検出面	Ⅳ検-095	土器	皿	(11.4)		□1/8	淡褐	口縁ヨコナデ、胴部・内面クロコナデ、煤付着			在地産	
86	検-9	AⅤ検 検出面	Ⅳ検-094	土器	皿	(10.6)		□1/10	淡褐	口縁ヨコナデ、胴部・内面クロコナデ、煤付着			在地産	
87	検-4	AⅤ検 検出面	Ⅳ検-094	土器	皿	(9.6)		□1/12	黒褐	口縁ヨコナデ、胴部・内面クロコナデ、煤付着			在地産	
88	検-3	AⅤ検 検出面	Ⅳ検-095	土器	皿	(12.2)		□1/9	暗橙褐	口縁ヨコナデ、外面口縁下部より底部まで回転ヘラケズリ、高台置付以外全面施釉、口縁端部内面回転ヘラケズリで軸剥ぎ			在地産	
89	トレ-1	AⅤ検 T南	Ⅳ検-091	陶器	皿	18.6	7.2	□2/3底完	淡黄白	内面回転ヘラケズリで軸剥ぎ	灰釉	17c前	肥前	
90	土4-1	AⅤ検 土4	V検-097	土器	皿	(10.4)		□1/3	黒褐	口縁ヨコナデ、胴部・内面クロコナデ			在地産	
91	土4-2	AⅤ検 土4	V検-097	土器	皿	(26.0)		□1/8	暗褐	口縁ヨコナデ1条の強いヨコナデ、内面クロコナデ			在地産	
92	溝-21	AⅤ検 溝2	V検-102	陶器	繻鉢			□1/6	乳白	口縁ヨコナデ、胴部回転ヘラケズリ、内面クロコナデ・顔目	錆釉	16c後	瀬戸美濃	
93	検-2	AⅤ検 検出面	V検-105	陶器	皿	(10.0)	(5.7)	□1/6底完	乳白	口縁ヨコナデ、体部回転ヘラケズリ、内面クロコナデ、ケズリダシ高台、底部回転ヘラケズリ・トチン痕	灰釉	16c後	瀬戸美濃	
94	検-4	AⅤ検 検出面	V検-106	陶器	皿	(9.2)	(4.6)	□1/4底1/2	乳白	口縁ヨコナデ、胴部・内面クロコナデ、底部回転糸切	灰釉	16c後	瀬戸美濃	
95	検-3	AⅤ検 検出面	V検-105	土器	皿	(10.6)	(4.6)	□1/8底一部	暗褐	口縁ヨコナデ、胴部・内面クロコナデ、底部回転糸切	灰釉	16c後	在地産	
96	検-1	AⅤ検 検出面	V検-106	陶器	瓶		2.7	底部一部	乳白	志野、胴部回転ヘラケズリ、内面クロコナデ、ケズリダシ高台、底部回転ヘラケズリ	長石釉	16c後	瀬戸美濃	
97	土31-1	AⅤ検 土31	Ⅵ検-113	陶器	丸皿	(10.0)	(5.5)	□1/5底1/6	乳白	体部下半ヘラケズリ、ケズリダシ高台、見込中心部露胎	灰釉	16c後	瀬戸美濃	
98	128	BⅠ検 建1	I検-005	磁器	碗		(3.3)		白	コバルト点線、高台外二重圏線、ケズリダシ高台	染付	16c後	瀬戸美濃	
99	127	BⅠ検 建1	I検-005	磁器	皿		(9.5)		白	内面見込み秋竹舞臺文、底部蛇の目高台、高台内二重角枠福福銘	染付	18c後	肥前	
100	126	BⅠ検 建1	I検-005	磁器	蓋	(10.0)			白	捻子花文、口縁内面四方雜文	染付	19c	肥前	
101	130	BⅠ検 土7	I検-004	磁器	小碗	(6.2)	(3.2)	5.0	白	ケズリダシ高台、内面クロコナデ、底部回転ヘラケズリ、外面漢詩文、高台外二重圏線、口縁内面輪繫ぎ文	染付	19c後	瀬戸美濃	
102	土4-1	BⅠ検 土4	I検-003	土器	皿	(7.2)	(4.6)	(1.8)	暗灰褐	口縁ヨコナデ、胴部・内面クロコナデ、底部回転糸切		19c	在地産	
103	131	BⅠ検 検出面	I検-011	磁器	碗	(10.7)		□1/8	白	外面草花文、口縁内面雷文	染付	19c前	肥前	
104	検-1	BⅠ検 検出面	I検-011	陶器	鉢	(10.8)		高台1/5底1/6	暗灰	ケズリダシ高台、底部回転ヘラケズリ	錆・灰	19c	不明	
105	129	BⅠ検 T南東	I検-009	磁器	碗		(4.1)	高台一部欠底1/4	白	内面見込み部二重圏線	染付	19c	肥前	
106	北T-4	BⅠ検 T北	I検-008	陶器	楕木鉢	(16.8)		□1/8	暗褐	口縁ヨコナデ、胴部・内面クロコナデ	錆・長	19c	産地不明	
107	北T-1	BⅠ検 T北	I検-007	土器	皿	(10.0)	(5.4)	□1/4底1/2	暗褐	口縁ヨコナデ、胴部・内面クロコナデ、底部回転糸切	石釉	19c	在地産	
108	北T-3	BⅠ検 T北	I検-007	土器	皿	(9.8)	(5.6)	□1/5底一部	暗褐	口縁ヨコナデ、胴部・内面クロコナデ、底部回転糸切		19c	在地産	
109	北T-2	BⅠ検 T北	I検-008	土器	皿	(9.2)	(6.0)	□1/6底3/8	暗褐	口縁ヨコナデ、胴部・内面クロコナデ、底部回転糸切		19c	在地産	
110	検-3	BⅡ検 検出面	Ⅱ検-014	磁器	碗	(9.2)		□3/8	淡灰	口縁ヨコナデのちへラ状工具による片彫り、胴部・内面クロコナデ	青磁	18c	波佐見か	
111	検-2	BⅡ検 検出面	Ⅱ検-014	磁器	丸碗				白	内・外1条圏線、漆跡痕あり	染付	18c後	肥前	
112	検-1	BⅡ検 検出面	Ⅱ検-014	陶器	碗		5.4	底完	乳白	ケズリダシ高台、底部回転ヘラケズリ	鉄釉	18c後	瀬戸美濃	
113	建3-1	BⅡ検 建3	Ⅲ検-028	土器	杯		(6.2)	底1/2	暗褐	胴部・内面クロコナデ、底部回転糸切、墨書あり		18c後	在地産	
114	土20-1	BⅢ検 土20	Ⅲ検-025	陶器	皿	(16.0)		□1/8	黄白	口縁ヨコナデ、胴部回転ヘラケズリ、内面クロコナデ	白濁	18c	瀬戸美濃	
115	土8-1	BⅢ検 土8	Ⅲ検-020	陶器	捥鉢		13.6	底3/4	乳白	体部外面回転ヘラケズリ、内面見込目跡5箇所		17c後	瀬戸美濃	
116	土1-1	BⅢ検 土1	Ⅲ検-019	土器	焙烙鍋	(16.0)		□1/12	灰～暗灰	外面下半ケズリ	灰釉	18c前	瀬戸美濃	
117	133	BⅢ検 検出面	Ⅲ検-035	磁器	碗	(6.85)			白	コバルト点線、外面に漢詩文	染付	17c	在地産か	
118	136	BⅢ検 検出面	Ⅲ検-035	磁器	碗		(4.7)	高台1/4底一部残	白	胴部回転ヘラケズリ、内面クロコナデ、ケズリダシ高台	染付	19c後	瀬戸美濃	
119	検-8	BⅢ検 検出面	Ⅲ検-039	陶器	小碗	(6.8)		□1/5	淡緑	口縁ヨコナデ、胴上部クロコナデ・下部回転ヘラケズリ、内面クロコナデ	灰釉	17c後	肥前	
120	検-6	BⅢ検 検出面	Ⅲ検-035	陶器	碗	(11.2)		□1/6	淡灰	口縁ヨコナデ、胴部・内面クロコナデ	灰釉	18c前	瀬戸美濃	
121	検-5	BⅢ検 検出面	Ⅲ検-035	陶器	碗	(12.4)		□1/12	乳白	外面上半部2条平行沈線	灰釉	17c後	京焼	
122	134	BⅢ検 検出面	Ⅲ検-035	磁器	皿	(8.3)		高台1/12底1/8	淡灰白	底部ハリ支え痕、朝顔文	鉄釉	17c後	瀬戸美濃	
123	135	BⅢ検 検出面	Ⅲ検-035	磁器	皿	(15.1)	(8.3)	□1/12高台1/8底1/4	白	菊唐草文、高台端部砂目、見込み蛇の目軸剥ぎ	染付	17c後	肥前	

No.	実測番号	出土地点	注記	種別	器形	口径	量 (cm)		残存度	胎土	技法・文様・形態の特徴	釉調	推定年代	推定産地
							口径	底径						
124	検-1	BⅢ検 検出面	Ⅲ検-040	土器 Ⅲ	Ⅲ	9.4	5.6	2.3	暗褐	口縁ヨコナデ、胴部・内面ロクロナデ、回転糸切、煤付着	灰釉	19c	在地産	
125	検-3	BⅢ検 検出面	Ⅲ検-035	陶器 鉢	鉢	15.4			乳白	口縁ヨコナデ、胴部・内面ロクロナデ	灰釉	19c	瀬戸美濃	
126	検-10	BⅢ検 検出面	Ⅲ検-041	陶器 蓋	蓋	9.3			灰	外面ロクロナデ、鍍金型紙酒絵、内面回転糸切、露胎	灰釉	17c後	瀬戸美濃	
127	検-11	BⅢ検 検出面	Ⅲ検-035	陶器 火入	火入	11.2	11.4	9.1	淡黄	胴部・内面ロクロナデ、ケズリダシ高台、底部回転糸切、見込み輪トチン痕、口縁敲打痕あり(軸刺落)、内面煤付着、半筒形	白濁	19c	瀬戸美濃	
128	158	BⅣ検 礎石	Ⅳ検-058	磁器 Ⅲ	Ⅲ				白	卓花文	染付	17c前	肥前	
129	土5-1	BⅣ検 土5	Ⅳ検-052	陶器 蓋?	蓋?	3.0		1.2	暗褐	上面糸切痕	鉄釉	不明	産地不明	
130	144	BⅣ検 検出面	Ⅳ検-069	磁器 碗	碗				白	ケズリダシ高台	染付	18c	肥前	
131	検-19	BⅣ検 検出面	Ⅳ検-063	陶器 碗	碗	10.6			灰白	口縁ヨコナデ、胴部・内面ロクロナデ	灰釉	18c	瀬戸美濃	
132	検-23	BⅣ検 検出面	Ⅳ検-062	陶器 碗	碗	3.2			灰緑	胴部回転糸切、内面ロクロナデ、ケズリダシ高台露胎、底部回転糸切、露胎	灰釉	17c後	京・信楽	
133	検-29	BⅣ検 検出面	Ⅳ検-070	陶器 碗	碗				灰	口縁内外具須、口縁ヨコナデ、胴部・内面ロクロナデ	灰釉	17c後	不明	
134	検-34	BⅣ検 検出面	Ⅳ検-071	磁器 Ⅲ	Ⅲ				乳白	底部高台内露胎	染付	16c末	漳州窯	
135	143	BⅣ検 検出面	Ⅳ検-066	磁器 Ⅲ	Ⅲ				淡灰白	左馬文	染付	17c後半	肥前	
136	検-33	BⅣ検 検出面	Ⅳ検-075	陶器 Ⅲ	Ⅲ	13.6	7.5		乳白	口縁ヨコナデ、胴部・内面ロクロナデ、ケズリダシ高台露胎、底部回転糸切、露胎	長石釉	16c末	瀬戸美濃	
137	検-6	BⅣ検 検出面	Ⅳ検-156	陶器 菊皿	菊皿	13.4			黄灰白	口縁ヨコナデ、体部下回転糸切、ケズリダシ高台	長石釉	16c末	瀬戸美濃	
138	検-20	BⅣ検 検出面	Ⅳ検-067	陶器 菊皿	菊皿	12.6		(2.8)	乳白	口縁ヨコナデのちヘラケズリ、胴部ロクロナデ、内面丸ミケズリ、底部回転糸切、ヘラケズリ	長石釉	17c初	瀬戸美濃	
139	検-30	BⅣ検 検出面	Ⅳ検-091	陶器 Ⅲ	Ⅲ				乳白	見込み印花文、内面ロクロナデ、底部回転糸切、ペントチン痕	長石釉	16c末	瀬戸美濃	
140	検-24	BⅣ検 検出面	Ⅳ検-068	陶器 丸皿	丸皿	9.6		(2.1)	乳白	下部回転糸切、ケズリダシ高台、ペントチン痕	長石釉	16c末	瀬戸美濃	
141	検-27	BⅣ検 検出面	Ⅳ検-073	陶器 木漏	木漏	2.2	3.0	2.8	乳白	口縁ヨコナデ、注口上部・下部ロクロナデ、注口部ナデ、内面ロクロナデ、底部回転糸切	鉄釉	16c末	瀬戸美濃	
142	検-21	BⅣ検 検出面	Ⅳ検-062	磁器 小瓶	小瓶				灰緑	胴部回転糸切、内面ロクロナデ、ケズリダシ高台・底部に砂目積、底部回転糸切、ヘラケズリ	白磁釉	18c	肥前	
143	検-4	BⅣ検 検出面	Ⅳ検-076	土器 Ⅲ	Ⅲ	10.2	6.6	2.6	暗褐～黒	口縁ヨコナデ、胴部・内面ロクロナデ、底部回転糸切		16c末	在地産	
144	検-7	BⅣ検 検出面	Ⅳ検-066	土器 Ⅲ	Ⅲ	10.8	6.2	(2.8)	暗褐	口縁ヨコナデ、胴部・内面ロクロナデ、底部回転糸切		16c末	在地産	
145	検-5	BⅣ検 検出面	Ⅳ検-074	土器 Ⅲ	Ⅲ	10.6	6.2	(3.0)	暗褐	口縁ヨコナデ、胴部・内面ロクロナデ、底部回転糸切		16c末	在地産	
146	検-11	BⅣ検 検出面	Ⅳ検-066	土器 Ⅲ	Ⅲ	8.8			暗褐	口縁ヨコナデ、胴部・内面ロクロナデ		16c末	在地産	
147	検-6	BⅣ検 検出面	Ⅳ検-066	土器 Ⅲ	Ⅲ	10.4	6.2	(3.2)	暗褐～黒	口縁ヨコナデ、胴部・内面ロクロナデ、底部回転糸切		16c末	在地産	
148	検-5	BⅤ検 検出面	V検-110	陶器 向付	向付	13.2			乳白	口縁ヨコナデ、胴部・内面ロクロナデ	長石釉	16c末	瀬戸美濃	
149	検-3	BⅤ検 検出面	V検-113	陶器 端反皿	端反皿	11.1	6.0	2.6	乳白	口縁ヨコナデ、胴部回転糸切、内面ロクロナデ、ケズリダシ高台、底部回転糸切、ヘラケズリ、見込みトチン痕	長石釉	16c末	瀬戸美濃	
150	トレンチ-1	BⅤ検 T3	V検-098	陶器 向付	向付	14.0			乳白	口縁ヨコナデ、胴部・内面ロクロナデ、下部回転糸切、内面ロクロナデ	長石釉	16c末	瀬戸美濃	
151	土-2	BⅥ検 土7	Ⅵ検-124	陶器 Ⅲ	Ⅲ	9.8	4.45	2.4	淡黄灰～	口縁ヨコナデ、胴部回転糸切、内面ロクロナデ、ケズリダシ高台、底部回転糸切、ヘラケズリ	灰釉	16c後	瀬戸美濃	
152	土-1	BⅥ検 土10	Ⅵ検-128	陶器 Ⅲ	Ⅲ	9.6	3.2	2.3	淡緑灰	口縁ヨコナデ、胴部回転糸切、内面ロクロナデ、ケズリダシ高台、底部回転糸切、ヘラケズリ	灰釉	16c後	瀬戸美濃	
153	土-6	BⅥ検 土7	Ⅵ検-124	土器 火鉢	火鉢				暗灰褐～	口縁ヨコナデ、胴部ナデのち液状突帯部出付、上部刺突		不明	不明	
154	検-4	BⅥ検 検出面	Ⅵ検-137	陶器 茶入	茶入	3.4			黒褐	胴部・内面ロクロナデ、底部回転糸切、半子形 被熱	鉄釉	16c末	瀬戸美濃	
155	検-2	BⅥ検 検出面	Ⅵ検-148	陶器 丸皿	丸皿	14.7	8.1	3.3	乳白	口縁ヨコナデ、胴部・内面ロクロナデ、下部回転糸切、ケズリダシ高台、内面ロクロナデ、鉄	長石釉	16c末	瀬戸美濃	
156	検-5	BⅥ検 検出面	Ⅵ検-138	陶器 Ⅲ	Ⅲ	6.4			乳白	見込み部印花文、底部回転糸切、ヘラケズリ	灰釉	16c末	瀬戸美濃	
157	検-1	BⅥ検 検出面	Ⅵ検-151	陶器 Ⅲ	Ⅲ	6.8			乳白	底部回転糸切、見込部鉄線	長石釉	16c末	瀬戸美濃	
158	検-9	BⅥ検 検出面	Ⅵ検-150	土器 Ⅲ	Ⅲ	10.7	7.3		暗褐	口縁ヨコナデ、胴部・内面ロクロナデ、回転糸切	長石釉	16c末	在地産	
159	検-8	BⅥ検 検出面	Ⅵ検-162	土器 Ⅲ	Ⅲ	10.1	5.0	2.7	灰褐～黒	口縁ヨコナデ、胴部・内面ロクロナデ、回転糸切、内面煤付着		16c末	瀬戸美濃	

図No. 実測番号	出土地点	注記	種別	器形	法		量 (cm)		残存度	胎土	技法・文様・形態の特徴	釉調	推定年代	推定産地
					口径	底径	口径	底径						
160 検-11	BⅤⅢ 検出面	Ⅴ検-136	土器	皿	10.8	5.8	3.5	□5/6底完	暗褐～暗	口縁ヨコナデ、胴部・内面ロクロナデ、回転糸切		16c末	瀬戸美濃	
161 検-10	BⅤⅢ 検出面	Ⅴ検-161	土器	皿	10.1	6.8	□1/2底1/2	暗褐	口縁ヨコナデ、胴部・内面ロクロナデ、回転糸切	口縁ヨコナデ、胴部・内面ロクロナデ、下部回転ヘラケズリ、内面ロクロナデ、鉄絵、被熱により鉄絵不鮮明		16c末	瀬戸美濃	
162 検-3	BⅤⅢ 検出面	Ⅴ検-177	陶器	丸碗	(11.5)		□1/8	乳白			長石釉	16c末	瀬戸美濃	
163 検-1	BⅤⅢ 検出面	Ⅴ検-175	陶器	天目茶碗	(4.9)		底完	乳白	胴部回転ヘラケズリ、内面ロクロナデ、ケズリダシ高台、底部回転ヘラケズリ、見込蛇の目粗ふき取り		長石釉	17c	瀬戸美濃	
164 検-4	BⅤⅢ 検出面	Ⅴ検-173	陶器	皿	(16.9)	(8.4)	□1/3底完	淡黄灰	口縁ヨコナデ、胴部・内面ロクロナデ、ケズリダシ高台、底部回転ヘラケズリ、見込蛇の目粗ふき取り		灰釉	16c末	肥前	
165 検-2	BⅤⅢ 検出面	Ⅴ検-174	陶器	丸皿	(13.1)		□1/8	乳白	口縁ヨコナデ、胴部・内面ロクロナデ、鉄絵		長石釉	16c末	瀬戸美濃	
166 検-5	BⅤⅢ 検出面	Ⅴ検-176	土器	皿	(11.4)	(7.0)	□1/7底1/5	淡褐	口縁ヨコナデ、胴部・内面ロクロナデ、内面ロクロナデのちナデ、底部回転糸切、タール付着				在地産	
167 検-1	BⅤⅢ 検出面	Ⅴ検-187	陶器	碗	(10.0)		口縁一部底完	淡灰	口縁ヨコナデ、胴部・内面ロクロナデ、体部中位洗線1条		灰釉	16c末～17c初?	肥前か	
168 土-1	BⅤⅢ 土10	Ⅴ検-202	陶器	碗	(4.4)		底完	淡灰	胴部回転ヘラケズリ、内面ロクロナデ、ケズリダシ高台、被熱により変質		灰釉か	不明	不明	
169 土-2	BⅤⅢ 土10	Ⅴ検-203	土器	内耳鍋	(22.0)		底1/8	黒	胴部・内面・底部ナデ			16c末～18c	在地産	
170 大1-1	BⅤⅢ 土10	Ⅴ検-220	陶器	段重	(12.8)		□1/6	白	色絵(赤・青・黄・黒)・軍配文		色絵	18c	肥前	
171 大1-1	BⅤⅢ 土10	Ⅴ検-220	陶器	向付	(9.4)		□1/8	乳白	口縁ヨコナデ、胴部・内面ロクロナデ、色絵(赤・緑・褐)、輪花状成形、被熱		灰釉	18c	京焼	
172 大1-3	BⅤⅢ 土10	Ⅴ検-225	陶器	灯明皿	(9.4)		□1/8	乳白	口縁ヨコナデ、胴部・内面ロクロナデ、トチン裏		鉄釉	17c	瀬戸美濃	
173 170	BⅤⅢ 土10	Ⅴ検-222	磁器	鉢	(13.1)		高台1/12底1/16	淡灰白	コバルト呉須		染付	19c後	瀬戸美濃	
174 大1-1	BⅤⅢ 土10	Ⅴ検-226	陶器	皿	(6.9)		底1/2	暗茶褐	胴上部ロクロナデ、下部回転ヘラケズリ、内面ロクロナデ、ケズリダシ高台、底部回転ヘラケズリ、鉄絵(総唐津)		灰釉	16c末～17c初	肥前	
175 171	BⅤⅢ 土10	Ⅴ検-227	磁器	段重	(9.1)		高台1/3底1/4	白	底面二重圏線		染付	19c	肥前	
176 大1-2	BⅤⅢ 土10	Ⅴ検-224	磁器	鉢	(13.6)	(9.3)	□1/6	淡青白	口縁ヨコナデ、胴部・内面ロクロナデ、ケズリダシ高台、底部回転ヘラケズリ、斜格子文		染付	19c	肥前	
177 大1-5	BⅤⅢ 土10	Ⅴ検-222	陶器	鉢	(21.1)		□1/8	茶褐	口縁ヨコナデ、胴部・内面ロクロナデ		鉄釉	不明	不明	
178 大1-4	BⅤⅢ 土10	Ⅴ検-223	陶器	壺?	(9.8)		底1/8	淡黄灰	胴上部ロクロナデ、下部ヘラケズリ、内面ロクロナデのち指ナデ?、底部ヘラケズリ		灰釉	不明	不明	
179 132	BⅤⅢ 土10	Ⅴ検-031	磁器	碗	3.7		底1/2	淡灰白	コバルト呉須、高台外面一重圏線、内外面粗い貫入、ケズリダシ高台		染付	19c後	瀬戸美濃	
180 土24-1	BⅤⅢ 土10	Ⅴ検-026	陶器	碗	(12.8)		□1/5	灰	胴部ロクロナデのち押瓦		鉄釉	18c後	瀬戸美濃	
181 検-4	BⅤⅢ 土10	Ⅴ検-045	陶器	丸碗	(11.4)		□1/6	暗茶褐	外面上半部2条平行洗線		鉄釉	17c後	瀬戸美濃	
182 検-7	BⅤⅢ 土10	Ⅴ検-047	陶器	皿	(10.0)		□1/6	暗灰緑	体部ロクロナデ・外面下半ヘラケズリ、トチン痕あり		灰・長石釉	17c後	瀬戸美濃	
183 141	BⅤⅢ 土10	Ⅴ検-047	磁器	輪花皿	(10.2)	6.1	□1/2底1/2	白	口紅、家屋山水文		染付	18c後	肥前	
184 142	BⅤⅢ 土10	Ⅴ検-047	磁器	皿	(13.6)	7.8	底1/3	淡灰白	コバルト呉須、靴の目高台、外面唐草文、内面窓絵・梅と竹文		染付	19c後	瀬戸美濃	
185 138	BⅤⅢ 土10	Ⅴ検-045	磁器	皿	(6.8)		高台1/4底一部	淡灰白	一重網目文、外面体部下半砂付着		染付	17c後	肥前	
186 140	BⅤⅢ 土10	Ⅴ検-045	磁器	皿	(12.3)	(6.5)	□1/6高台1/6	白	コバルト呉須		染付	19c後	瀬戸美濃	
187 検-9	BⅤⅢ 土10	Ⅴ検-045	陶器	壺	(6.8)		□1/5	暗緑褐	口縁ヨコナデ、胴部ロクロナデ、内面返り状蓋受ヨコナデ・下部ロクロナデ		染付	19c後	瀬戸美濃	
188 検-11	BⅤⅢ 土10	Ⅴ検-033	磁器	不明	(7.6)		□1/3	白色	コバルト呉須染付		灰・鉄釉	信楽?	信楽?	
189 検-2	BⅤⅢ 土10	Ⅴ検-043	土器	皿	8.2	5.8	□・底一部一部欠	暗褐	口縁ヨコナデ、胴部・内面ロクロナデ、回転糸切		染付	19c後	瀬戸美濃	
190 137	BⅤⅢ 土10	Ⅴ検-045	磁器	蓋	(8.4)		□1/8	白	外面輪宝繋ぎ文		染付	18c後	肥前	
191 139	BⅤⅢ 土10	Ⅴ検-045	磁器	散蓮華	幅1.4			白	内面彫刻宝珠文		染付	19c中	瀬戸美濃	
192 検-12	BⅤⅢ 土10	Ⅴ検-033	磁器	戸車				白	穿孔部と接地面のみ施釉		透明釉	19c	肥前	
193 139	BⅤⅢ 土10	Ⅴ検-056	磁器	碗	(3.9)		高台3/16底1/2	白	コバルト呉須		染付	19c後	瀬戸美濃	
194 154	BⅤⅢ 土10	Ⅴ検-089	磁器	碗	3.2		高台一部欠底完	白	コバルト呉須、高台内一重角棒変形字銘		染付	19c後	瀬戸美濃	
195 153	BⅤⅢ 土10	Ⅴ検-088	磁器	碗	(4.7)		高台1/8底1/4	白	麦藁手		染付	19c後	瀬戸美濃	
196 151	BⅤⅢ 土10	Ⅴ検-085	磁器	碗			高台欠底完	淡灰白	コバルト呉須		染付	19c後	瀬戸美濃	

図No.	実測番号	出土地点	注記	種別	器形	法量 (cm)		残存度	胎土	技法・文様・形態の特徴		釉調	推定年代	推定産地
						口径	器高							
197	BIV 検	検出面	IV 検-089	磁器	碗			底1/4 高台3/16底部一部	白	高台内二重圓線	染付	18c	肥前	
198	BIV 検	検出面	IV 検-089	磁器	碗	(3.7)			白	コバルト呉須	染付	19c後 17c後~ 18c前	瀬戸美濃	
199	BIV 検	検出面	IV 検-085	磁器	丸碗	(10.2)		口1/6 高台欠底1/2	白	草花文	染付	17c後~ 18c前	肥前	
200	BIV 検	検出面	IV 検-082	磁器	碗	(9.8)		口1/8 高台欠底1/2	灰	山水文	染付	17c後~ 18c前	肥前	
201	BIV 検	検出面	IV 検-088	磁器	碗	(4.0)		高台3/8底1/2 底完	白	コバルト呉須	染付	19c後	瀬戸美濃	
202	BIV 検	検出面	IV 検-089	陶器	丸碗	3.4		口縁一部高台 1/2底1/3	乳白	胴部回転ヘラケズリ、内面ロクロナデ、ケズリダシ高台露胎、底部回転ヘラケズリ露胎	灰釉	18c	瀬戸美濃	
203	BIV 検	検出面	IV 検-085	陶器	碗	(3.4)	(5.6)	口1/2底1/3	乳白	胎	透明釉	18c後	信楽	
204	BIV 検	検出面	IV 検-082	磁器	角皿				淡青白	型つくり成形、内面陽刻草花文	白磁釉	19c後	瀬戸美濃	
205	BIV 検	検出面	IV 検-081	磁器	輪花皿	(9.8)	(1.9)	口1/4高台1/3 底部一部	白	外面唐草文、内面蓮文	染付	17c後	肥前	
206	BIV 検	検出面	IV 検-086	陶器	皿	(16.4)	(2.4)	口1/8高台1/5 底部一部	暗茶褐	口縁内側折り返し、底部回転ヘラケズリ、内面白泥文	錆釉 鉄・灰	不明	備前か	
207	BIV 検	検出面	IV 検-077	陶器	皿	(8.2)		高台1/3底部一部	淡緑	体部ロクロナデ、ケズリダシ高台、底部回転ヘラケズリ、鉄釉灰釉掛け分け	鉄・灰	18c	瀬戸美濃	
208	BIV 検	検出面	IV 検-082	陶器	灯明皿	(10.4)	(1.8)	口1/6底1/8	茶	口縁ヨコナデ、胴部回転ヘラケズリ、内面ロクロナデ、底部回転ヘラケズリ	錆釉		瀬戸美濃	
209	BIV 検	検出面	IV 検-082	陶器	皿	(9.6)		口1/5	灰緑	口縁ヨコナデ、胴部回転ヘラケズリ、内面ヨコナデ、ロクロナデ	鉄・灰		瀬戸美濃	
210	BIV 検	検出面	IV 検-088	土器	皿	(8.4)	(1.4)	口1/12底1/4	暗灰褐	口縁ヨコナデ、胴部・内面ロクロナデ、底部回転糸切	錆釉		在地産	
211	BIV 検	検出面	IV 検-086	土器	皿	(8.6)	(2.6)	口1/3底1/2	暗褐	口縁ヨコナデ、胴部・内面ロクロナデ、底部回転糸切	鉄・灰		在地産	
212	BIV 検	検出面	IV 検-082	土器	皿	(9.0)	(2.2)	口5/12底1/4	暗褐	口縁ヨコナデ、胴部・内面ロクロナデ、底部回転糸切、タール付着			在地産	
213	BIV 検	検出面	IV 検-089	土器	皿	9.5	2.1	口1/6底3/4 高台1/6底部一部	暗褐	口縁ヨコナデ、胴部・内面ロクロナデ、底部回転糸切			在地産	
214	BIV 検	検出面	IV 検-089	磁器	鉢	(10.0)			淡灰白	蛇の目高台、外面唐草文、内面松竹梅繫ぎ文、被熱	染付	18c後~ 19c前	肥前	
215	BIV 検	検出面	IV 検-085	磁器	鉢	(10.2)		底1/10	青白	下部回転ヘラケズリ、蛇の目高台、唐草文	染付	18c後~ 19c前	肥前	
216	BIV 検	検出面	IV 検-088	陶器	擂鉢	(33.2)		口1/8	茶	口縁ヨコナデ、胴上部ロクロナデ、下部回転ヘラケズリ、内面ロクロナデのうち欄目	鉄釉	18c	瀬戸美濃	
217	BIV 検	検出面	IV 検-078	陶器	擂鉢	(34.0)		口1/5	茶	口縁ヨコナデ、胴上部ロクロナデ、下部回転ヘラケズリ、内面ロクロナデのうち欄目	鉄釉	18c	瀬戸美濃	
218	BIV 検	検出面	IV 検-089	陶器	擂鉢	(20.4)		口1/6	茶	口縁ヨコナデ、胴部・内面ロクロナデ、露胎、口縁部のみ施釉	鉄釉	18c	瀬戸美濃	
219	BIV 検	検出面	IV 検-083	陶器	植木鉢	(18.8)		底1/8	緑~暗	胴部ロクロナデのうち龍貼り付文	錆・銅	19c	瀬戸美濃	
220	BIV 検	検出面	IV 検-082	磁器	瓶	(6.6)		底1/2	白	ロクロナデ、底部回転ヘラケズリ	白磁釉	19c	瀬戸美濃	
221	BIV 検	検出面	IV 検-078	陶器	徳利	(9.4)		口1/4	暗茶褐	外面・内面ロクロナデ	鉄釉	不明	産地不明	
222	BIV 検	検出面	IV 検-088	陶器	壺	(20.4)		口1/8	淡褐	口縁ヨコナデ、胴部・内面ロクロナデ、口縁部のみ施釉	鉄釉	不明	信楽か	
223	BIV 検	検出面	IV 検-081	陶器	双耳鍋	(13.0)		口1/10	暗褐色	口縁ヨコナデ、穿孔、胴部・内面ロクロナデ、耳部2箇所	鉄釉	19c	瀬戸美濃	
224	BIV 検	検出面	IV 検-086	土器	焙烙鍋	(9.3)	(2.8)	口3/16	白	口縁内面松葉文	染付	不明	産地不明	
225	BIV 検	検出面	IV 検-082	磁器	壺				白	口縁内面松葉文	染付	19c後	瀬戸美濃	
226	BIV 検	検出面	V 検-110	磁器	碗		4.5	高台1/2底2/3	白	コバルト呉須	染付	19c後	瀬戸美濃	
227	BIV 検	検出面	V 検-109	磁器	丸碗	(7.5)		口1/8	淡灰白	草花文	染付	18c	肥前	
228	BIV 検	検出面	V 検-106	磁器	丸碗	(8.9)	(5.1)	口1/6底1/2 口1/2高台一部 欠3/4底完	白	見込み五弁花文、外面矢羽文	染付	18c中 17c後~ 18c前	肥前	
229	BIV 検	検出面	V 検-110	磁器	丸碗	9.9	5.1		白	草花文	染付	18c前	肥前	
230	BIV 検	検出面	V 検-100	磁器	丸碗	(8.7)	5.5	高台1/6底1/5 底1/3	白	口縁ヨコナデ、胴上部ロクロナデ、下部回転ヘラケズリ、ケズリダシ高台、内面ロクロナデ、底部回転ヘラケズリ	染付	18c中	肥前	
231	BIV 検	検出面	V 検-114	磁器	碗	(4.4)		口1/8	暗灰	胴部・内面ロクロナデ、ケズリダシ高台、畳付露胎・端部に砂目、器形ゆがみあり	染付	17c	肥前	
232	BIV 検	検出面	V 検-104	陶器	碗	(11.0)		口1/8	暗褐	口縁ヨコナデ、胴部・内面ロクロナデ	灰釉	17cか	肥前か	
233	BIV 検	検出面	V 検-111	土器	皿	(8.8)	(5.2)	口1/3底1/3	暗褐	口縁ヨコナデ、胴部・内面ロクロナデ、底部回転糸切			在地産	
234	BIV 検	検出面	V 検-114	土器	皿	(10.1)	(6.5)	口1/8底1/3	淡灰褐	口縁ヨコナデ、胴部・内面ロクロナデ、底部回転糸切			在地産	
235	BIV 検	検出面	V 検-111	陶器	擂鉢	(29.8)		口1/12	暗茶褐	口縁ヨコナデ	錆釉	18cか	瀬戸美濃	

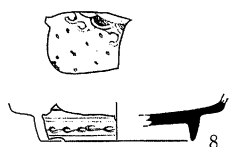
図No. 実測番号	出土地点	注記	種別	器形	法		残存度	胎土	技法・文様・形態の特徴		釉調	推定年代	推定産地
					口径	器高							
236 検-8	B V 検 検出面	V 検-111	陶器 擂鉢	擂鉢	(29.7)	口1/20	暗茶褐～	口縁ヨコナデ	胴部・内面ロクロナデ	口縁部のみ施釉	鉄釉	18cか	瀬戸美濃
237 検-10	B V 検 検出面	V 検-102	陶器 擂鉢	擂鉢	(34.0)	口1/12	淡茶灰	口縁ヨコナデ	胴部・内面ロクロナデ	口縁部のみ施釉	鉄釉	18cか	瀬戸美濃
238 検-12	B V 検 検出面	V 検-105	陶器 擂鉢	擂鉢	(37.5)	口1/3	茶褐	口縁ヨコナデ	胴上部ロクロナデ・下部ヘラケズリ	内面ロクロナデ・薬印、口縁部のみ施釉	鉄釉	18cか	瀬戸美濃
239 土-4	B V 検 土11	VI 検-132	磁器 小杯	小杯	6.2	口3/4底壳	白	口縁ヨコナデ	胴部・内面ロクロナデ	ケズリダシ高台、底部回転ヘラケズリ	白磁釉	19c後	瀬戸美濃
240 167	B VI 検 土11	VI 検-135	磁器 碗	碗	(10.4)	口1/4	白	コハルト呉須			染付	19c後	瀬戸美濃
241 165	B VI 検 土11	VI 検-131	磁器 碗	碗	(5.1)	高台1/3底1/2	淡灰白	コハルト呉須	胴上部ロクロナデ・下部回転ヘラケズリ、ケズリダシ高台、内面ロクロナデ、底部回転ヘラケズリ		染付	19c後	瀬戸美濃
242 土-3	B VI 検 土9	VI 検-127	陶器 皿	皿	(10.6)	口1/8底1/8	暗灰	コハルト呉須	胴上部ロクロナデ・下部回転ヘラケズリ、ケズリダシ高台、内面ロクロナデ、底部回転ヘラケズリ		長石釉	16c末	瀬戸美濃
243 土-5	B VI 検 土9	VI 検-126	土器 皿	皿	(10.2)	口1/3底1/3	暗灰褐	コハルト呉須	胴部・内面ロクロナデ、底部回転糸切り、ターブル付着				在地産
244 166	B VI 検 土11	VI 検-133	磁器 蓋	蓋	8.8	口壳	白	コハルト呉須	内面「成化年製」銘		染付	19c後	瀬戸美濃
245 168	B VI 検 検出面	VI 検-154	磁器 碗	碗	(4.2)	高台2/5底1/4	白	胴上部ロクロナデ・下部回転ヘラケズリ、ケズリダシ高台、内面ロクロナデ、底部回転ヘラケズリ			染付	19c後	瀬戸美濃
246 検-13	B VI 検 検出面	VI 検-128	陶器 鉢か	鉢か	(8.7)	底1/2	淡緑灰～	胴上部ロクロナデ・下部回転ヘラケズリ、ケズリダシ高台、内面ロクロナデ、底部回転ヘラケズリ			灰釉	不明	瀬戸美濃か
247 検-3	B VI 検 検出面	VI 検-139	陶器 向付	向付	(11.5)	口7/16底7/16	乳白	胴上部ロクロナデ・胴上部指ナデ・押圧					
248 検-7	B VI 検 検出面	VI 検-154	土器 皿	皿	(10.0)	口1/8	乳白	志野口縁ヨコナデ	胴上部ロクロナデ、内面ロクロナデ、底部回転ヘラケズリ、見込部鉄絵、ピン		長石釉	16c末	瀬戸美濃
249 検-12	B VI 検 検出面	VI 検-156	陶器 擂鉢	擂鉢	(33.4)	口1/8	茶褐～暗茶褐	口縁ヨコナデ	胴部・内面ロクロナデ			16c末～	在地産
								口縁ヨコナデ	胴部・内面ロクロナデ、被熱		鉄釉	17c初	瀬戸美濃

弥生～古墳時代

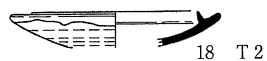
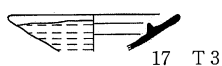
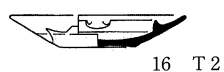
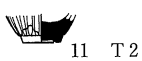
250 VI 検-1	A VI 検 検出面	A VI 検 -118	弥生 土器 高杯	高杯	(4.3)	底部一部	暗褐色	内面・高台調整摩滅、端部・底部ヨコナデ調整摩滅、朱彩					
251 XI 検-1	B VI 検 検出面	XI 検 -217	土器 甕	甕			淡灰褐色	外面・内面ハケメ					

A区

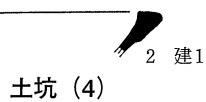
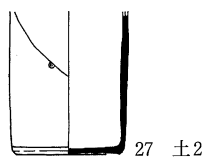
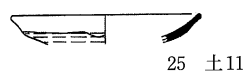
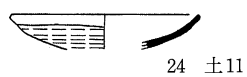
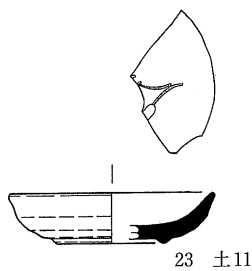
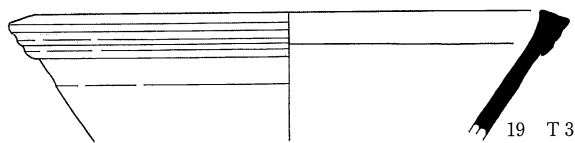
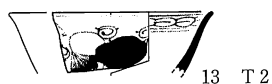
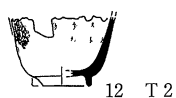
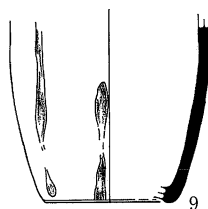
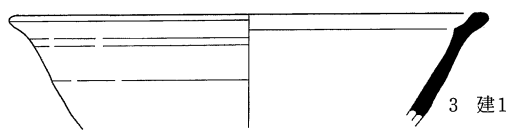
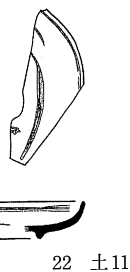
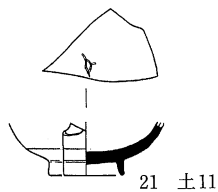
I 検
建 (1~3)



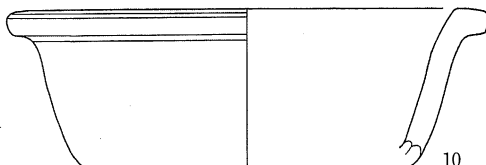
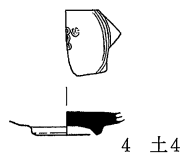
トレンチ (11~20)



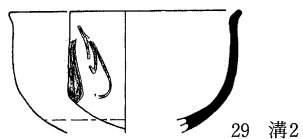
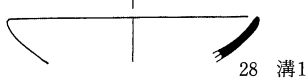
II 検
土坑 (21~27)



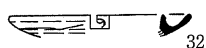
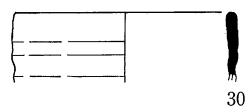
土坑 (4)



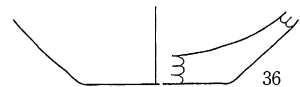
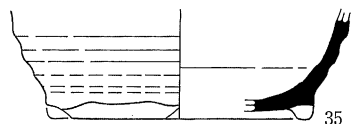
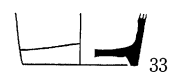
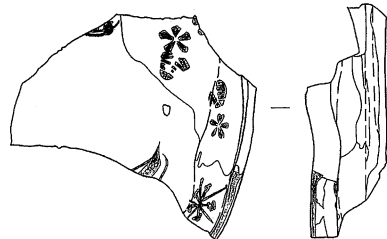
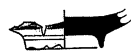
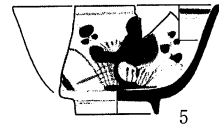
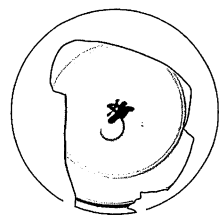
溝 (28・29)



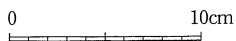
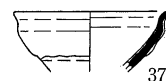
検出面 (30~36)



検出面 (5~10)

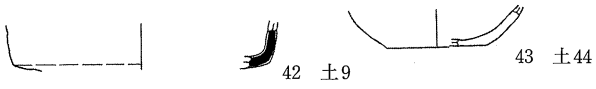
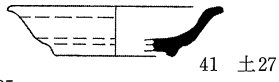
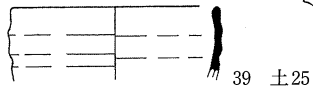
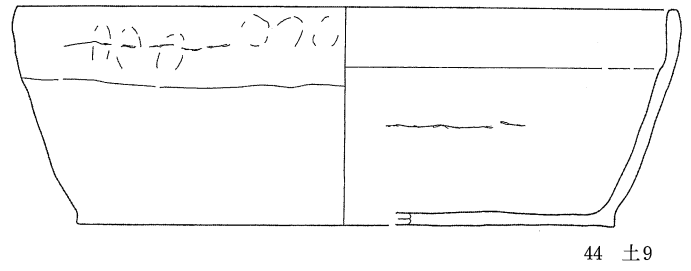
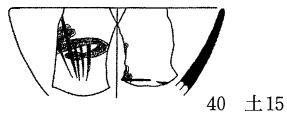
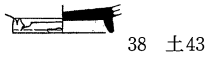


排土 (37)

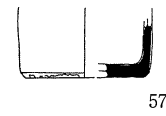
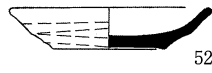
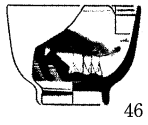
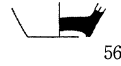
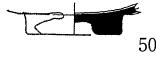
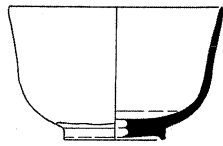
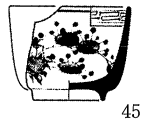


第19図 土器・陶磁器 (1)

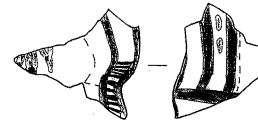
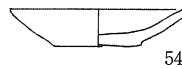
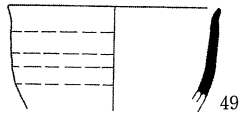
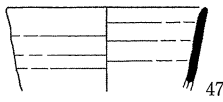
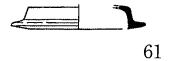
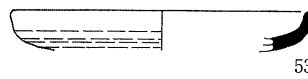
Ⅲ検
土坑 (38~44)



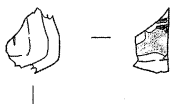
検出面 (45~63)



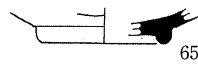
60



トレンチ (64)

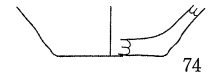
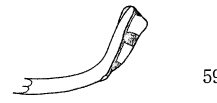
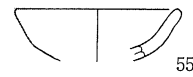
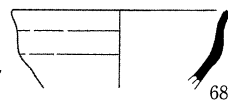
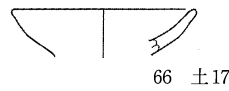


排土 (65)



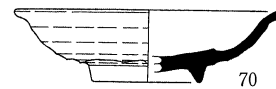
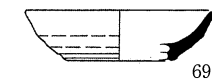
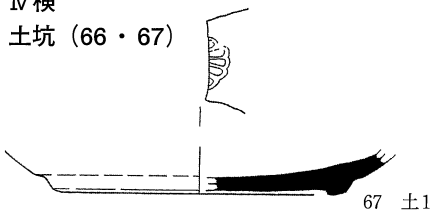
検出面 (68~88)

64 T南

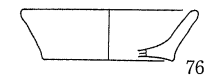
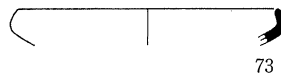
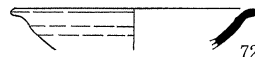
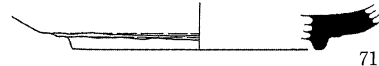


74

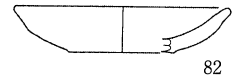
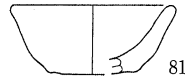
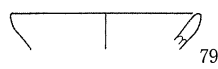
Ⅳ検
土坑 (66・67)



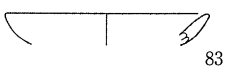
75



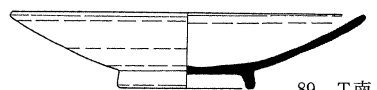
76



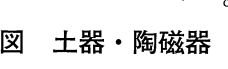
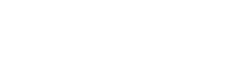
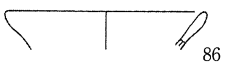
82



トレンチ (89)



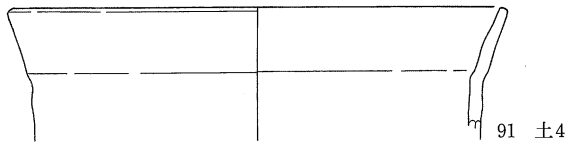
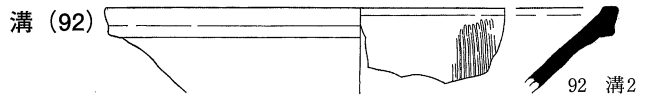
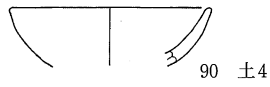
89 T南



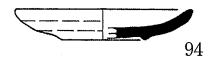
第20図 土器・陶磁器 (2)

0 10cm

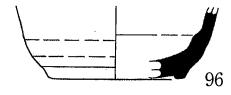
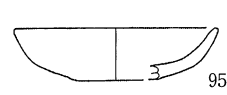
V 検
土坑 (90・91)



検出面 (93~96)



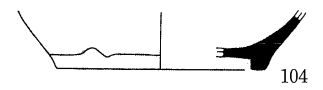
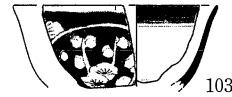
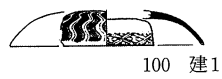
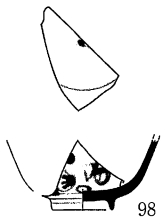
VI 検
土坑 (97)



検出面 (103・104)

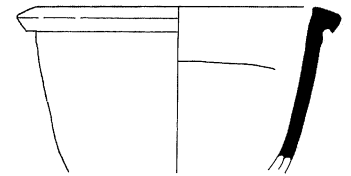
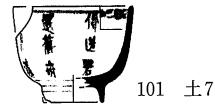
B 区

I 検
建 (98~100)

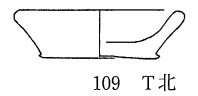
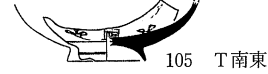
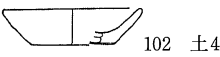
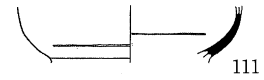
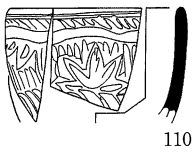


土坑 (101・102)

トレンチ (105~109)

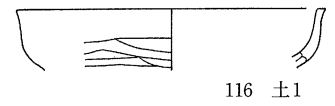
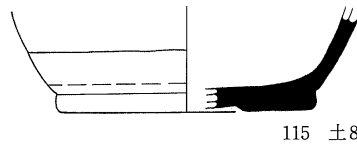
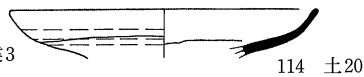
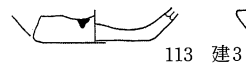


II 検
検出面 (110~112)

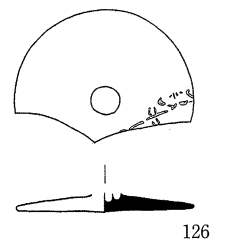
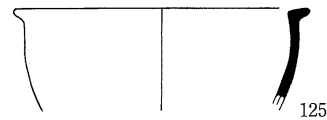
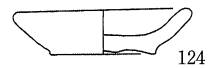
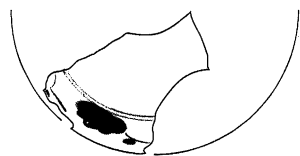
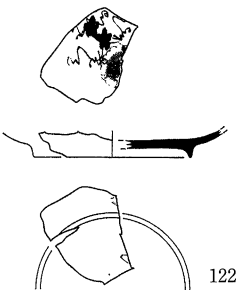
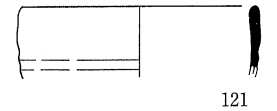
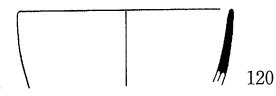
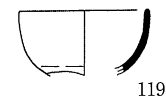
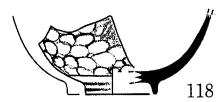
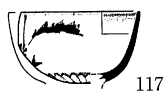


III 検
建 (113)

土坑 (114~116)

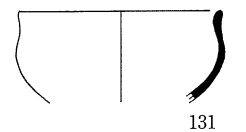
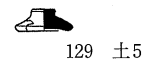
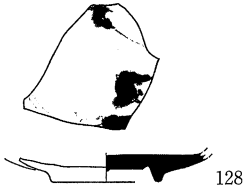
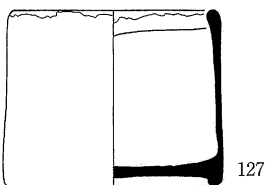


検出面 (117~127)

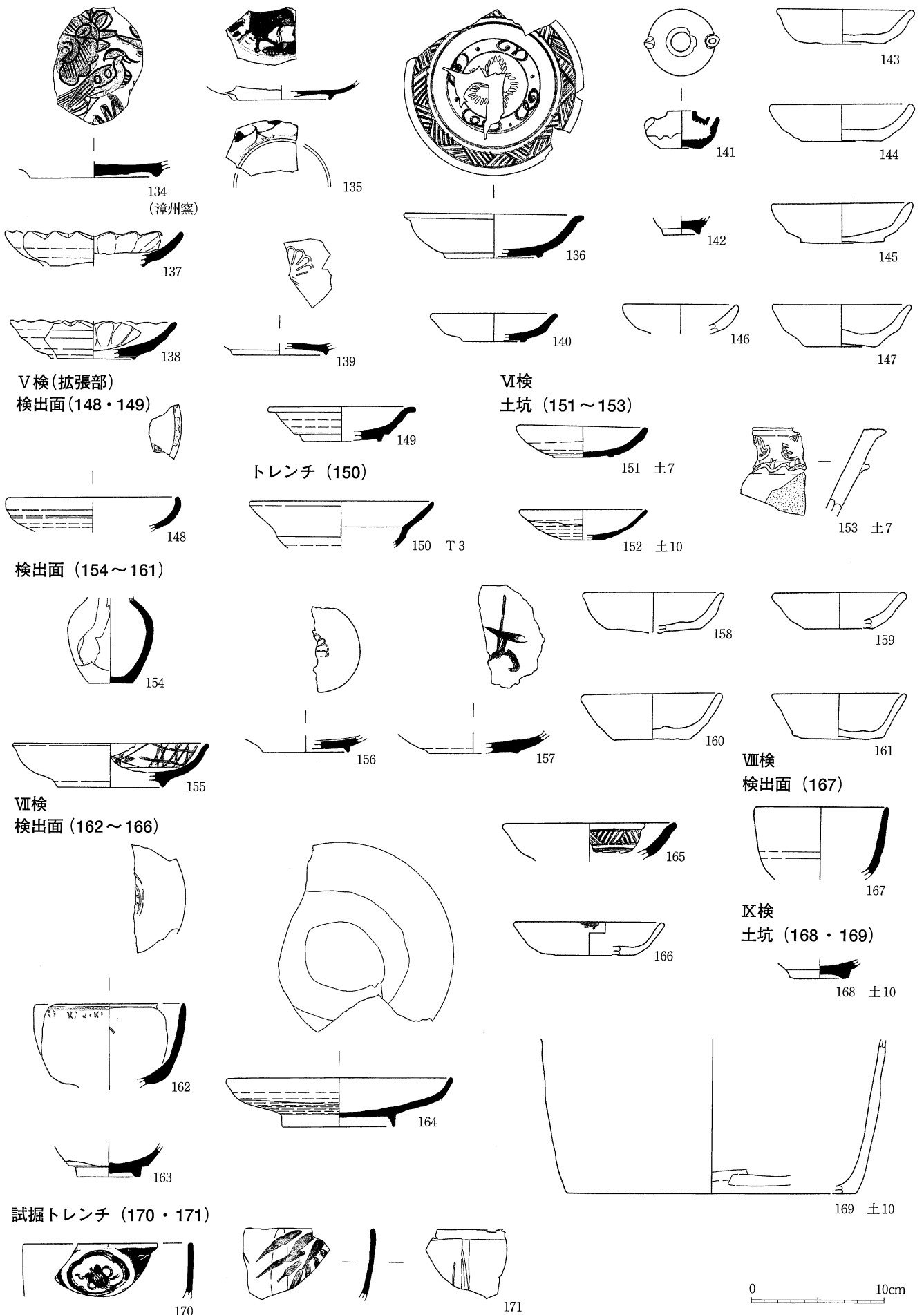


IV 検
礎石 (128)

土坑 (129)

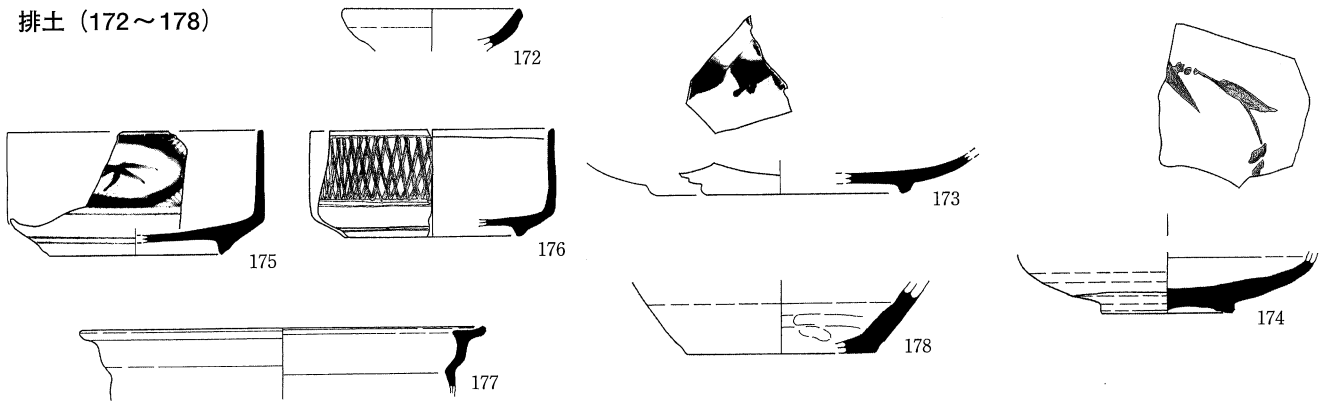


第21図 土器・陶磁器 (3)



第22図 土器・陶磁器 (4)

排土 (172~178)



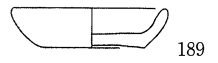
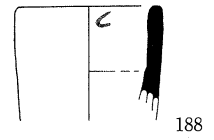
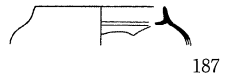
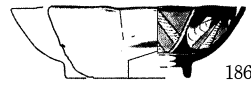
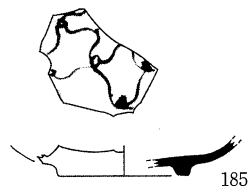
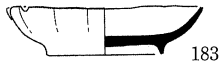
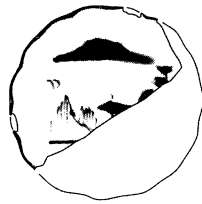
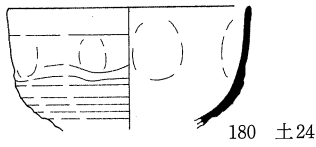
B区 拡張部

Ⅲ検

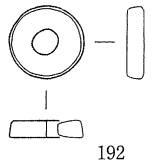
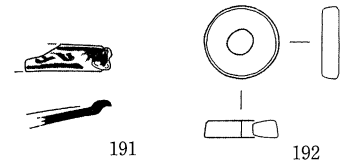
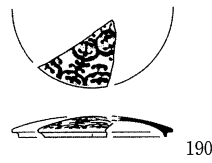
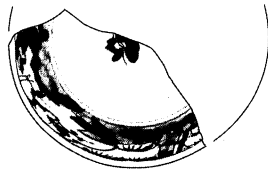
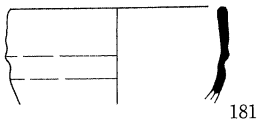
木樋トレンチ (179)



土坑 (180)

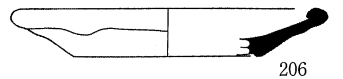
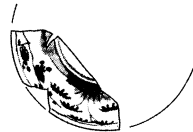
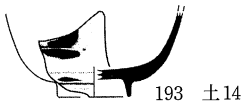
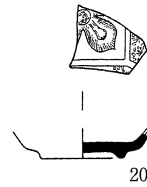
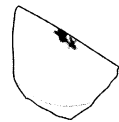


検出面 (181~192)

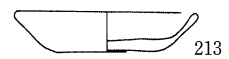
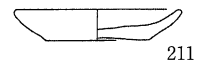
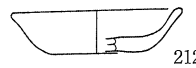
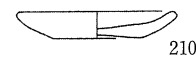
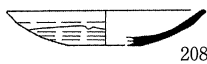
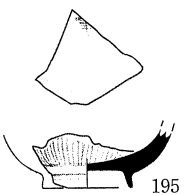
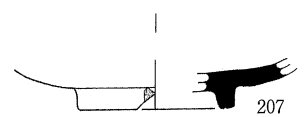
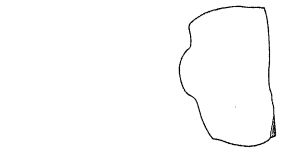
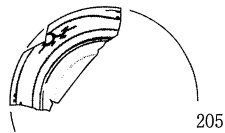
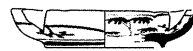
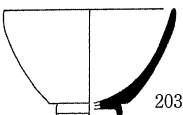
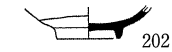


Ⅳ検

土坑 (193)

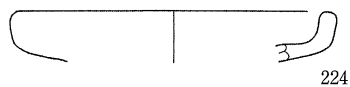
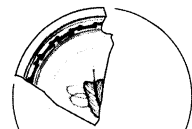
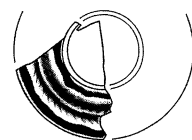
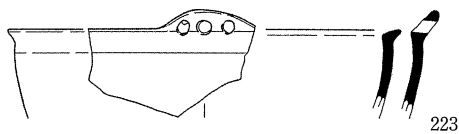
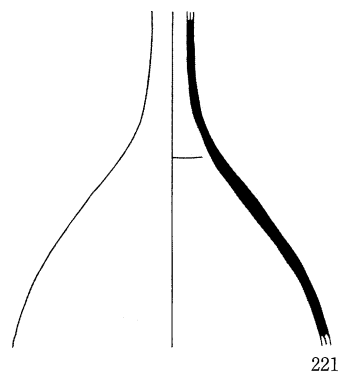
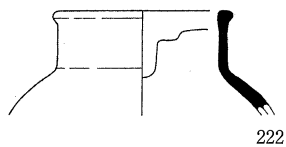
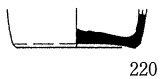
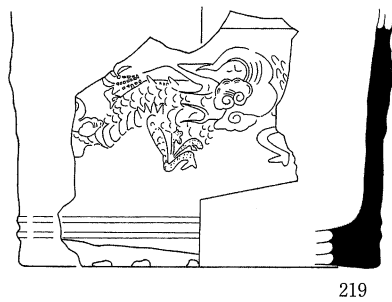
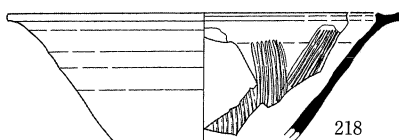
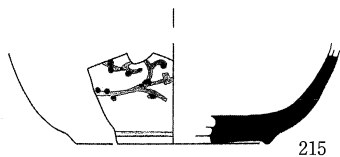
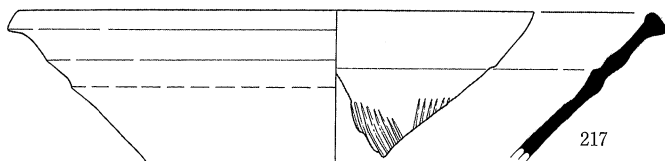
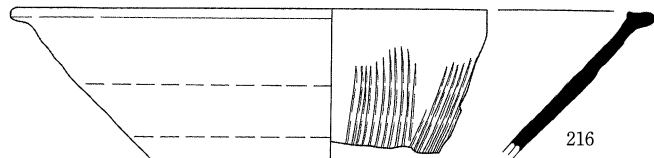
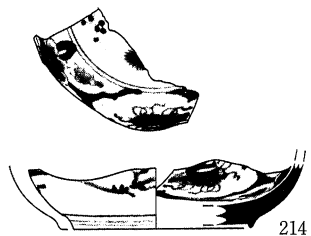


検出面 (194~225)

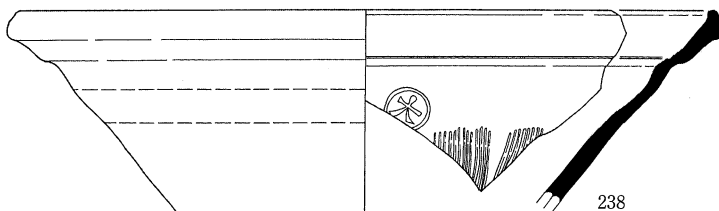
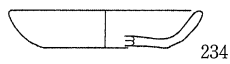
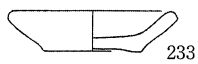
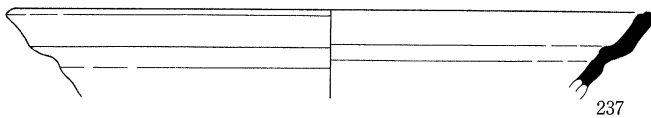
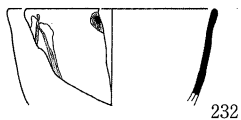
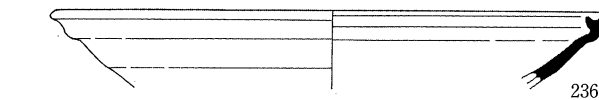
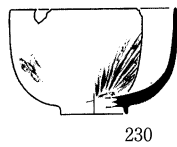
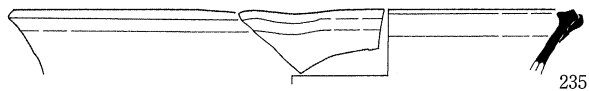
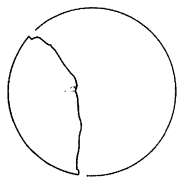
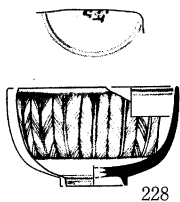


第23図 土器・陶磁器 (5)

0 10cm



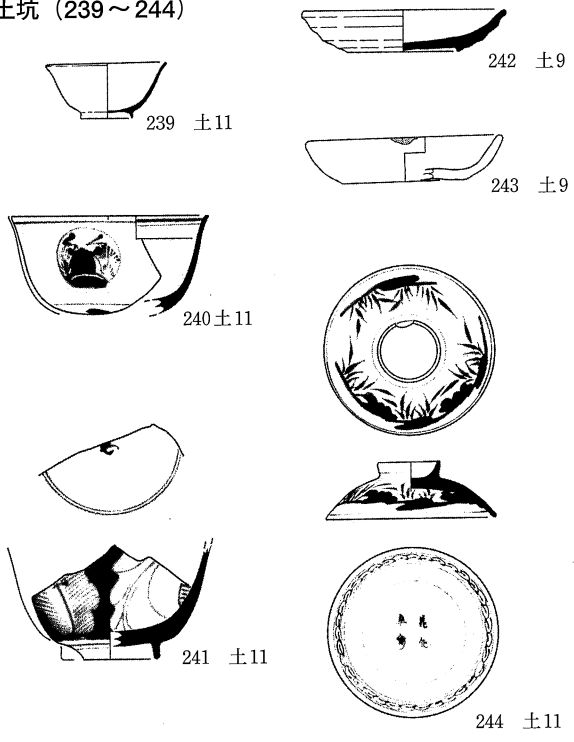
V検
検出面 (226~238)



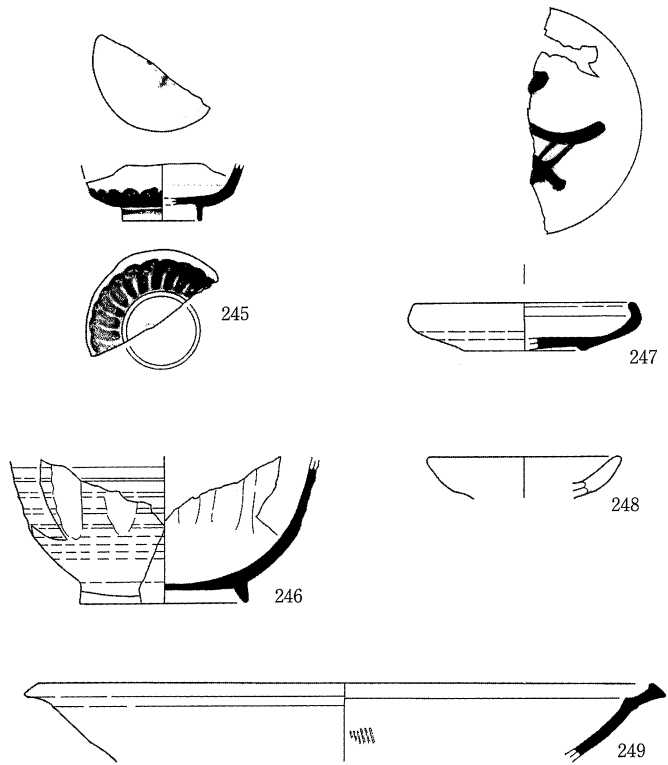
0 10cm

第24図 土器・陶磁器 (6)

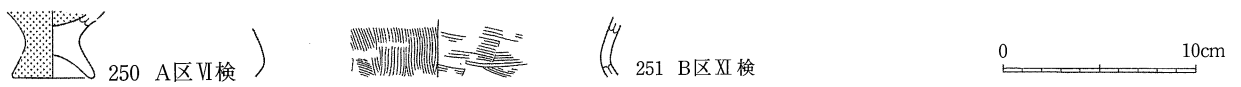
VI検
土坑 (239~244)



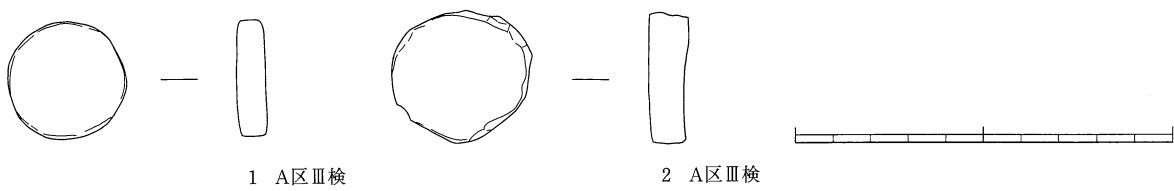
検出面 (245~249)



弥生~古墳時代 (250・251)



土製品



第25図 土器・陶磁器 (7)・土製品

2節 木器

A区から21点、B区から26点、合計47点の木製品が出土した。主な木製品は戦国期から江戸期にかけての遺物だが、B区からは古墳時代の木製品が出土した。器種別に見ると、荷札14点、日用品では箸4点、椀、曲物、栓、箒各1点、装飾品では下駄5点、櫛1点その他・用途不明品などである。以下、各地区の検出面ごとに概要を記述する。また、文字資料の解釈に関しては、まとめて後述する。

A区

第Ⅰ検出面（第26図1）

荷札が1点のみ出土した。荷札の下端は細く加工されている。

第Ⅱ検出面（第26図2～13、第27図14～15）

2～11の荷札は土坑11から出土した。下端が斜めに加工され、荷に刺したのだろう。2と11には縄で縛ったような圧痕がある。12も土坑11から出土し、黒漆地に蒔絵が施されている。出土する箸の大多数が白木であるのに対して珍しい例である。13～15は土坑23から出土した用途不明の板状製品で、両面に斜めの工具痕が多数ある。各々周囲に釘穴があるが、13は釘の頭が遺存している箇所が見られる。14・15は墨書で、14は遺物としては完形だが、上部の墨書が途中で切れており、部材が組み合わさる大型製品の一部だったと考えられる。

第Ⅳ検出面（第27図16）

16は前述の荷札と内容・形態を異にし、桶等の側板の表面を平坦に加工して再利用されたと考えられる。

第Ⅴ検出面（第27図17～19、第28図20）

19・20は1枚の板から2枚の歯を削り出した連歯下駄である。19は後歯以後が欠損しているが、長円形を呈し、前歯の周囲に指頭圧痕が残っている。20は前歯以前と横緒孔の横が欠損しているが、隅丸長方形だったと考えられる。調査で出土した下駄の横緒孔は、いずれも後歯の前にあり、使用した痕跡が見られる。

第Ⅵ検出面（第28図21）

21は隅丸長方形の連歯下駄で完形である。表面に数箇所の擦傷痕と指頭圧痕が見られる。

B区

古墳時代の遺物

以下の遺物は城下町の遺構面より下層の第Ⅺ検出面で発見され、古墳時代前期のものと考えられる。現段階では、松本平最古の木製品である。第Ⅺ検出面は水分の豊富な低湿地帯で、劣化しやすい木製品が良好な状態で遺存していた。取り上げ時に、地山に含まれる腐植物が大量に付着していた。

建築部材（第30図44、45）

44は長さ270.8cmで一端を鉛筆状に削り、中央部と片端を凹状に加工されていた。遺物は長野市川田条里遺跡の屋根材（古墳時代中・後期）に類似し、臼井直之氏（長野県埋蔵文化財センター）によれば、44は竪穴住居の垂木で凹部を梁に掛け、先端を地面に刺して使用したという。45は長さ100.0cmで先端を尖らせ、片端も加工された。使用箇所は不明だが建築材と考えられる。

用途不明品（第29図40～43、第30図46、47）

42、43は自然木と考えられるが、工具で切断した痕跡がある。43には、広範囲に被熱痕が見られる。46は長さ64.4cmの板材で、先端を薄く加工している。47は、側面に凹状の切込みが2箇所ある細長い板状製品で、穴が3箇所貫通している。

戦国時代以降の遺物

第Ⅰ検出面（第28図22、23）

22は箒の穂の一部で、針金で束ねられている。毛の残存状態は良好である。23は楔だが、先端を切り落

とされている。

第Ⅲ・Ⅳ検出面（第28図24～26）

第Ⅲ検出面出土は24のみ。角張って整形され、黒漆で内外面を塗られている。破片ではあるが、残存状態は良い。25・26は第Ⅳ検出面出土。25は丁寧に成形され、径0.3～0.4cmの留釘が3箇所残っている。用途は不明である。26は周囲に0.2cm×0.2cmの木の留釘4箇所と釘穴1箇所が残り、欠損部にも釘が打たれていたと推測される。荷札と考えられるが墨書は不明である。

第Ⅵ検出面（第28図27～29）（第29図30～35）

27は包丁の柄と考えられ、木口に1.2cm×0.4cm×2.1cmの茎の入る溝が掘り込まれ、持ち易く加工されている。28は土坑9から他破片7点と共に出土した白木の箸で、粗く加工されている。29は先端を細く加工されるが、表面や一端が欠損して用途不明である。30も箸だが、長さ34.4cmの大箸は真魚箸と考えられ、上部に径0.3cmの穴が貫通し、表面には黒漆が残る。31も荷札と考えられるが、墨書は片面のみである。32は左半分が欠損しているので墨書の解読をできず、用途不明である。33・34は連歯下駄で隅丸長方形を呈する。33は台の後部に斜めに線刻されて中央には工具痕があり、34は前壺周囲に指頭圧痕が見られ、後歯の摩滅が進んでいる。双方の裏面には加工痕が明瞭に残っている。35は30より短いが通常の箸より大型で、先端には被熱痕がある。

第Ⅷ検出面（第29図36）

36の表面は非常に滑らかに加工され、歯はすべて欠損している。

第Ⅸ検出面（第29図37～39）

37は両端を工具で切断されているが、他に加工の痕跡はない。38と39は溝2から出土し、38の用途は不明である。39は曲物の円板と考えられ、径0.5cmの穴が2箇所開いている。

文字資料（第7表）

解読された文字資料について、まとめて記述する。1は欠損により解読困難であるが、裏面に人名らしき文字が読める。2・3・6・9は「納方」と書かれ、米納入の荷札と考えられる。荷札は表に納方役人の名前、裏に出納地・氏名が記載されている。3の出納地の一日市場村は、現在の南安曇郡三郷村に残る地名である。4・5・7・8・10・11は墨書をほとんど残していないが、2・3・6・9と同じ土坑11から出土し、形態も類似するので同種の荷札と考えられる。『嘉永七年三月改家中名前付図』（1854）によればA区は藩の土蔵に相当し、1～11は土蔵、蔵役所の関連遺物と考えられる。14は品物の数量を記載しているが、品名は不明である。15も荷に関連した板であろう。文字は合羽刷りされており、印刷方法から判断して近代以降の遺物と考えられる。16も荷札で屋号が書かれていた。17は表に「納方」とあるが、第Ⅴ検出面（16世紀後半～末）から出土し、土蔵・蔵役所に関連するか不明である。26は字の欠損が著しく内容は不明である。31は小松齡司宛てに中山道の贄川宿から運ばれた荷札である。当時は中馬による輸送が発達しており、31も中馬により運ばれた可能性がある。小松齡司は、『嘉永七年三月改家中名前付図』（1854）の調査地該当場所にみられる武士名で、出土した土坑10が江戸後期の土坑と推測される。

まとめ

木製品を器類別に見ると、荷札が最も多く発見された。A区からまとめて出土した荷札の大半は『嘉永七年三月家中名前付図』（1854）の土蔵、蔵役所に関連する遺物と考えられる。出土した荷札によって、B区は絵図の小松齡司宅と一致することが判明し、中山道の贄川との流通も実証された。その他の文字資料は六九町が商業取引に関係した場所だったことを示唆しているが、詳しくは分からず、今後の課題である。他の遺物については点数が少なく、他の調査区の出土遺物と併せて検討する必要がある。

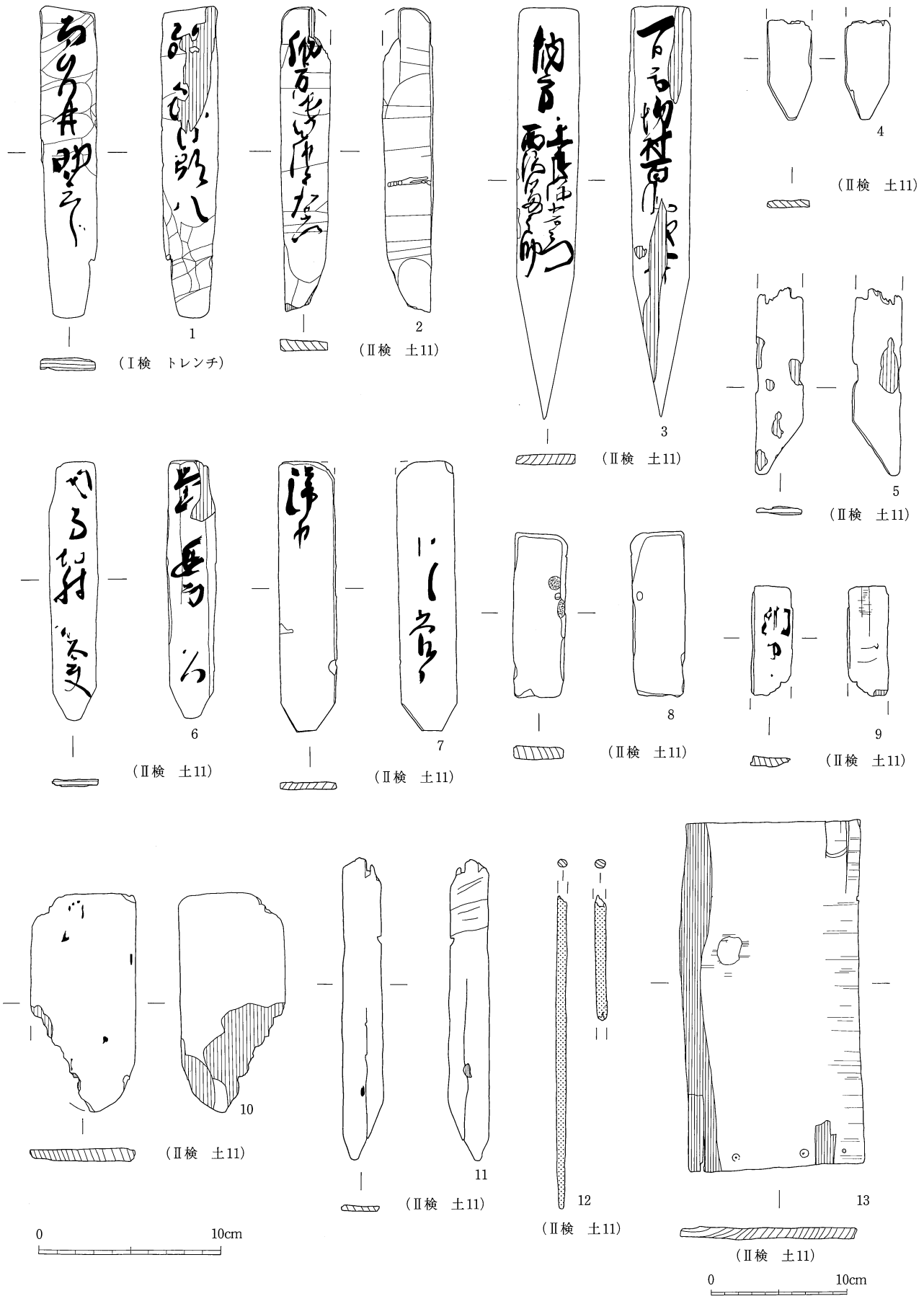
第6表 木製品観察表

図No.	地区・検出面	遺構名	整理番号	器種分類	手法	長さ・口径	幅	厚さ・径・高さ	時代	備考
						(cm)	(cm)	(cm)		
1	A-I	トレンチ	A-I-1	荷札	板材(板目)	17.1	3.0	0.9	19c初	側面に留具痕2箇所
2	A-II	土坑11	A-II-3	荷札	板材(板目)	16.6	2.6	0.5	18c末	
3	A-II	土坑11	A-II-1	荷札	板材(板目)	22.1	3.3	0.5		
4	A-II	土坑11	A-II-8	荷札(?)	板材(板目)	5.4	2.3	0.4		
5	A-II	土坑11	A-II-7	荷札	板材(板目)	10.3	2.5	0.4		
6	A-II	土坑11	A-II-2	荷札	板材(板目)	14.2	2.6	0.4		
7	A-II	土坑11	A-II-11	荷札	板材(板目)	14.9	3.0	0.3		
8	A-II	土坑11	A-II-9	荷札(?)	板材(板目)	8.9	2.8	0.7		
9	A-II	土坑11	A-II-4	荷札	板材(板目)	6.0	2.1	0.5		
10	A-II	土坑11	A-II-5	荷札	板材(板目)	12.1	5.7	0.6		
11	A-II	土坑11	A-II-6	荷札	板材(板目)	16.6	2.2	0.2		
12	A-II	土坑11	A-II-10	箸		17.4	0.5	0.4		金粉入漆塗り
13	A-II	土坑23	A-II-14	板状製品	板材(板目)	25.4	12.7	0.7		留具痕4箇所
14	A-II	土坑23	A-II-12	板状製品	板材(板目)	40.0	15.1	1.2		留具痕5箇所
15	A-II	土坑23	A-II-13	板状製品	板材(板目)	35.5	25.3	1.2		留具痕5箇所
16	A-IV	土坑6	A-IV-1	荷札	板材(板目)	19.3	5.8	0.8	16c末~17c初	
17	A-V	土坑10	A-V-4	荷札	板材(板目)	23.4	2.6	0.6	16c後半~末	
18	A-V	溝2	A-V-2	栓	丸太材(芯もち)			径3.3高7.1		
19	A-V	土坑18	A-V-1	連歯下駄	板材(板目)	13.2	9.6	0.6		指頭圧痕あり
20	A-V	土坑23	A-V-3	連歯下駄	板材(板目)	19.8	9.5	2.7		
21	A-VI	土坑9	A-VI-1	連歯下駄	板材(板目)	19.8	9.6	2.0		
22	B-I	土坑1	A-I-1	箸		45.0				
23	B-I	土坑4	A-I-2	楔	角材(板目)	9.3	2.4	2.0		
24	B-III(拡張部)	検出面	A-III-1	椀	板目	12.7		4.0		漆塗り
25	B-IV(拡張部)	土坑14	A-IV-1	不明	板材(板目)		8.0	厚1.3径33.8		留具痕3箇所
26	B-IV(拡張部)	土坑14	A-IV-2	不明	板材(板目)	14.0	6.2	0.5		留具痕5箇所
27	B-VI(拡張部)	土坑11	A-VI-3	柄	板材(板目)	11.6	2.5	2.0		
28	B-VI(拡張部)	土坑9	A-VI-7	箸		24.0		0.5		他9点
29	B-VI(拡張部)	土坑9	A-VI-6	不明	板目	16.8		1.3		
30	B-VI(拡張部)	土坑10	A-VI-2	箸		34.4		1.4		
31	B-VI(拡張部)	土坑10	A-VI-5	荷札	板材(板目)	14.0	2.1	0.4		
32	B-VI(拡張部)	土坑10	A-VI-4	不明	板材(板目)	7.6	3.5	0.6		
33	B-VI(拡張部)	トレンチ	A-VI-9	連歯下駄	板材(板目)	21.0	10.3	5.2		
34	B-VI(拡張部)	トレンチ	A-VI-8	連歯下駄	板材(板目)	21.5	7.5	3.4		指頭圧痕
35	B-VI(拡張部)	検出面	A-VI-1	箸		24.0		1.1		
36	B-IX	検出面	A-IX-1	櫛		7.6	1.5	1.4		木目不明瞭
37	B-X	溝2	A-X-1	不明	丸太材(芯もち)	27.2		2.5		
38	B-X	溝2	A-X-2	不明	角材(板目)	15.2	4.9	3.4		
39	B-X	検出面	A-X-3	円板	板材(板目)			厚0.7径12.5		穴2箇所
40	B-XI	検出面	A-XI-8	不明	板材(板目)	7.1	1.0	0.4		
41	B-XI	検出面	A-XI-7	不明	板材(板目)	20.3	3.6	2.3		
42	B-XI	検出面	A-XI-4	不明	丸太材(芯もち)	16.7		3.0		
43	B-XI	検出面	A-XI-5	不明	丸太材(芯もち)	17.7		2.9		
44	B-XI	検出面	A-XI-12	建築部材	丸太材(芯もち)	270.8		6.9		
45	B-XI	検出面	A-XI-11	建築部材	板材(板目)	100.0	6.4	4.9		
46	B-XI	検出面	A-XI-9	板状製品	板材(板目)	64.4	13.5	2.7		
47	B-XI	検出面	A-XI-10	板状製品	板材(板目)	43.0	4.3	0.9		

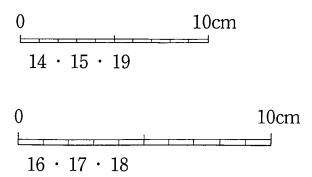
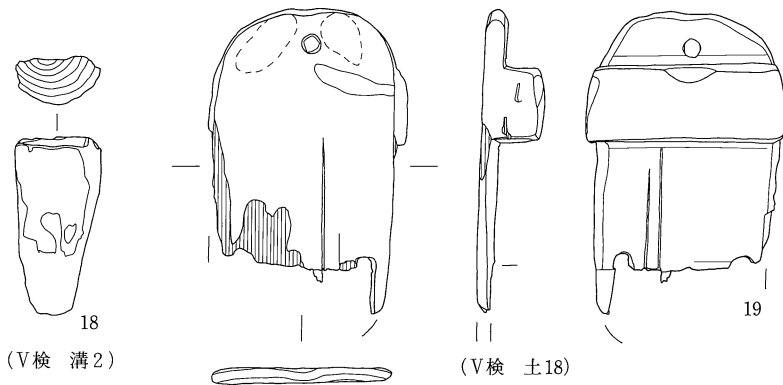
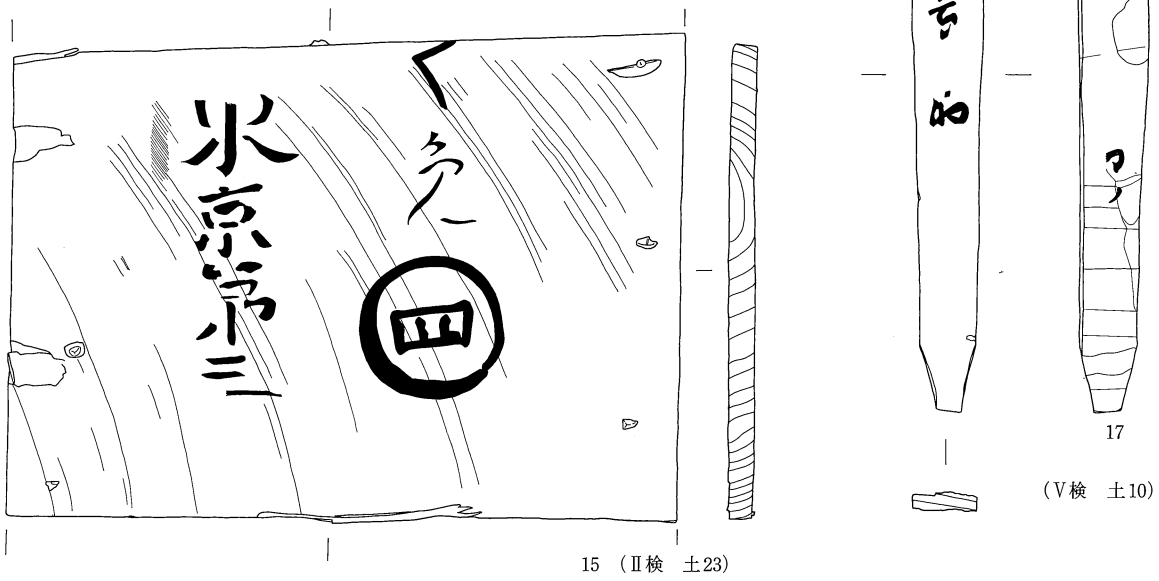
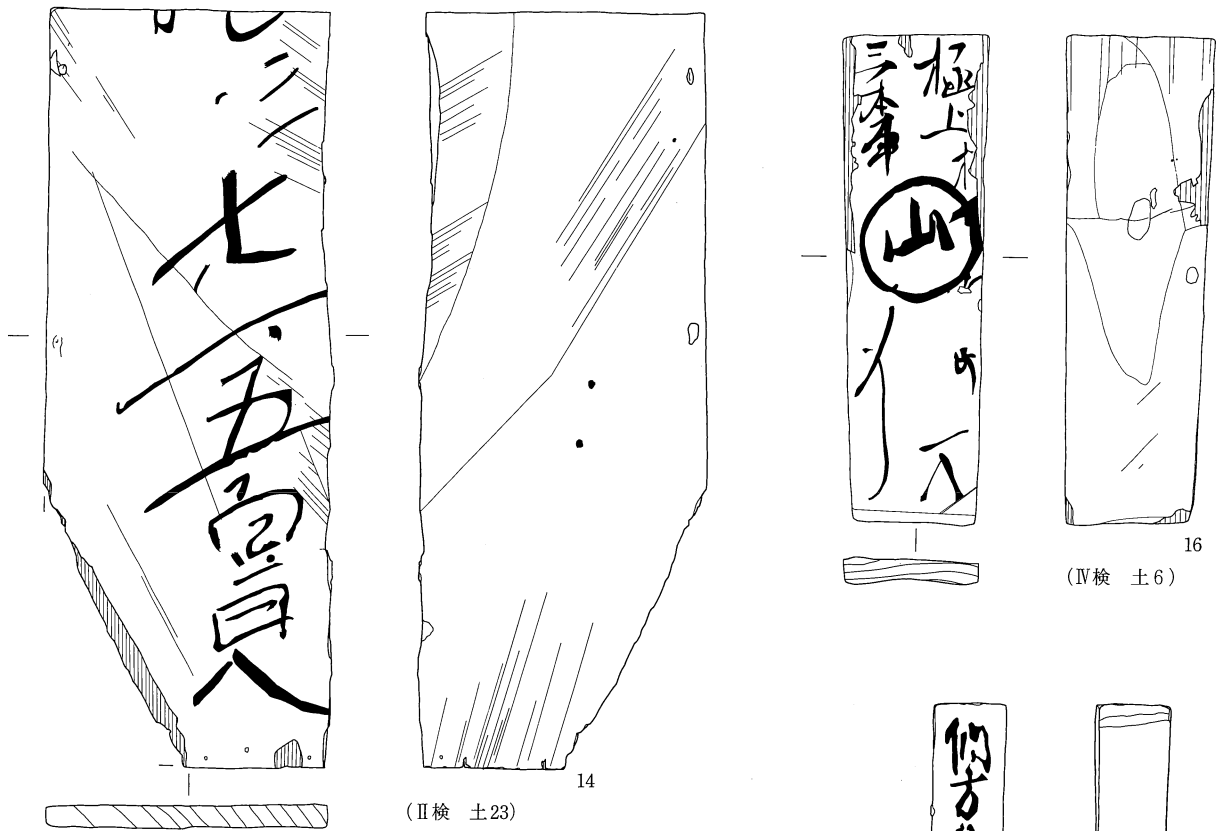
第7表 墨書木簡一覽

10 (裏)「 」	9 (裏)「 」	9 (表)「納方× 」	(裏)「 」	7 (表)「□□× 」	(裏)「□山 □市 衛門」	6 (表)「納方 花村新大夫 〔西カ〕	(裏)「一日市場村 百瀬茂□□」	3 (表)「納方 上良弥小右衛門 西沢留之助」	2 (表)「納方□□左衛門」	(裏)「×□□□ 〔頭八カ〕	1 (表)「□□井□□□ 〔助カ〕
(裏)「□□」	32 (表)「□□」	31 「小松齡司様行 贄川」	上 □□進之	26 「□□□」	(裏)「 」	17 (表)「納方□□□ 」	三本□□□ 〔車カ〕山	16 「極上 □□」	15 「□□□」	14 「×□七〆五百目入」	11 「□□□」

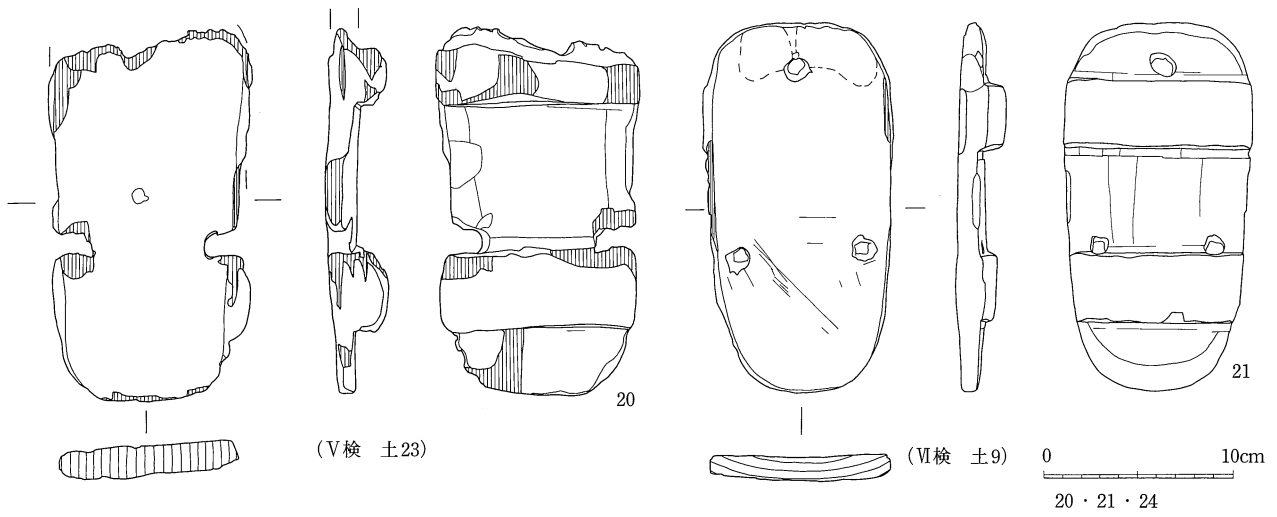
A区 (1~21)



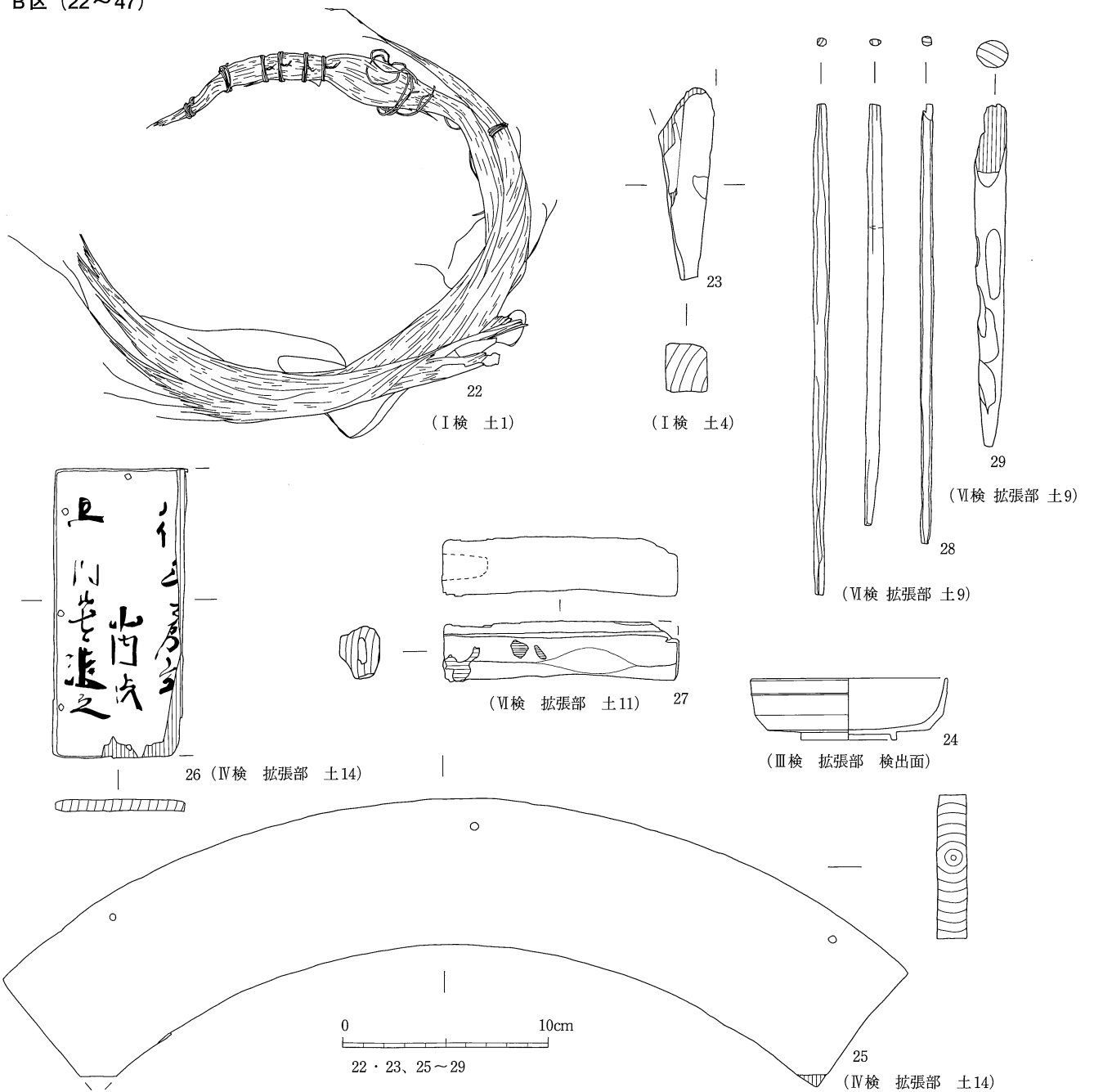
第26図 木製器 (1)



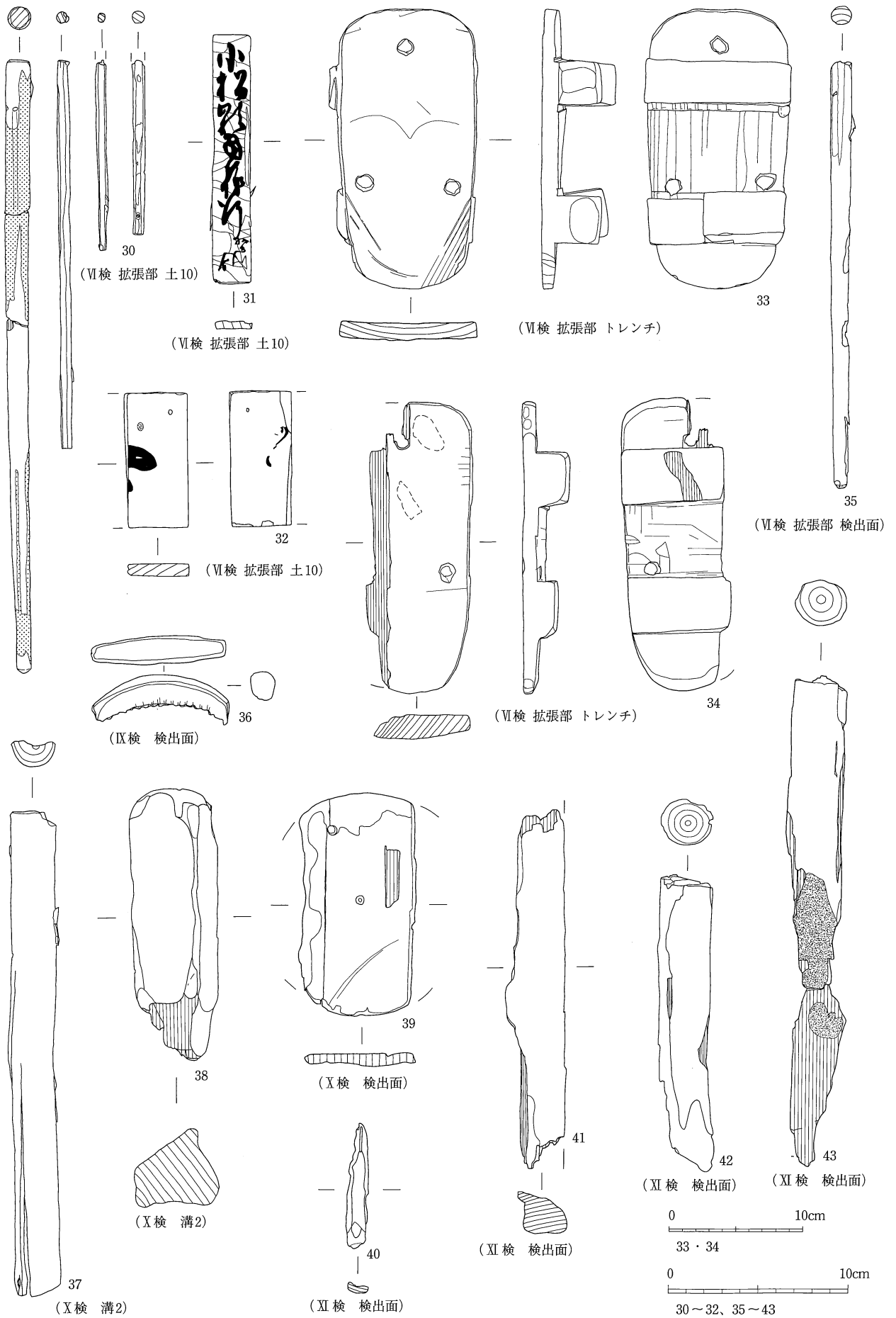
第27図 木製器 (2)



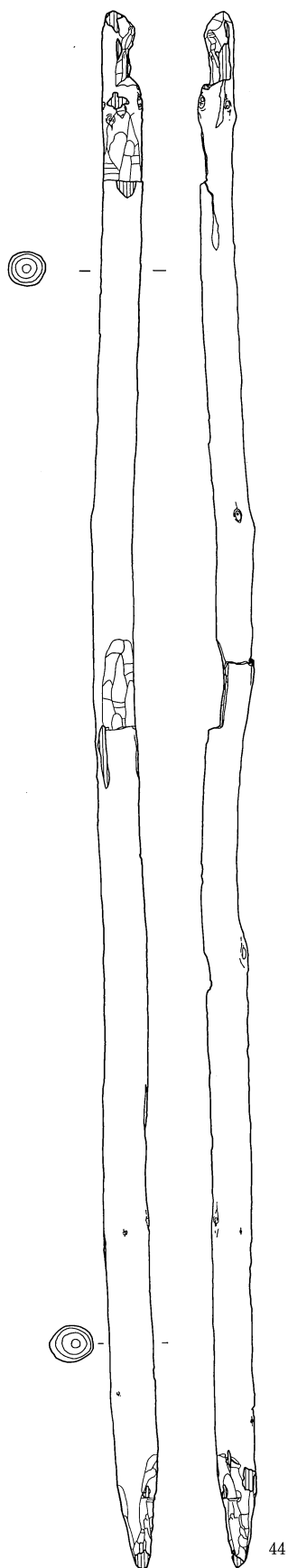
B区 (22~47)



第28図 木製器 (3)

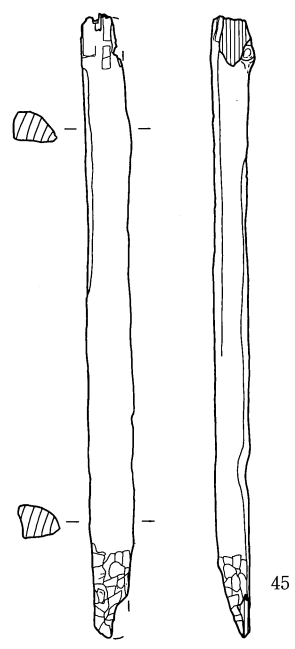


第29図 木製器 (4)



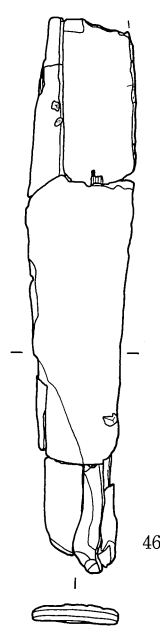
(XI 検 検出面)

44



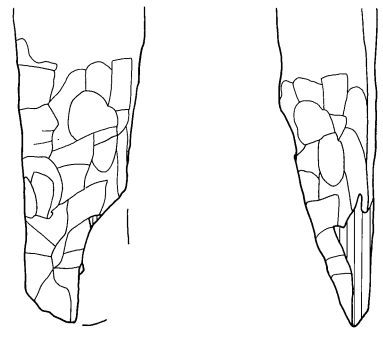
(XI 検 検出面)

45

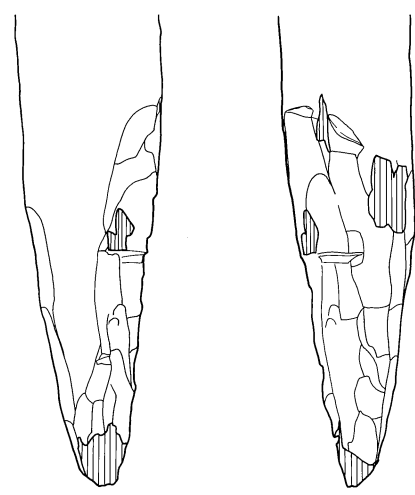


(XI 検 検出面)

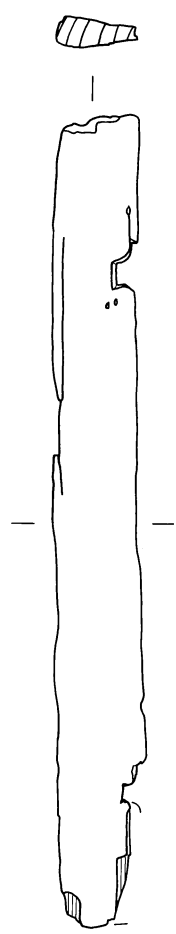
46



45の拡大図

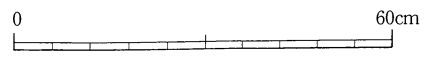


44の拡大図

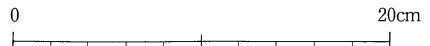


(XI 検 検出面)

47



44 · 45 · 46



第30図 木製器 (5)

3節 石器 (註)

本遺跡では当初石器の回収は行わない方針であったが、結果的に (1) 研磨等多数回の物理的接触による加工が加わる、(2) 黒耀岩・火成岩など明らかに他から持ち込んだと思われる石材を使用する、(3) 砥石・石印など用途が容易に推定できる道具に酷似する、という条件のいずれかを満たす物は回収した。総点数は94点、うちトレンチ、検出面等遺構以外から出土したものが87点を占める。三次元座標記録率が10%に満たず、回収基準も発掘担当者の裁量に依存しているため、一般的な遺跡から出土する一般的な石器に比して例外的な遺物であり、数量的な解析に耐えうるデータではないことをお断りしておく。

11は板状に加工された粘板岩で、中央からやや端寄りに直径約3mmの正円形の穴が穿たれている。近世期防寒用に使われたとされる温石に類似する。26、34は石英安山岩による砥石状石器だが、共に背面に櫛目状の沈線痕が見られる。この特徴は本町4次調査で出土した群馬県甘楽郡南牧村産の砥沢石と推定される砥石群に類似する。本町出土の砥石群は未使用であったが、26、34には使用痕が認められる。QuAn01 (20,34)は両個体がそれぞれB地区拡張部のⅢ検、Ⅵ検から出土しており、この地点での検出面決定に疑義を呈する。23は石灰岩による石印と推定される。刻書は第31図左から表面が「成玉」、裏面が「弾琴対山月」、頂面が「垂」と判読できるが定かではない。側面の刻書は不明である。B地区Ⅺ 検出面より出土した48～97の43点はそのほとんどが折れ面等加工痕のない礫、あるいは自然剥落のみの礫片だが、Ⅺ 検出面が植物遺体を多く含む黒色腐植土層のため、何らかの原因で他から流入した遺物として回収した。うち安山岩が23点、硬砂岩が8点を占める。調査終了間際で三次元座標記録が無いのが惜しまれるが、An02 (81,82,84,88,91)・An03 (90,92,95)と2例の接合例が見られる。

今回の調査では恣意的な回収基準にもかかわらず8例の接合例を確認し、うち3例で剥離・分割順序を特定することができた。近世においても石器の回収基準を明確にし、三次元座標を記録した上で接合すれば、遺構等の相対年代決定の判断に有効であると考えられる。

[註]

近世においては「石製品」という呼称が一般的ではあるが、48～97のような礫片と23のような「石製品」を分かつ基準を判断し難いため、全て「石器」で統一した。

[主要引用・参考文献]

太田圭都「石器」『平瀬遺跡Ⅱ』2000 松本市教育委員会

竹内靖長「松本城下における砥石流通の一事例」『松本市史研究 第九号』1999 松本市

第8表 遺構略号一覧

遺構略号	遺構名
SC	建物址
SD	溝状遺構
SK	土坑
TG	グリッド
TK	検出面
TT	トレンチ

第9表 器種略号一覧

器種略号	器種名	定義
C	石核	剥離調整の痕跡としての剥離痕が認められる個体
F	剥片	剥離調整の痕跡としての剥離面が認められる個体
BC	楔状石核	両極調整の痕跡としての剥離痕が認められる個体
MF	微細剥離痕ある剥片	微細剥離痕の連続が認められる剥片
P	礫	剥離・剥落・研磨・敲打・折れのいずれの痕跡も認められない個体
PT	礫片	自然為による剥落が認められる個体
PT1	礫片1類	折り取りもしくは折れの痕跡が認められる個体
PTC	礫片複合	折り取りもしくは折れの痕跡が認められ、被熱により破砕した個体
P1	礫石器1類	凸面に敲打技術が施されたか、もしくは敲打技術により凸面の形成された石器
P2	礫石器2類	凸面に研磨技術が施されたか、もしくは研磨技術により凸面の形成された石器
PC	礫石器複合	研磨・敲打・まれには剥離技術までもが複合して認められる個体
Ws	砥石状石器	平坦面に研磨技術が施されたか、もしくは研磨技術により平坦面の形成された石器
Su	硯形石器	いわゆる硯

第10表 石材略号一覧

石材略号	石材名
Ob	黒耀岩
An	安山岩
Do	粗粒玄武岩
CrAs	溶質凝灰岩
TuSa	凝灰質砂岩
HSa	硬砂岩
Sa	砂岩
Sh	頁岩
MeTu	変質凝灰岩
Tu	凝灰岩
Sl	粘板岩
Ch	チャート
BiGn	片麻岩
Qu	石英
Ls	石灰岩
QuAn	石英安山岩

第11表 A地区石材単位器種組成

石材略号	C	F	MF	P	PT	PT1	PTC	P1	P2	Ws	計	石材略号
Ob			1								1	Ob
An				1							1	An
TuSa				1							1	TuSa
HSa					1						1	HSa
Sh						1					1	Sh
MeTu					1						1	MeTu
Tu						1					1	Tu
Sl							2		1		3	Sl
Ch		1	1	1							3	Ch
Qu			1								2	Qu
Ls										1	1	Ls
計	1	2	2	1	7	1	2				16	計

第12表 B地区石材単位器種組成

石材略号	C	F	BC	MF	P	PT	PT1	PTC	P1	P2	PC	Ws	Su	計	石材略号	
Ob					1	1								2	Ob	
An	1	1				9	14						3	28	An	
Do							3							3	Do	
CrAs							1						1	2	CrAs	
HSa						7	2	1	1				1	12	HSa	
Sa						1	1	5						7	Sa	
Sh						4	2	1		1	1			9	Sh	
Sl													3	3	Sl	
Ch	1	1				1								3	Ch	
BiGn							1							1	BiGn	
Qu							1							1	Qu	
Ls												1		1	Ls	
QuAn													3	3	QuAn	
計	2	2	1	1	23	24	7	1	1	1	1	1	11	3	78	計

第13表 遺構単位器種組成

検出面	出土遺構1	C	F	BCMF	P	PT	PT1	PTC	P1	P2	PC	Ws	Su	計	
A-I	SC1											1		1	
A-I	TK				1									1	
A-I	TT										1			1	
A-II	SD4					2								2	
A-II	TK		1											1	
A-III	SK9					1								1	
A-III	TK					1								1	
A-IV	SK14				1									1	
A-IV	TK			1							1			2	
A-V	TK		1											1	
A-V	TK	1		1	1									3	
A-不明	TT					1								1	
B-I	SK3				1									1	
B-II	TK					1								1	
B-III	SK24											1		1	
B-III	TK		1	1								1		2	
B-IV	TK	1		1				1			1	2		7	
B-V	TK		1		1					1		1	2	6	
B-VI	TG											2	1	3	
B-VI	TK	1				2	3							8	
B-VI~VII	TK										2			2	
B-VI	TK						3							3	
B-VI	TG						1							1	
B-VI	TK						1							1	
B-VI	TK				22	19		1						42	
B-不明	TK								1					1	
計		3	4	1	3	24	31	7	1	1	2	1	13	3	94

第14表 遺構単位石材組成

検出面	出土遺構1	Ob	An	Do	CrAs	TuSa	HSa	Sa	Sh	Me	Tu	Sl	Ch	BiGn	Qu	Ls	QuAn	計		
A-I	SC1											1							1	
A-I	TK								1										1	
A-I	TT																1		1	
A-II	SD4							1				1							2	
A-II	TK												1						1	
A-II	TK										1								1	
A-III	SK9										1								1	
A-III	TK											1							1	
A-IV	SK14							1											1	
A-IV	TK											1							2	
A-V	TK																1		1	
A-V	TK													2			1		3	
A-不明	TT			1															1	
B-I	SK3									1									1	
B-II	TK								1										1	
B-III	SK24				1														1	
B-III	TK				1													1	2	
B-IV	TK	2	1					1				1				1			7	
B-V	TK									2		3	1						6	
B-VI	TG				1							1							1	
B-VI	TK				1				1	3			1	1		1			8	
B-VI~VII	TK					1		1											2	
B-VI	TK							3											3	
B-VI	TG								1										1	
B-VI	TK										1								1	
B-VI	TK				23	3	1		8	1	4			1	1				42	
B-不明	TK										1								1	
計					3	29	3	2	1	13	7	10	1	9	6	1	3	2	3	94

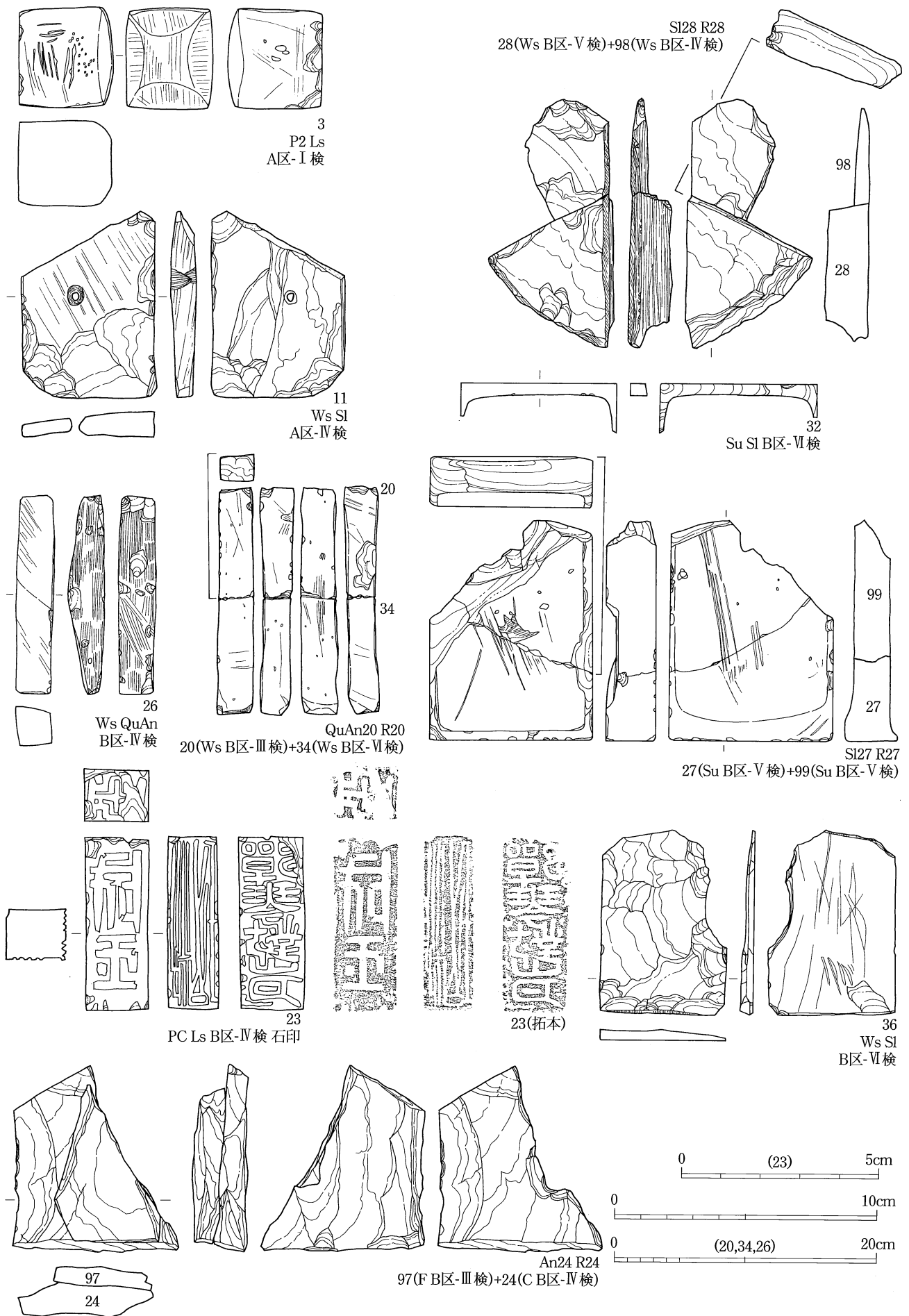
第15表 母岩別資料一覽

母岩ID	母岩番号	接合番号	ID () 内非接合	出土遺構・層雑	接合個体数	総個体数	残存率	重量(g)	剥離・分割順序
1	QuAn01	R01	20,34	20 (TK - N27以北 - III) ,34 (TG - N33W3 - VI)	2	2	1/1	216.0	-
2	An01	R02	24,97	24 (TK - IV) ,97 (TK - III)	2	2	1/16以下	74.7	-
3	Si01	R03	27,99	27 (TK - N27以北 - V) ,99 (TK - V)	2	2	1/4	143.0	-
4	Si02	R04	28,98	28 (TK - N27以北 - V) ,98 (TK - N27以北 - IV)	2	2	1/16	59.0	-
5	Sa01	R05	37,38	37 (TK - N27以北 - VI) ,38 (TK - N27以北 - VI)	2	2	1/16	93.1	-
6	Sa02	R06	45,46,47	45 (TK - No7 - IX) ,46 (TK - No7 - IX) ,47 (TK - No7 - IX)	3	3	1/1	211.2	47 → (45+46)
7	An02	R07	81,82,84,88,91 (83,85,86,89)	81 (TK - XI) ,82 (TK - XI) ,83 (TK - XI) ,84 (TK - XI) ,85 (TK - XI) 86 (TK - XI) ,88 (TK - XI) ,89 (TK - XI) ,91 (TK - XI)	5	9	1/16	113.4	(81+82+84) → (88+91)
8	An03	R08	90,92,95	90 (TK - XI) ,92 (TK - XI) ,95 (TK - XI)	2	3	1/2	19.5	92 → (90+95)

第16表 石器属性一覽

ID	検出面	出土遺構1	出土遺構2	三次元	器種	重量(g)	石材	母岩	接合	備考
1	A-I	SC1	-	×	Ws	34.2	Tu	単		
2	A-I	TK	-	×	PT	8.7	Sh	単		
3	A-I	TT	トレンチ2	×	P2	102.0	Ls	単		
4	A-II	SD4	-	×	PT	3.4	HSa	単		
5	A-II	SD4	-	×	PT	2.4	Sl	単		
6	A-II	TK	E	×	F	6.9	Ch	単		
7	A-III	SK9	NE	×	PT	9.1	MeTu	単		
8	A-III	TK	-	×	PT	28.8	Sl	単		
9	A-IV	SK14	-	×	P	56.5	TuSa	-		
10	A-IV	TK	-	×	MF	1.9	Ob	単		
11	A-IV	TK	-	×	Ws	46.4	Sl	単		
12	A-V	TK	NSOE9付近	×	F	8.0	Qu	単		
13	A-VI	TK	-	×	MF	2.2	Ch	単		
14	A-VI	TK	-	×	PT	11.0	Qu	単		
15	A-VI	TK	-	×	C	252.0	Ch	単		
16	A-不明	TT	-	×	PT	6.2	An	単		
17	B-I	SK3	-	×	P	19.0	Sh	-		
18	B-II	TK	-	×	PT	39.4	HSa	単		被熱
19	B-III	SK24	No.1	○	Ws	666.0	An	単		拡張部
20	B-III	TK	N27以北	×	Ws	116.0	QuAnQuAn20	R20		拡張部
21	B-IV	TK	No.15	○	MF	2.9	Ob	単		
22	B-IV	TK	No.17	○	BC	3.3	Ob	単		
23	B-IV	TK	調査区SW隅	×	PC	24.6	Ls	単		石印
24	B-IV	TK	-	×	C	52.5	An	An24	R24	
25	B-IV	TK	-	×	PTC	250.0	HSa	単		
26	B-IV	TK	N27以北	×	Ws	208.0	QuAn	単		拡張部
27	B-V	TK	N27以北	×	Su	84.5	Sl	Sl27	R27	拡張部
28	B-V	TK	N27以北	×	Ws	48.6	Sl	Sl28	R28	拡張部
29	B-V	TK	N27以北	×	F	5.7	Ch	単		拡張部
30	B-V	TK	N27以北	×	PT	26.0	Sh	単		拡張部
31	B-V	TK	N27以北	×	P2	1.8	Sh	-		拡張部
32	B-VI	TG	N30W0	×	Su	7.6	Sl	単		拡張部
33	B-VI	TG	N30W3	×	Ws	202.0	An	単		拡張部
34	B-VI	TG	N33W3	×	Ws	106.0	QuAnQuAn20	R20		拡張部
35	B-VI	TK	No.7	○	Ws	80.5	An	単		
36	B-VI	TK	N27以北	×	Ws	18.6	Sl	単		拡張部
37	B-VI	TK	N27以北	×	PT1	56.5	Sa	Sa37	R37	拡張部
38	B-VI	TK	N27以北	×	PT1	36.6	Sa	Sa37	R37	拡張部
39	B-VI	TK	N27以北	×	PT	7.4	Sa	単		拡張部
40	B-VI	TK	N27以北	×	PT	9.1	Qu	単		拡張部
41	B-VI	TK	W N27以北	×	PT1	14.2	HSa	単		拡張部
42	B-VI	TK	W N27以北	×	C	81.5	Ch	単		拡張部
43	B-VI~VII	TK	NE	×	Ws	150.0	HSa	単		
44	B-VI~VII	TK	NE	×	Ws	91.5	CrAs	-		軽石
45	B-IX	TK	No.7	○	PT1	32.2	Sa	Sa45	R45	
46	B-IX	TK	No.7	○	PT1	104.0	Sa	Sa45	R45	
47	B-IX	TK	No.7	○	PT1	75.0	Sa	Sa45	R45	
48	B-XI	TG	N18W3	×	PT	15.0	Sh	単		
49	B-XI	TK	-	×	P	172.0	HSa	-		
50	B-XI	TK	-	×	P	59.0	Sa	-		

ID	検出面	出土遺構1	出土遺構2	三次元	器種	重量(g)	石材	母岩	接合	備考
51	B-XI	TK	-	×	P	51.5	HSa	-		
52	B-XI	TK	-	×	P	24.0	Sh	-		
53	B-XI	TK	-	×	P	23.2	Sh	-		
54	B-XI	TK	-	×	P	22.0	Sh	-		
55	B-XI	TK	-	×	P	27.4	Ch	-		
56	B-XI	TK	-	×	P	26.6	HSa	-		
57	B-XI	TK	-	×	P	26.6	HSa	-		
58	B-XI	TK	-	×	P	18.8	HSa	-		
59	B-XI	TK	-	×	P	17.6	HSa	-		
60	B-XI	TK	-	×	P	13.8	An	-		
61	B-XI	TK	-	×	P	11.6	An	-		
62	B-XI	TK	-	×	P	17.2	An	-		
63	B-XI	TK	-	×	P	20.6	An	-		
64	B-XI	TK	-	×	P	28.8	BiGn	-		
65	B-XI	TK	-	×	P	38.2	An	-		
66	B-XI	TK	-	×	P	32.6	An	-		
67	B-XI	TK	-	×	P	13.6	HSa	-		
68	B-XI	TK	-	×	P	4.9	An	-		
69	B-XI	TK	-	×	P	16.5	An	-		
70	B-XI	TK	-	×						欠番
71	B-XI	TK	-	×	PT1	4.8	Sh	単		
72	B-XI	TK	-	×	PT	32.6	CrAs	単		
73	B-XI	TK	-	×	P	19.2	An	-		
74	B-XI	TK	-	×						欠番
75	B-XI	TK	-	×						欠番
76	B-XI	TK	-	×						欠番
77	B-XI	TK	-	×						欠番
78	B-XI	TK	-	×	PT	3.5	HSa	単		
79	B-XI	TK	-							



第31图 石器

第4節 金属器

今回の調査ではA地区47点、B地区82点合計して129点の金属器を回収した。そのうち銭貨は39点。銭貨を除いた90点の中から、比較的残存状態の良好なものを選択して実測を行い、本報告書に実測図を掲載した。A地区出土の遺物が22点、B地区出土の遺物が34点、合計56点を第32・33図に掲載した。銭貨については実測を行わず表に記載するに留めた。出土した銭貨のうち、寛永通寶については、字体によって古寛永と新寛永に大別して記載した。寛永通寶の他に、本遺跡では中国銭も多く出土している。これらについては中国における初鑄年を記載したが、中国で鑄造されたものであるか、日本で摸倣して鑄造したものであるかは不明である。また、雁首銭と呼ばれる煙管の火皿部を叩き潰して平たくしたものも出土している。これは、銭緡せしに混ぜて使ったとする説が一般的で、19世紀には通用銭として扱われていたといわれている註1)。以下、第17表に銭貨について、第18表に実測図を掲載した遺物について記載する。なお遺物の材質については正確な材質の判別が難しいため、磁力に反応するものを鉄とし、緑青の認められるものについては銅もしくは銅を含む合金と記述した。 註1 都立学校遺跡調査会 『白鷗2 都立白鷗高校埋蔵文化財発掘調査報告書』1990

第17表 銭貨一覧表

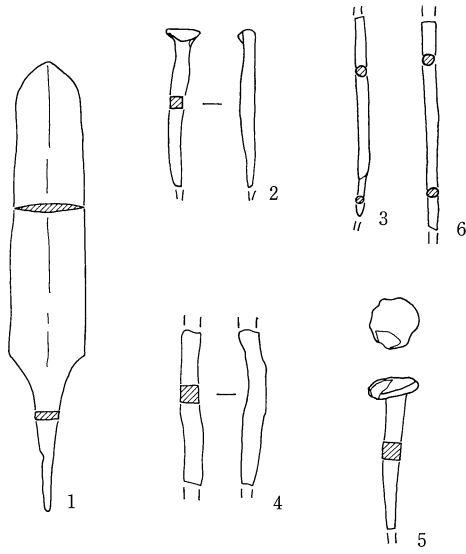
No.	貨幣名	書体	背面の文字	検出面	出土地点	初鑄年	径 (mm)	備考
1	寛永通寶		なし	A区Ⅰ検	検出面	1668	21.7	ほぼ完形、やや屈折、新寛永
2	寛永通寶		なし	A区Ⅱ検	土10	1625	22.4	完形、背面の穿孔とその縁がずれる、古寛永
3	寛永通寶		なし	A区Ⅱ検	溝3	1668	22.7	完形、新寛永
4	雁首銭		なし	A区Ⅱ検	検出面	不明	長径17.7、短径15.2	完形
5	寛永通寶		なし	A区Ⅱ検	Ⅲ検掘り下げ中出土	1668	21.0	完形、新寛永
6	寛永通寶		なし	A区Ⅲ検	検出面	1625	22.7	完形、古寛永
7	寛永通寶		なし	A区Ⅲ検	建2	1668	22.6	完形、新寛永
8	寛永通寶		文	A区Ⅲ検	検出面	1668	23.1	完形、新寛永
9	寛永通寶		なし	A区Ⅲ検	検出面	1668	23.3	完形、新寛永
10	雁首銭		なし	A区Ⅲ検	建2	不明	長径18.9、短径17.9	完形
11	□□□寶		なし	A区Ⅲ検	検出面	不明	21.1	完形、摩滅大
12	□□□□		なし	A区Ⅳ検	溝1	不明	20.7	1/5欠、摩滅大
13	□□□寶		なし	A区Ⅴ検	土8	不明	20.6	完形、摩滅大
14	元豊通寶	行	なし	A区Ⅴ検	溝2	1078(北宋)	21.3	完形
15	洪武通寶		なし	A区Ⅵ検	検出面	1368(明)	18.8	完形
16	永樂通寶		なし	A区Ⅵ検	検出面	1408(明)	22.4	完形
17	元祐通寶	行	なし	A区	検出面	1093(北宋)	21.6	完形
18	寛永通寶		なし	A区	排土	1668	21.9	完形、新寛永
19	寛永通寶		なし	B区Ⅰ検	建1	1668	21.7	完形、新寛永
20	元祐通寶	篆	なし	B区Ⅲ検	検出面	1093(北宋)	21.7	完形
21	寛永通寶		なし	B区Ⅲ検	検出面	1668	22.5	完形、新寛永
22	開元通寶		なし	B区Ⅳ検	検出面	621(唐)	22.4	完形
23	淳化元寶	草	なし	B区Ⅳ検	検出面	990(北宋)	22.1	完形
24	皇宋通寶	真	なし	B区Ⅳ検	検出面	1038(北宋)	22.2	完形、摩滅大
25	元祐通寶	篆	なし	B区Ⅳ検	検出面	1093(北宋)	21.8	完形
26	嘉定通寶		十	B区Ⅳ検	検出面	1208(南宋)	22.5	完形
27	洪武通寶		なし	B区Ⅳ検	検出面	1368(明)	21.3	完形
28	永樂通寶		なし	B区Ⅳ検	検出面	1408(明)	22.8	完形
29	永樂通寶		なし	B区Ⅳ検	検出面	1408(明)	21.0	完形
30	寛永通寶		なし	B区Ⅳ検	検出面	1625	22.4	完形、一部屈折、古寛永
31	寛永通寶		なし	B区Ⅳ検	検出面	1625	22.2	完形、古寛永
32	雁首銭		なし	B区Ⅳ検	検出面	不明	長径17.4、短径15.0	完形
33	雁首銭		なし	B区Ⅳ検	検出面	不明	長径20.0、短径16.4	完形
34	寛永通寶		文	B区拡張部Ⅳ検	検出面	1668	23.6	1/10欠、新寛永
35	寛永通寶		なし	B区Ⅴ検	検出面	1668	22.2	完形、新寛永
36	開元通寶		不明	B区Ⅵ検	検出面	621(唐)	22.7	完形、摩滅大
37	祥符通寶		なし	B区Ⅸ検	検出面	1009(北宋)	22.0	一部欠
38	皇宋通寶	真	なし	B区Ⅸ検	検出面	1068(北宋)	21.9	完形
39	熙寧元寶	真	なし	B区Ⅸ検	検出面	1068(北宋)	24.0	完形

第18表 金属器一覧（銭貨を除く）

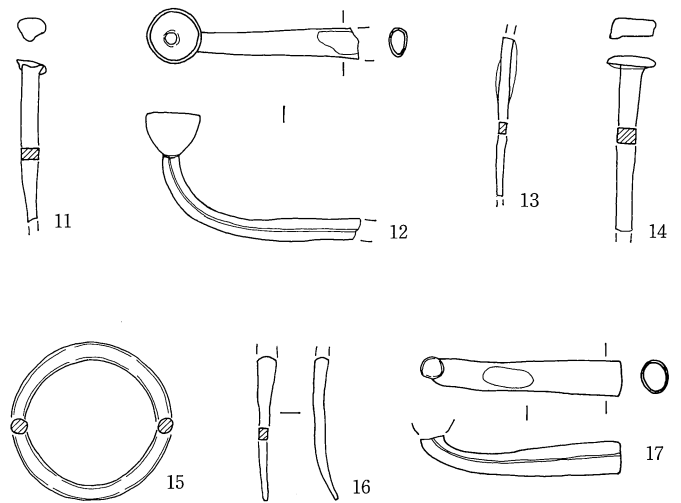
図No.	地区	検出面	出土地点	材質	器種	備考
1	A	I 検	溝1	鉄	槍先?	
2	A	I 検	検出面	鉄	釘	脚部先端欠損。
3	A	I 検	検出面	鉄	不明	断面形の丸い棒状。一端が細くなっている。両端欠損。
4	A	I 検	検出面	鉄	不明	断面形の四角い棒状。両端欠損。
5	A	I 検	検出面	鉄	鋌?	頭部は丸く一部欠損。脚部の断面形は四角。
6	A	I 検	トレンチ	鉄	不明	断面形の丸い棒状。両端欠損。
7	A	II 検	土11	鉄	不明	鉤状を呈すが両端欠損。
8	A	II 検	検出面	鉄	釘	脚部先端欠損。
9	A	II 検	検出面	鉄	不明	断面形の四角い棒状。両端欠損。
10	A	II 検	検出面	鉄	釘	脚部先端欠損。
11	A	III 検	建1	鉄	釘?	頭部は不正形。脚部先端欠損。
12	A	III 検	土9	銅または銅を含む合金	煙管	火皿、雁首が出土。火皿に穿孔あり。雁首の一部に叩打痕あり。
13	A	III 検	土24	鉄	不明	断面形の四角い棒状。両端欠損。
14	A	III 検	土24	鉄	釘	脚部先端欠損。
15	A	III 検	検出面	鉄	不明	外径42mm、内径34mmの環状。断面形は丸い。繋ぎ目なし。
16	A	III 検	検出面	鉄	不明	上端欠損。
17	A	III 検	検出面	銅または銅を含む合金	煙管	雁首のみ出土。一部に叩打痕あり。
18	A	IV 検	土6	鉄	釘	脚部先端欠損。
19	A	IV 検	土6	鉄	釘	脚部先端欠損。
20	A	IV 検	検出面	鉄	楔?	先端欠損。
21	A	IV 検	検出面	銅または銅を含む合金	把手	
22	A	V 検	検出面	鉄	刀子	
23	B	I 検	土1	鉄	釘	
24	B	I 検	検出面	銅または銅を含む合金	不明	幅8mm程の帯状の金属を楕円形に丸め、繋いだもの。
25	B	I 検	土1	鉄	釘	脚部先端欠損。
26	B	III 検	検出面	鉄	不明	上端欠損。
27	B	III 検拡張部	検出面	銅または銅を含む合金	煙管	火皿、雁首が出土。雁首は一部欠損。雁首の一部に叩打痕あり。
28	B	III 検拡張部	検出面	銅または銅を含む合金	煙管	雁首のみ出土。
29	B	III 検拡張部	検出面	鉄	釘	脚部先端欠損。
30	B	III 検拡張部	粘土範囲	鉄	釘	脚部先端欠損。
31	B	IV 検	検出面	銅または銅を含む合金	煙管	火皿、雁首が出土。雁首は一部欠損。雁首の一部に叩打痕あり。
32	B	IV 検	検出面	鉄	不明	幅6mm程の環状。両端欠損。
33	B	IV 検	検出面	不明	目貫?	蟹の模様か?
34	B	IV 検	検出面	鉄	不明	断面形の四角い棒状。両端欠損。
35	B	IV 検	検出面	鉄	釘	脚部先端欠損。
36	B	IV 検拡張部	検出面	鉄	不明	両端欠損。
37	B	IV 検拡張部	検出面	鉄	釘	脚部先端欠損。
38	B	IV 検拡張部	検出面	鉄	釘	脚部先端欠損。
39	B	IV 検拡張部	検出面	鉄	釘	
40	B	IV 検拡張部	検出面	鉄	釘	
41	B	IV 検拡張部	検出面	銅または銅を含む合金	不明	
42	B	IV 検拡張部	検出面	鉄	不明	両端欠損。
43	B	IV 検拡張部	検出面	鉄	不明	両端欠損。
44	B	IV 検拡張部	検出面	鉄	釘	脚部先端欠損。
45	B	V 検	検出面	鉄	釘?	
46	B	V 検	検出面	鉄	不明	上端欠損。
47	B	V 検	検出面	鉄	釘	脚部先端欠損。赤色化している。
48	B	V 検	検出面	銅または銅を含む合金	煙管	火皿、雁首が出土。雁首の一部に叩打痕あり。
49	B	V 検	検出面	鉄	包丁?	
50	B	VI 検	検出面	鉄	不明	幅6mm程の環状。両端は離れている。
51	B	VI 検	検出面	鉄	不明	両端欠損。
52	B	VI 検拡張部	検出面	鉄	釘	脚部先端欠損。
53	B	VI 検拡張部	検出面	銅または銅を含む合金	不明	
54	B	VI 検拡張部	土11	鉄	包丁?	木製の柄の付いた刃物。
55	B	VI 検拡張部	検出面	鉄	鏃?	
56	B	VI 検拡張部	土10	鉄	火箸	脚部先端欠損。

A地区出土遺物 (1~22)

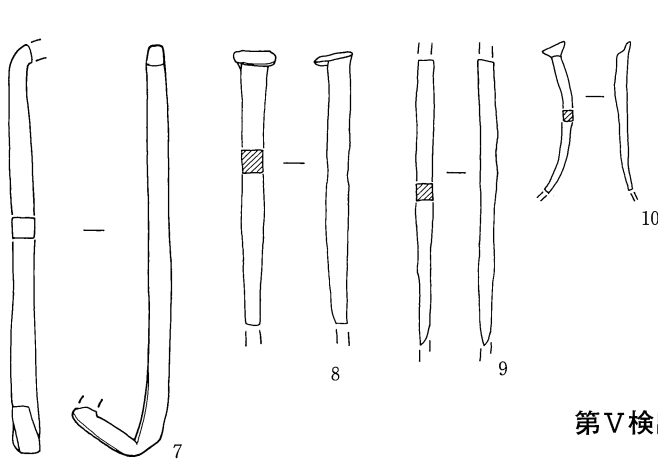
第I検出面 (1~6)



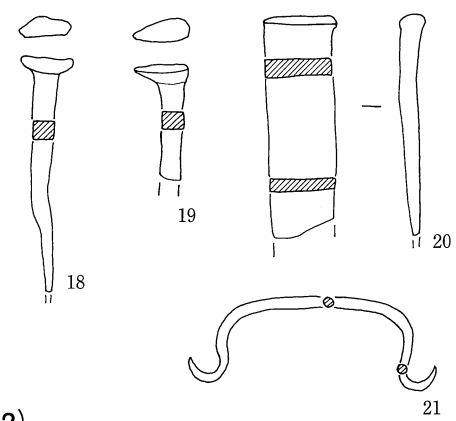
第III検出面 (11~17)



第II検出面 (7~10)



第IV検出面 (18~21)

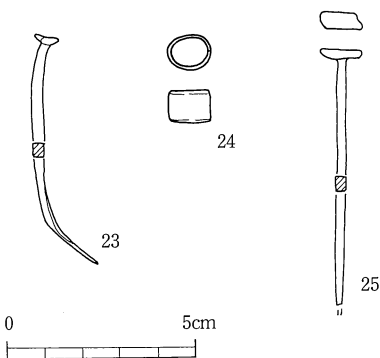


第V検出面 (22)

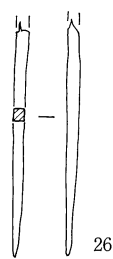


B地区出土遺物 (23~56)

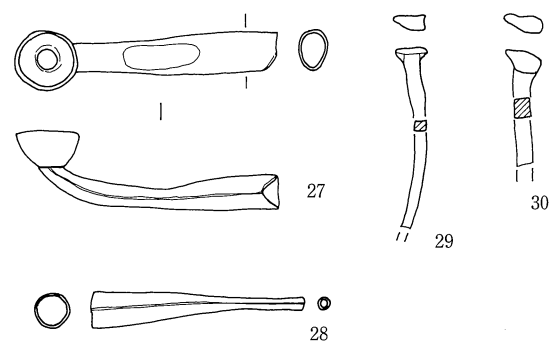
第I検出面 (23~25)



第III検出面 (26)

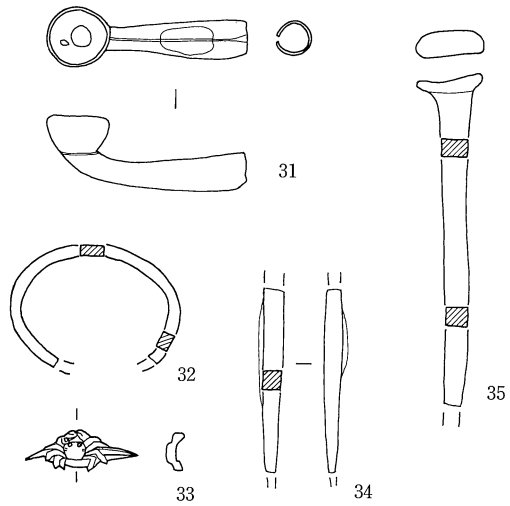


第III検出面拡張部 (27~30)

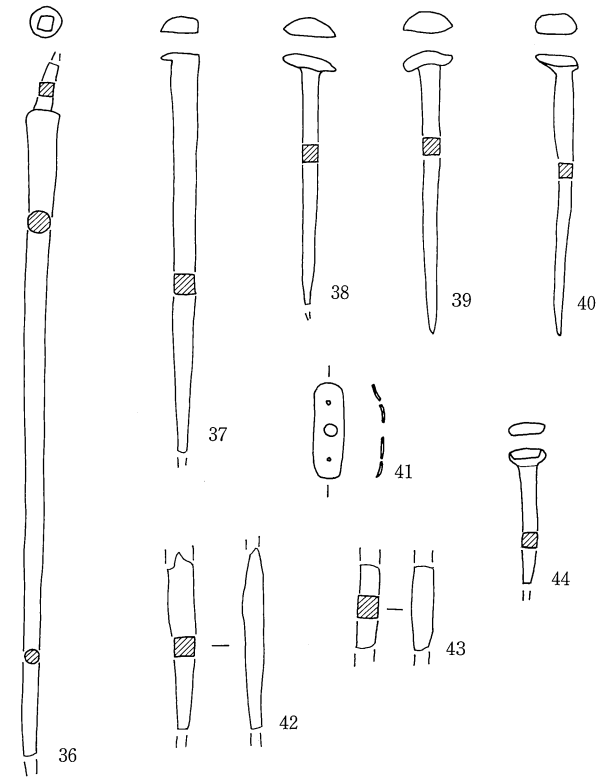


第32図 金属器

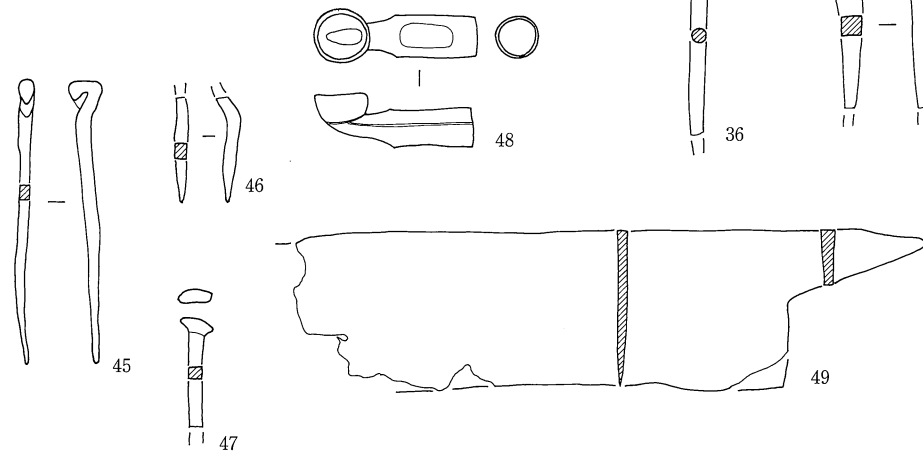
第IV検出面 (31~35)



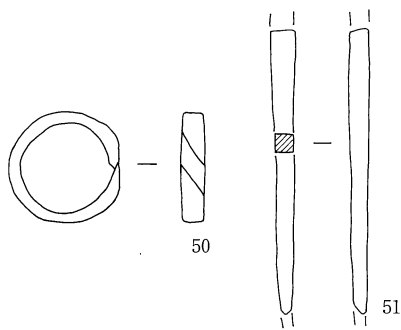
第IV検出面拡張部 (36~44)



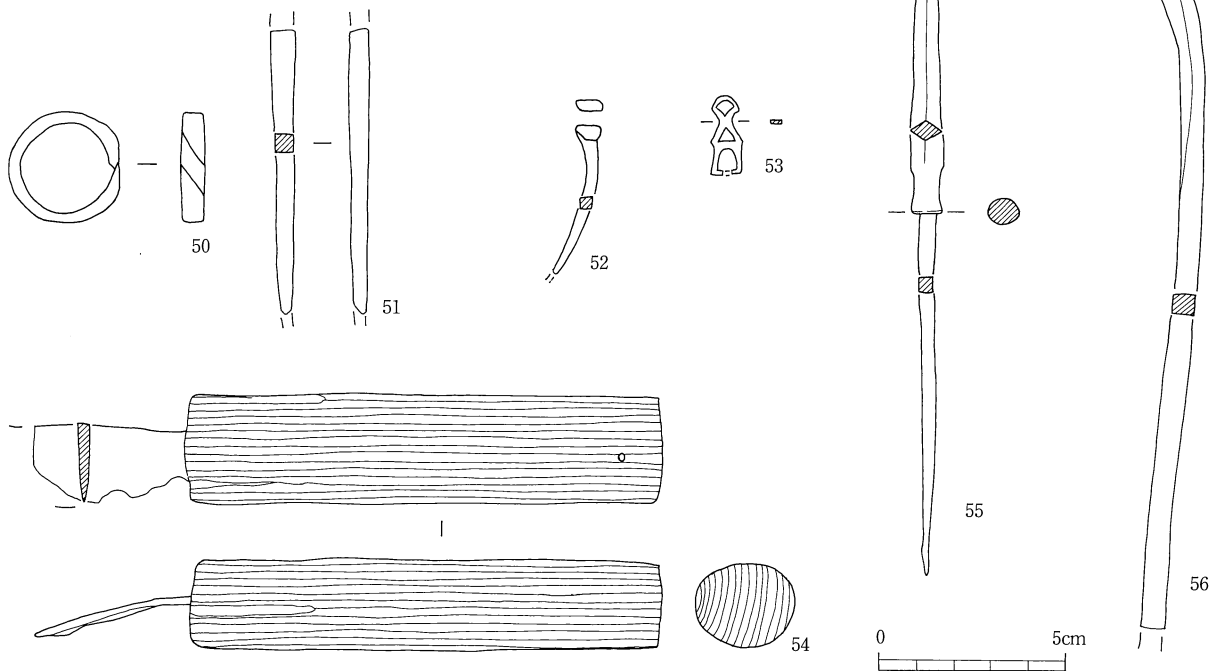
第V検出面拡張部 (45~49)



第VI検出面 (50、51)



第VI検出面拡張部 (52~56)



第33図 金属器

5章 付編1

今回の調査では、B地区において第16層～第23層までの土壌サンプルを採取し、これらについて植物遺体の分析及び結果報告の執筆を信州大学農学部の井上直人博士に依頼した。その結果を以下に記載する。

松本城下町跡六九第4次B地区16～23層における植物遺体の分析

信州大学農学部 井上直人

目的

松本平における古墳時代の植生および作物栽培はほとんど判っていない。そこでその情報を植物遺体によって知ろうとした。

方法

現生の花粉などが混入しないように採集された9層の土壌試料に含まれるイネ科の機動細胞のケイ酸体（プラント・オパール）と花粉について、光学顕微鏡で調査した。試料に蒸留水を加えて攪拌した後に、ピペットでスライドグラスに滴下し、写真撮影した。撮影されたプラント・オパールの形状を測定した（図1）。ひとつの地層あたり、約30枚撮影し、各種類の出現頻度を計算した。形状が典型的でないものは過誤を避けるためにイネとしては計数しなかった。

また、近代のイネ品種を栽培して収穫期に茎葉部を乾燥後に裁断し、予備灰化の後にマッフルで500℃、2時間かけて灰化し、比較対照のためにプラント・オパールを検鏡し、撮影・計測した（図2）。

結果

- 1) 図2に代表的な写真を示した。各地層に最も多く認められたのは、6と7のようなヨシであった。また、イネのプラント・オパールが見出された。
- 2) 地層別の出土状況を示したのが図3である。確認した総数が地層によって異なるため出現頻度で表した。22層でイネの出現率が高く、地層による差が明瞭に見られた。また、イネとイヌビエの出現率とアカマツ花粉の出現率は同調する傾向が見られた。
- 3) イネのプラント・オパールは亜種レベルで形状が異なり、かなり高い精度で *Indica* と *Japonica* を判別できることが報告されている。そこで、その基準となる形状を計測し、地層別に平均値を示した。最も理解しやすいプロポーション（横/縦比）を示す $c/(a+b)$ は21b層と22層で小さく、地層によって出土したものの形状が異なることが示された。この値はあくまでも平均値であり、22層ではかなり多様であった（図1の12と17を比較参照）。さらに比較対照するために、近代の代表的な品種である赤毛とIR8の形状と比較すると、両品種の特徴を有するものが22層などには混在していることが確認された（たとえば12や13と18[*Japonica*]、14や17と25[*Indica*]を比較参照）。
- 4) そこで、計測平均値をもとに亜種の判別関数による推計を実施した（表2）。その結果、19、20、21b、22層では、判別値が明らかに低く、*Indica* の特徴を有し、それより上の層では *Japonica* の特徴が示された。

考察

松本の六九4次B地区の地層断面の植物遺体の調査の結果、その地層の該当する古墳時代には多くのヨシが生育し、ある時代に一時的に稲作が行われていたと推察された。また比較的古い時代に *Japonica* だけでなく *Indica* の混入したイネ系統が栽培されていたことが示唆された。さらに稲作が行われていた時期にはアカマツやイヌビエが見出され、周囲の植生が攪乱されていたと考えられた。

参考文献

- 佐藤洋一郎・藤原宏志・宇田津徹朗(1990) イネの *indica* および *japonica* の機動細胞にみられるケイ酸体の形状および密度の差異. 育種学雑誌40: 495-504.
- 王 才林・宇田津徹朗・藤原宏志(1996) 中国イネの亜種判別における機動細胞珪酸体形状と籾の形態・生理形質の関係. 育種学雑誌46: 61-66.

図1 プラント・オパール形状の計測

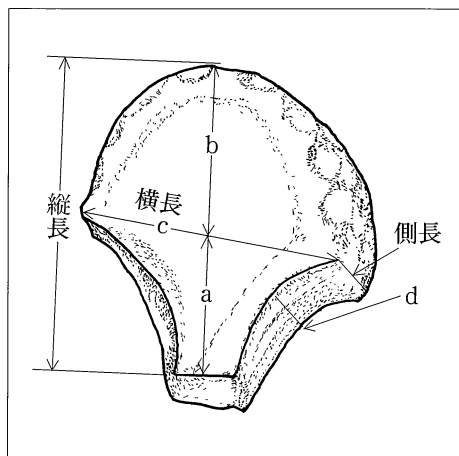


図3 プラント・オパールから見た種組成

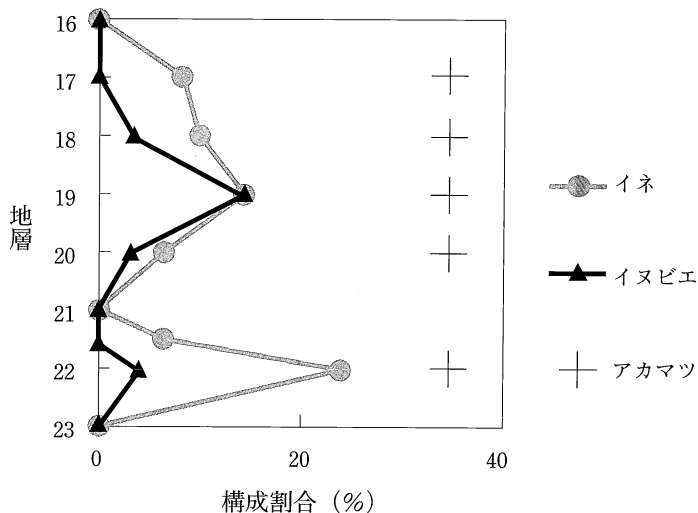


表1 イネのプラントオパールの形状

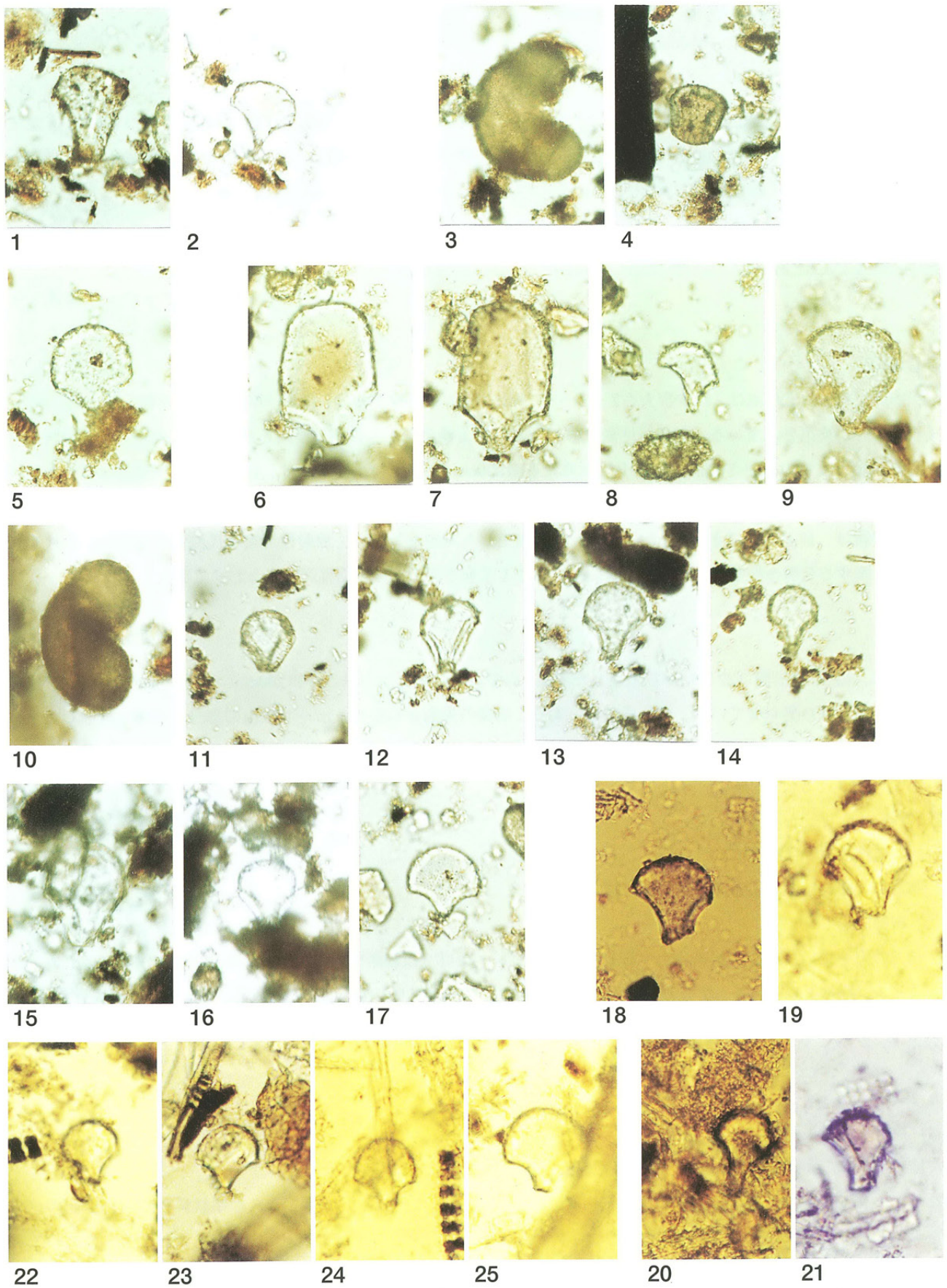
地層	n	形状 (μm)					形状係数	
		縦長			横長	側長	b/a	c/(a+b)
		a	b	a+b	c	d		
16	0							
17	1	14.6	10.4	25.0	22.9	2.1	0.71	0.92
18	3	15.3	10.4	25.7	25.0	4.5	0.68	0.97
19	1	12.5	12.5	25.0	22.9	4.2	1.00	0.92
20	2	11.5	16.7	28.1	26.0	4.7	1.45	0.93
21a	0							
21b	1	11.8	23.2	35.0	27.6	4.2	4.2	0.79
22	8	11.9	18.9	30.8	26.8	3.0	3.0	0.87
23	0							

表2 イネのプラントオパールによる亜種の判別

地層	形状				亜種判別値 Z1 (佐藤ら, 1990)
	縦長 (μm) a+b	横長 (μm) c	側長 (μm) d	形状係数 b/a	
16					
17	25.0	26.8	2.1	0.71	-0.4
18	25.0	28.2	4.5	0.71	-0.4
19	25.0	28.3	4.2	1.00	-1.8 *
20	28.1	30.2	4.7	1.45	-3.2 *
21a					
21b	25.0	29.4	4.2	1.00	-1.8 *
22	31.1	28.3	3.0	1.58	-3.1 *
23					
参考					
赤毛 (Japonica)	25.6	20.1	3.0	0.66	0.1
IR8 (Indica)	20.3	18.7	2.7	0.89	-2.2 *

Z1判別関数: $Z1 = 0.049 \cdot (a+b) - 0.019 \cdot c + 0.197 \cdot d - 4.792 \cdot (b/a) - 2.614$

ただしdは真横からの正確な測定が困難なため、縦長と同様と仮定。
*: Z1 < -0.5 であるため、Indicaに判別されたケース



1～2; 18層 イネ 3～4; 19層 3/アカマツ花粉、4/イヌビエ 5; 20層 イネ 6～9; 21b層 6～7/ヨシ、他はイネ
 10～17; 22層 10/アカマツ花粉、他はイネ 18～21; 参考資料/Japonica品種 赤毛(1999年信州大学産)
 22～25; 参考資料/Indica品種 IR8(1999年信州大学産)

図2 出土したプラント・オパールと花粉

6章 付編2

今回の調査ではB地区第Ⅺ検出面において木器が出土した。同検出面では古墳時代前期のものと推定される土器が出土しており、木器も同時代に帰属する可能性があったため、この木器の放射性炭素年代測定をパリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。その結果を以下に記載する。

松本城下町跡六九第4次調査出土木材の放射性炭素年代測定

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

松本城下町跡六九地点は、松本市大手2-2-8に所在する。本遺跡からは、江戸～明治時代の建物址や土坑、礎石、集石遺構等が検出されている。また、地表下約180cmの第Ⅹ検出面からは溝が検出され、その底部からは古墳時代の土師器が出土している。さらに、その下位の地表下約230cmの第Ⅺ検出面からは、古墳時代の土師器と共に木器が出土したことから、当該期の遺跡の存在も想定されている。

今回の分析は、前述した第Ⅺ検出面（22層）から出土した木器を対象に、放射性炭素年代測定を実施し、同検出面の年代に関する資料を得る。また、試料の由来に関する情報を得るため、樹種同定も合わせて実施する。

1. 試料

試料は、第Ⅺ検出面（22層）から出土した木器1点である。木器は、長さが約280cm、径約7cmの丸棒状を呈し、一方の端部を削り尖らせている。分析試料は、尖った端部の先端から約160cm～170cmの部分を切断・採取したものである。本試料を対象に、放射性炭素年代測定と樹種同定を実施する。

2. 方法

(1) 放射性炭素年代測定

測定は、株式会社加速器分析研究所の協力を得た。

(2) 樹種同定

剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で観察・同定する。

3. 結果

(1) 放射性炭素年代測定

結果を表1に示す。測定年代値（補正年代値）は、約1860年前の値を示した。

なお、 $\delta^{13}\text{C}$ の値は、加速器を用いて試料炭素の ^{13}C 濃度（ $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ ）を測定し、標準試料PDB（白亜紀のベレムナイト類の化石）の測定値を基準として、それからのずれを計算し、千分偏差（‰；パーミル）で表したものである。今回の試料の補正年代は、この値に基づいて補正をした年代である。

(2) 樹種同定

結果を表1に示す。木材は、針葉樹のマツ属複維管束亜属に同定された。以下に、主な解剖学的特徴を記す。

・マツ属複維管束亜属（*Pinus* subgen. *Diploxylon*） マツ科

仮道管の早材部から晩材部への移行は急～やや緩やかで、晩材部の幅は広い。垂直樹脂道及び水平樹脂道が認められる。

分野壁孔は窓状となり、放射仮道管内壁には顕著な鋸歯状の突出が認められる。放射組織は単列、1～15細胞高。

4. 考察

第Ⅻ 検出面（22層）から出土した木製品の測定年代値（補正年代値）は、約1860年前の値を示した。

放射性炭素年代は、測定法自体が持つ誤差や、測定的前提条件である大気中の ^{14}C の濃度が過去において一定ではなかったことなどから、年輪などから測定されたいわゆる暦年代とは一致しない。これらのことから、年輪年代による暦年代既知の年輪についての放射性炭素年代測定を実施することで、暦年代と放射性炭素年代を両軸とする補正曲線が作られている（Stuiver, M. *et al*, 1998）。これによれば、今回測定された測定年代値の暦年代は、約1825年前の2世紀頃に相当する。すなわち、木器の年代値は、1世紀末～2世紀頃と考えられ、弥生時代後期（関, 1985）に相当する年代値を示す。分析試料である木器と同層からは土師器が出土しており、今回の分析結果は発掘調査による所見と比較してやや古い年代を示している。

今後、今回得られた分析結果を評価するために、同層位から出土した他の木器や木材の分析調査例を得るとともに、木器の詳細な出土状況など考古学的な所見と合わせて評価することが望まれる。また、木器の樹種は、マツと同定されたことから、木器が出土した22層やその下部の堆積物を対象として、花粉分析や植物珪酸体分析を実施し、当該期における植物利用や周辺の植生に関して評価・検討したいと考えている。

表1 放射性炭素年代測定および樹種同定結果

試料名	整理番号	試料の質	樹種	補正年代 BP	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	測定年代 BP	Code.No.
松本城下町跡六九地点第4次調査出土木材	A-11-12	木材	マツ	1860 ± 60	-25.5	1870 ± 60	IAA-65

- 1) 年代値の産出には、Libbyの半減期5568年を使用。
- 2) BP年代値は、1950年を基点として何年前であることを示す。

引用文献

- 関 俊彦（1985）「弥生土器の知識」, 183p., 東京美術.
- Stuiver, M., Reimer, P.J., Bard, E., Beck, J.W., Burr, G.S., Hughen, K.A., Kromer, B., McCormac, G., van der Plincht, J. and Spurk, M. (1998) INTCAL98 radiocarbon age calibration, 24,000-0 cal BP. *Radiocarbon*, 40, p.1041-1083.



A地区全景（南から）

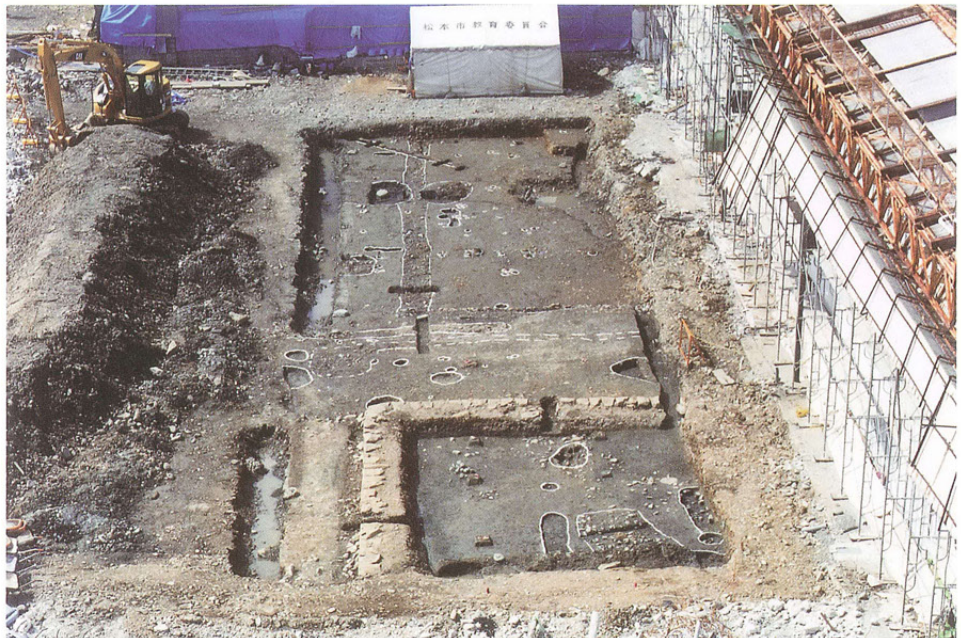


B地区全景（北から）

A地区第Ⅰ検出面
(南西から)



A地区第Ⅱ検出面
(東から)



A地区第Ⅱ検出面
南側部分
(東から)





A地区第Ⅲ検出面
(東から)



A地区第Ⅲ検出面
南側部分
(東から)

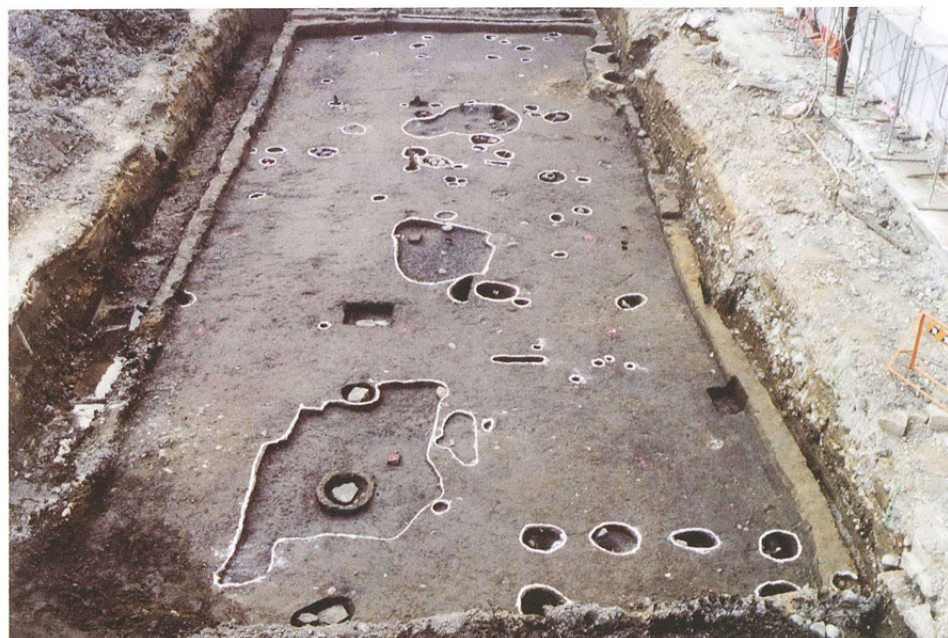


A地区第Ⅳ検出面
(東から)

A地区第V検出面
(東から)



A地区第VI検出面
(東から)



B地区第I検出面
(東から)





B地区第Ⅲ検出面
(東から)



B地区第Ⅲ検出面
拡張部
(北から)



B地区第Ⅳ検出面
(東から)

B地区第Ⅳ検出面
拡張部
(北から)



B地区第Ⅴ検出面
拡張部
(北から)



B地区第Ⅵ検出面
拡張部
(北から)





B地区第Ⅷ検出面
(東から)



B地区第Ⅸ検出面
(東から)



B地区第Ⅹ検出面
(東から)

B地区第Ⅻ 検出面
(東から)



A地区北壁断面
E9付近



A地区北壁断面
E12付近





B地区西壁断面上部
N18付近



B地区西壁断面下部
N18付近



B地区第X—XI検出面
西壁断面図N15付近



A地区第Ⅲ検出面 建物址1 (南から)



A地区第Ⅲ検出面 建物址2 (西から)



A地区第Ⅲ検出面 建物址2 断面 (南から)



A地区第Ⅲ検出面 土坑38出土状況 (北から)



B地区第Ⅳ検出面 集石遺構 (北から)



B地区第Ⅵ検出面 瀬戸美濃産 鉄釉茶入出土状況



B地区第Ⅷ検出面 土坑21 断面 (西から)



B地区第Ⅺ検出面 木器出土状況 (北から)



13



110



134



103



5



229



135



123



58



60



130



170



126



228



227



171



104



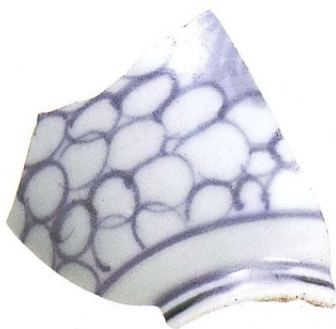
162



35



93



118



52



90



249



14



99



230



174



106



67



176



70



192



141



136



124



214



183



180



164



238



247



155



16



44



89



251



250



1



115



33



145



147



151



20



154



169



14



16



31



2



3表



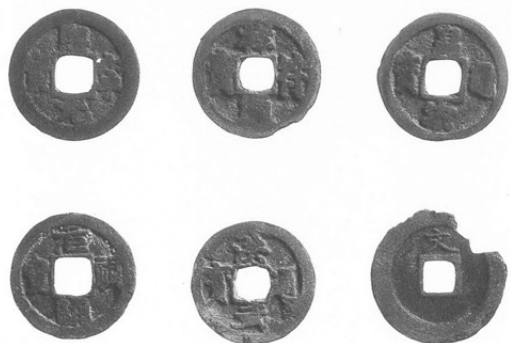
22



33



1



2

錢貨写真1 上段左からNo.26 嘉定通寶、No.23 淳化元寶、No.28 永樂通寶
下段左からNo.22 開元通寶、No.2 寬永通寶、No.32 雁首錢

錢貨写真2 上段左からNo.39 熙寧元寶、No.37 祥符通寶、No.38 皇宋通寶
下段左からNo.20 元祐通寶、No.27 洪武通寶、No.34 寬永通寶

松本城下町跡 六九4次 緊急発掘調査報告書抄録

ふりがな	ながのけんまつもとし まつもとじょうかまちあと ろっく だい4じ きんきゅうはくつちょうさほうこくしょ							
書名	長野県松本市 松本城下町跡 六九 第4次 緊急発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	松本市文化財調査報告							
シリーズ番号	No.160							
編著者名	赤羽裕幸、小山高志、竹内靖長、中村慎吾、森義直、廣田早和子							
編集機関	松本市教育委員会							
所在地	〒390-8620 長野県松本市丸の内3番7号 TEL 0263-34-3000(代)							
	(記録・資料保管:松本市立考古博物館 〒390-0823 松本市中山3738-1 TEL 0263-86-4710)							
発行年月日	平成14(2002)年3月15日 (平成13年度)							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
まつもとじょうかまちあと 松本城下町跡 ろっく 六九 第4次	ながのけんまつもとし 長野県松本市 おおて 大手2丁目	20202	157	36度 13分 53秒	137度 58分 16秒	20000918～ 20010416	1915.2m ²	松本六九リバーサイド地区 市街地再開発事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
松本城下町跡	その他 (城下町)	近世 中世 古墳	近世 建物址 10棟 木樋 1条 溝状遺構 13条 土坑 358基		中世・近世 陶磁器 土師器 木器 金属器 石器 古墳 土器 木器			A地区においては大規模な建物址を確認するなど、16世紀から19世紀の良好な資料を得ることができた。また、B地区においては中世の面のさらに下層において、古墳時代前期と推定される土器と、それに伴って木器を確認することができた。

松本市文化財調査報告 No.160

長野県松本市

松本城下町跡 六九 第4次

緊急発掘調査報告書

発行日 平成14年3月15日

発行者 松本市教育委員会

〒390-8620

長野県松本市丸の内3番7号

印刷 株式会社 総合印刷

